

後の業平文治

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂編纂

青空文庫

え、此の度は誉れ高き時事新報社より、何か新作物を口演致すようとの御註文でございますから、嘗て師匠の圓朝が喝采を博しました業平文治の後篇を申し上げます。圓朝師が在世中、数百の人情、嘶を新作いたしました事は皆様が御承知であります。本篇は師が存生中、筋々を私にお話しになりました記憶の儘を申上ぐる次第であります。そも私が師匠の門に入りましたのは御維新前で、それから圓橘となりましたのが明治二年の五月でございます。まだ其の頃は圓朝師も芝居掛り大道具というので、所謂落語と申しましては一夜限り或は二日続きぐらいのもの、其の内で永く続きましたのが新皿屋敷、下谷義賊の隠家、かさねヶ淵の三種などでございます。それより素話になりましてからは沢の紫（粟田口）に次では此の業平文治でございます。その新作の都度私どもにも多少相談もありましたが、その作意の力には毎度ながら敬服して居ります。師匠は皆様が御存じの通り、業平文治は前篇だけしか世に公にいたしませぬが、その当時私

は後の文治の筋々を親しく小耳に挟んで居りました。即ち本篇が師匠の遺稿にかゝる後の業平文治でございませぬ。さて師匠存生中府下の各寄席で演じ、または雑誌にて御存じの業平文治は、安永の頃下谷御成街道の角に堀丹波守殿家来、三百八十石浪島文吾という者の悴でございまして、故あつて父文吾の代より浪人となり、久しく本所業平橋に住居いたして居りましたが、浪人でこそあれ町地面屋敷等もありまして、相応の暮しをして居りました。で、業平橋に住居して居りました処から業平文治といひますか、乃至浪島を誤つて業平と申しましたか、但しは男の好いところから斯く綽名いたしましたものは確と分りませぬ。併し天性弱きを助け強きを挫ぐの資性に富み、善人と見れば身代は申すに及ばず、一命を擲つてもこれを助け、また悪人と認むれば聊か容赦なく飛菟つて殴り殺すという七人力の俠客でございませぬ。平生荒々しき事ばかり致しますので、母親も見兼て度々意見を加えましたが、強情なる文治は一向肯入れませぬ。情深き母親も終には呆れ返つて、「これほど意見しても肯かぬ気性の其方、行く／＼は親の首へ縄を掛けるに相違ない、長生して死恥を搔こうより寧そのこと食事を絶つて死ぬに越したことはない」と涙を流しての切諫、それを藤原喜代之助が見兼て母に詫入れ、母は手ずから文治の左の腕に母という字を彫付け、「以来は其の身を母の身体と思つて大

切にいたせよ」と申付けまして、それからというものは一切表へ出しませぬ。さア今まで
 表歩きばかりしていた者が、俄に家にばかり居るようになりましたから、少しく身体の具
 合が悪くなりました。母も心配して、気晴しに参詣でもするが宜いと云われて、母と同
 道で本所の五つ目の五百羅漢へ参詣の帰り途、紀伊國屋友之助の大難を見掛け、日頃の気
 性直ぐに助けようとは思いましたが、母の手前そういう訳にもまいりませぬから、渋々
 我が家へ帰り、様子を尋ねますると、友之助という者が、大伴 蟠龍軒と賭碁を打つて負
 けましたので、女房お村を奪られた上に、百両の証文が三百両になつているという、友之
 助は斯くと聞いて大いに怒り、大伴に向つて悪口いたしましたので、蟠龍軒は友之助を
 取つて押え、高手小手に縛り上げて割下水の溝へ打込んだという話を聞き、義憤むら／
 くと発して抑え難く、ついに蟠龍軒の道場へ踏込み、一味加担の奴ばらを打殺し、大伴だ
 け打漏して、窃かに自宅へ帰つたという処までが、故圓朝師の話でございます。これよ
 り私が予て聞きおぼえたる記憶を喚起して、後の文治の伝記を伺います。さて其の翌日
 は安永五年の六月三十日でございます、蟠龍軒の道場にて何者にか数多の者が殺された
 という届出がありますから早速北割下水蟠龍軒の道場へ御検視が御出張になりましたと
 味いたしました、誰が殺したのか一向分りませぬ。其の頃八丁堀の町与力 小林藤十

郎ろう という人は、「これは多分蟠龍軒のためさん／＼恥辱を受けた友之助の仕事であらう」と疑いましたが、誰たれあつて文治の仕事と心付く者はございませぬ。まして百日あまり外出いたしませず、また近所の者は日頃文治を蔭かげでさえ呼棄てにする者はないくらいな人望家んぼうか、子供に至るまで、業平の旦那、業平の旦那。と敬つて居おるのでありますから、文治と疑う者のないのも道理でございませぬ。その明ある日、小林藤十郎殿は本所の名主うちの家へ出しゅつ 役やく いたし、また其の頃八丁堀にて捕者とりての名人と聞えたる手先二人は業平橋の料理屋にまいりました。

二

手先の林藏りんぞうと申します者が立花屋たちばなやへ参りまして、

林「親方ア宅うちかえ」

主「これは親分さん、さアどうぞ此方こちらへお上りなさいまし、おい、お火を持って来い」

林「親方、今日来たのは外ほかじゃアねえ、少し大切だいじな事があつて来たのだから不都合のねえように云つてくんよ」

主「へえ大切な御用と云うのは何事ですか」

林「奥に友之助が隠れているな」

主「えっ」

林「やい親爺おやじ、とぼけるな、それだから予め不都合のないようにしろと云ったんだ、二

三日前からちみどりちよう緑町みどりちようの医者いりが出入でいりをしているが、ありやア誰が医者にかゝっているのだ」

主「えっ……」

林「この親爺おやじ、何処どこまでとぼける積りだ、えゝ面倒だ、金藏踏ん込めきんぞう」

金「やい友之助、御用だ」

主「もしゝ親分おやぢえ、そんな無慈悲な事を為すつちやア困るじやアごぎいませんか、友之助は身体中疵きずだらけでございますぜ」

林「うむ、少しは疵も付いたろう、自業自得じごうじとくだ、誰を怨むところがあるか、神妙にお繩を頂戴しろえ、これ友之助、大切な御用だぞ、上へお手数てすうの掛らねえように有体ありていに申上げろよ」

友之助は何なんの為か更に合点がてんが行かず、呆氣あつけに取られて居りますと、林藏は屹きつと睨にらみ付けて、

林「やい友之助、貴様は十五日の晩には何処どこにいた」

主人は横合よこあひから、

主「親方、大切な御用とは何どういう筋かは知りませぬが、友さんは十四日の夕景、蟠龍軒一味の者にさん／＼な目に遇あひましてな、可愛相かわいそうに身体も自由にならないで、私わたくし方しかたへ泊たりました、で、十五日には外へも出ませず、終日いちんちこい此処こゝにうむ／＼呻うなりながら寝て居いりました」

林「黙れ、貴様に尋ねるのじやアねえ、これ友之助、貴様は十四日は割下水の蟠龍軒の屋敷で、少しばかり打擲ちやうちやくされたのを遺恨いこんに思しつて、十五日の晩に其の仕返ししを為しようと云いう了りようけん簡かんで、蟠龍軒の屋敷へ切込きりこんだらうな」

友之助は恟びつくり首くびを擡もたげて、

友「な／＼な／＼何を云いいなさる」

林「いやさ友之助、どうせ天の網のを免のがれる訳わけにやアいかねえ、あの手際てぎわは貴様一人の仕業しごじやアあるめえの、相手は何者だ、男らしく有体うていに申ま上げた其の上うで慈悲じを願ねがうが宜よろいぞ、己おれたちも悪わるくは計はからわねえ、ぐず／＼すると却かえつて貴様の為ためにならねえぞ」

友之助は怪訝けげんな面持おももちにて、

友「へえ、あの蟠龍軒めが何うぞしましたか」

林「友、しらばつくれるな、あの時アたしか三人だったなア」

友「あなたの仰しやることは何が何だか一向分りませんが」

林「ふむ、貴様は往生際の悪い奴だな、よし此の上は手前の身体に聞くより外は

ねえ」

主「え、親分、一体これは何ういう訳ですか」

林「汝の知つた事じやアねえや」

主「それでも斯様な大病人を何うなさる積りで」

林「おい金藏、この親爺も腰繩にしてくれえ、兎も角も玄関まで引いて往くから……」

この玄関と申しますのは、其の頃名主の邸を通称玄関と申したのでございませす。

主「親分、なんで其様な足腰の立たないものをお縛りなさるのです、私ア名主様へ引かれるような罪を犯した覚えはございません」

林「往く処へ往けば分らア、黙つていろ、金藏、この近所に駕籠屋があるだろう、一

挺雇つて来い」

やがて友之助と立花屋の主人を召捕つて相生町の名主方へ引立て、まいりました。

玄関には予て待受けて居りました小林藤十郎、左右に手先を侍らせ、友之助を駕籠から引出して敷台に打倒し、

小「京橋銀座三丁目紀伊國屋友之助、業平橋立花屋源太郎、町役人」

一同「はゝア」

小「友之助、其の方は去る十五日の夜、大伴蟠龍軒の屋敷へ踏込み、家内の者四人、蟠龍軒舎弟蟠作を殺害いたしたな、何らの遺恨あつて、何者を語らつて左様な無慙なる事を致したか、さア後で不都合のなきよう有体に申立てろ」

立「まあ怪しからぬ仰せでございます、余計な事を申すようでございますが、友之助は御覽の通り疵だらけ、十四日夜はさん／＼打たれて動きが取れませず、私方へ泊り込んだのでございます」

小「黙れ」

林「さア友之助、とても免れるものじゃアない、只今旦那のお尋ねの通り有体に申上げろ」

友之助は暫く考えて居りましたが、

友「へえ、大伴の屋敷へ切込みまして、家内四人の者を殺害いたしましたるは全く私

に相違ございませぬ、へえ遺恨あつて切込みました」

立「これく友さん、血迷つちやアいかねえ、お前は十四日に……」

林「黙れ、其の方の口を出すべき場合でない、さア友之助、貴様一人の仕業しわざでないと云うことは分つて居るお、何者を同道してまいったか、一つ白状して後あとを隠しては何なんにもならんぞ」

友「どの様な御吟味を受けましても、外ほかに頼んだ者はございませぬ」

三

林藏は少しく気を焦いらだ立ちて、

林「これ汝われがな、私一人の仕事でございませぬなどしらを切つても、うむそうかと云つて済ますような盲目めくらじゃア無え、よく考えて見ろよ、手前てまえのような瘦やせ男おとこに、劍術つか遣いの屋敷へ踏込みふんご三四人の人殺しが出来る仕事かえ、さアいよく申上げねえか、旦那に申上げて少し叩いて見ようか」

友「何なんと云われても私一人の仕業に相違わたくしございませぬ」

立「もしく友さん、お前何うしたんだ、気が違やアしねえか、旦那様え、なかく此の人一人でそんな事の出来る訳はございません、全く大疵のために気が違つたに相違ございません…おい友さん、確かりしなよ」

林「え、黙れ、旦那様、此奴はなかく一筋縄じやア白状しませんぜ、一つ叩きましようか」

小「まア林藏待て、下手人は友之助と決つて居るから追つて又取調べるであらう、何しろ三四の番屋へ送つて置け」

この三四の番屋と申しますのは本材木町三四丁目の町番屋にて、この番屋には二階があつて常の自身番とは違い、余程厳しく出来て居ります。町番屋とは申しながら重に公用に使つたものでございます。尚お小林藤十郎殿は林藏に向いまして、

小「これ林藏、立花屋源太郎の縄を解いて家主へ引渡せ」

林「は、ア、おい差配人、不都合のないように預かり置け、友之助立てえ」

其の儘駕籠に乗せて本材木町の番屋を指して出て往きました。お話別れて、此方は文治の宅、母は九死一生で、家内の心配一方ならず、折から訪れ来る者があります。

「え、頼む」

森松「やアこれはく何方かと思つたら藤原様、どうも大層お立派で……お萱様も御一緒ですか宜うおいで、ございます」

藤「お母様は」

森「いやもう、お悪いの何のじやアございませぬ、何うも今の様子じやおむずかしゆうございますな」

藤「なに、むずかしい、そんなら少しも早く奥へ」

森「どうか此方へ……旦那え、藤原様と御新造様がおいになりました」

文「お、そうか、さア此方へ、やア何うも暫く、お萱か、よくおいでだ」

兩人「お母様が大層お悪いそうで、さぞ御心配でございましょう」

文「はいく、有難う、今度は些とむずかしkarouよ」

藤「それは何うも、併し私どもの顔が分りましようか」

文「いや少しは分りそうだ、兎も角も此方へ……お母様、藤原氏がまいりました、お母様、分りましたか、お萱も一緒に……」

藤「伯母様、藤原喜代之助でござる、お萱も一緒に、分りましたか、大層お瘁れ……」
と申しますと、病人に通じたものと見えて、「お、」と少し起上ろうと致しますから、

藤「どうか其の儘にして」

母「永いことお世話になりました、此の度はもうこれがお訣れで、お萱は御存じの通りほか外に身寄もなき不束者、何うぞ幾久しゆう、お萱や見棄てられぬように気を付けなよ、それでも文治の嫁が思ったより優しいので、何の位安心したか知れませんが、もう是で思い残すことはありません」

此の時台所の方に当って頻りに水を汲んでは浴せる音が聞えまする何事か知らぬと一同耳をそばだてますると、

「南無大聖不動明……のうまく……む……だあ……」

文治はそれと心付きまして、手燭を持って台所の戸を明けますと、表は曇まじりに降しきる寒風に手燭は消えて真黒闇。

文「誰だえ」

一向答えがありません。一生懸命ぎあくくと寒水を浴びては「南無大聖不……」

文「おい、誰か提灯を持って来てくれ」

藤原が提灯を持ちまして袖に隠し、燈火の隙間から井戸端を見ますと、お浪が単物一枚に襷を掛け、どんだん水を汲では夫國藏に浴せて居ります。國藏は一心不乱に

眼まなこを閉じ合掌して、

「南無大聖不動尊、今一度お母はうえさま上様の御病氣をお助け下さりませ」

文「これ其処そこに居おるのはお浪じやないか、國藏待て、その親切は千せん万ばん辱かたじけないが、まあく此処ここへ来い、お浪や早く國藏に着物を着せてやれ、森松、國藏夫婦は何時いつの間まに来たのだ」

森「へえ、藤原様のおいでの少し前、いつもは蔵前の不動様へまいるんですが、今夜は御門が締りましたそうで」

文「うむ、毎夜此の通りか、寒中といい況まして今夜は此の大雨に……國藏、お前の親切は千万辱けないがな、命数は人の持つて生れたものじや、寿命ばかりは神にも仏にも自由になるものじやアない、神様や仏様は人の苦しむのを見て悦はびなさる筈はずはないが、人が物を頼むにも無むり理ち力からを入れて頼んだからつて肯きくものではない、お前も同じ人に生れていながら、この寒さむ空ぞらに垢離こりなど取つて、万一身体に障さわつたら、それこそ此の上もない不孝じやないか、お前の親切は届おいて居る、もうく止してくれよ」

文治は國藏夫婦の水垢離を諫めて居りますると、妻のお町が泣声にて、

町「旦那様ア、お早く〜」

文「なに、お母様が息を…」

と病間に駈戻り、

文「お母様、お母様、ほい、もういかんか」

町「お母様ア、お母様ア」

文「これ〜お町、そう泣なきかなし 悲かなんでも仕方がない、もう諦めろ」

萱「伯母様おはさまえ、伯母様え、もう是がお別れか、伯母様え」

藤「お萱、そう呼ぶものではない、文治殿、さぞ〜御愁傷ごしゆうしょうでござりましょう」

文「いや永い御苦勞を掛けました、あゝ何どうも、思えば私も不孝を尽しましたなア」

お町を始め一同顔を揃そろえて言葉もなく、鼻詰なすどめらして俯うつむ向むく折まから、表かたの方あわたで慌あわだしく、

「森松々々」

森「おうい、豊島町としまちようの棟梁とうりようか」

これは亥太郎いたろうという豊島町の棟梁でございます。

亥「おゝ亥太郎だ」

森松が立つて戸を明けますると亥太郎は息急きながら、

亥「森松、お母様は」

森「たつた今……」

亥「えッ、亡りなすつたか、道理で新しい草鞋が切れて変だと思った、えゝ間に合わなかつたな」

森「昨日からむずかしいから、お前さんの所へ知らせに往くとな、今朝早く成田へ立つたと云うことだから、こいつア必定お百度だろうと後から往こうか知らんと思つたが、家が無人で困っているのに何ほ信心だからと云つて、出先から成田へ往つたら又旦那に叱られるだろうと、こう思つて止したのが結句幸いであつた、今も國藏兄が成田様の一件で小言まじりに一本やられたところだ」

亥「己アな、昨夜の内にお百度を済まして、何うやら気が急かれるから、今朝早立にして、十八里の道を急ぎ急いでもう些と早くと思つたが、生憎の大雨で道も撈取らず、到頭夜半になつちまつた、あゝ何うも胸がドキ／＼して気が落着かねえ、水を一杯くれねえか」

森「おゝ氣の付かねえ事をした」

文「やア亥太郎殿か、成田へお出で下すつたそうで、母のために毎も変らぬ御親切、千萬辱けのう存じます、母も只た今往生いたしました、さア何うか直ぐに奥へ往つて見てやつて下さい」

亥「えゝ皆様御免なせえ、えゝお母様、なぜ私が……旦那御免なせえよ、こんな時にやア何と挨拶して宜いのか私にやア分んねえ」

藤「これは亥太郎殿、藤原喜代之助でござる、あなたの御親切で伯母も誠に宜い往生を致しました、人の寿命ばかりは何とも致し方がありません」

亥「旦那御免なせえ、私やア物心をおぼえて此の方、涙というものア流したことが無えんですが、いつぞや親子てえものは斯うくいうもんだと、此方の旦那に意見されてから、此の間親父の死んだ時にやア思わず泣きました、今日で二度目でござんす、御免ねえ」とわつくと泣出しました。時に文治は、

文「いつも変らぬ御親切、有難う存じます、さぞお腹が減りましたろう」

亥「なアに、さしたる事ありません」

文「お昼食は何方でやつて来なすつたね」

亥「なアに昼食なんざア、実は十八里おつ通しで」

文「やツ、それはく、昼食も喰たべずに十八里日着ひつきとは、何どうも恐入りましたなア」

亥「云われて始めて腹が減った、そんなら森松、握飯むすびでも呉れや」

森「さア大変だ、昼間からの騒ぎで飯を炊くのを忘れたア」

町「いゝえ、私が炊いて置きましたよ、さア亥太郎さん召上れ」

亥「こりやア勿もったい体ねえな、やい森公、貴様は相変らず馬鹿だな」

森「こりやア己の十七番だ」

亥「それも違つてらア、馬鹿野郎」

それから手を分けて仏の取片付とりかたづけをいたしまして、葬式はいよく、明後日と取極めました。藤原喜代之助は明日御登城のお供がありますから、夜よの中に屋敷うちへ帰りまして、翌朝

重役へ、

藤「明日お供を致します筈でござりますが、親戚しんせきに忌中これあり、如何致いかゞしましょうや」

と伺い出でますると、何どういう都合でござりますか、藤原は明後日葬式を菩提寺ぼだいじまで見送ることが出来ませんので、その翌晚通夜つやをいたし、翌早朝葬式を途中まで見送つて、自

分は西丸下へ帰り、お葬式は愛宕下青松寺で営みまして、やがて式も済みましたから、文治は※※のまゝ愛宕下を出まして、亥太郎、國藏、森松の三人を伴い、其の他の見送り人は散り／＼に立帰りました。丁度江戸橋へ掛つてまいりますと、朝の巳刻頃でございませう、向うから友之助が余程の重罪を犯したものと見えて、引廻しになつてまいります様子、これは友之助の罪状が定つて、小伝馬町の牢屋の裏門を立出で、大門通から江戸橋へ掛つてまいりましたので、角の町番屋にて小休みの後、仕置場へ送られるのでございます。

五

文治が先に立つて江戸橋へ向つて参りますと、真先に紙幟を立て、続いて捨札を持つてまいりますのは、云わずと知れた大罪人をお仕置場へ送るのでございます。文治は何気なく正面から罪人を見ますと、紛う方なき友之助ですから、はて不思議と捨札を見ると、「京橋銀座三丁目当時無宿友之助二十三歳」と記してありまして、「右の者去んぬる六月十五日本所北割下水大伴蟠龍軒方へ忍び込み、同人舎弟を始め外四人の者を殺害

致し候者也」と読むより、左なきだに義氣に富みたる文治、血相を変えて引廻しの

馬の前に寄付き、罪人の顔を見ますと、今度は俯向いていまして少しも顔が見えませんが

れども、友之助に相違ありませんから、文治は麻※※あさがみ後巻「#「なが」は底本では「なだ」と誤記長 大 小

のまゝ馬の轡に飛付く体を見るより附添の非人ども、

「やい／＼何を為やがる、御用だ／＼」

亥「やい乞食めら、静かにしろえ」

非「やア豊島町のがむしやらだぜ」

と怯んで居りますところへ、与力が馬上にて乗付けまして、

与「これ／＼其の方は何をするのか、御用だ、控えろ」

と制する言葉に勢を得て、非人どもが文治を突退けようと致しますると、國藏、森松の

両人が向う鉢巻、片肌脱ぎ、

兩人「この乞食め、何を小癩なことを為やがる、ふざけた事をする片ツ端から打

殺すぞ」

さア江戸橋魚市の込合の真最中、まして物見高いのは江戸の習い、引廻しの見

物山の如き中に袴着けたる立派な侍が、馬の轡に左手を掛け、刀の柄へ右手を掛けて、

文「さア一步も動かすことは成らぬ、無法かは知らぬが、此の友之助は決して罪人ではない、その罪人は此の文治だア」

与「これ／＼何であろうと此の通り当人が白状の上、罪の次第が極つたのじゃ、今となつては致し方がないわ、其処退けッ」

文「いかさま無法ではござるが、狂人ではござらぬ、一寸も放すことは出来ませぬ」

と七人力の文治が引留めたのでございますから、如何とも致し方がございませぬ。馬となる友之助は何事か夢中で居りましたが、暫くして漸く我に返りまして、

友「え、旦那様でござりますか、お久しくござります」

文「友之助、よく生きていてくれたなア、貴様が此の様な目に逢うとは夢にも知らなんだ、さぞ難儀したろうな、此の文治は自分の罪を人に塗付け、のめ／＼生きて居るような者ではないぞよ、目指す相手の蟠龍軒を討洩らし、心当りを捜す内、母の大病に心を引かれ、今日まで惜からぬ命を存らえていたが、もうお母様を見送ったからにやア後に少しも思い残すことはない、此の上は罪に罪を重ねても貴様を助けにやア己の義理が立たない、さアお役人衆、お手数ながら此の文治に繩を打って、友之助と共に奉行所へお引立て下せえ、それとも乱暴者と見做し此の場に切捨てるというお覚悟なら、遺憾ながら腕の続く

限り根限りお相手致します、如何に御処分下さるか」

と詰寄せます。橋の上から四辺は一面の人立で、往来が止ってしまいました。

甲「こゝは往来だ、何を立っていやがるのだえ、さアく歩け歩け」

時に亥太郎國藏の両人口を揃えて、

「静かにしろ、ぐずぐずすると打殺すぞ」

野次馬「やア豊島町の乱暴棟梁だ、久しく見掛けなかつたが、また始めたぞ」

流石の与力も文治と聞いて怖気付き、一先ず文治と友之助の両人を江戸橋の番屋へ締込

みました、弥次馬連は黒山のようにございます。表に居りました亥太郎、森松、國藏は躍起となつて、

「此奴ら何が面白くつて見に来やがった、片ツ端から将棋倒しにしてしまふぞ」

と有合せたる六尺棒をぐんぐんと押振廻して居ります。飯の上の蠅同然、蜘蛛の子

を散らしたように逃げたかと思つと、また集つてまいります。其の中に与力の家来は斯く

と八丁堀へ知らせ、また一方は奉行所へ訴えますと、諸役人も驚いて早速駈付けました。

時に表に居りました亥太郎、國藏、森松の三人は自身番へ這入りまして、

亥「え、お役人様、蟠龍軒の屋敷へ踏込んで四五人の者を殺したのは私です、何うぞ私

を縛つておくんなせえ」

森「亥太郎兄か、そんな事を云つちやア困るじゃねえか、お役人様、そりやア私の仕業で」

國「馬鹿をいうな、お前たちは此の騒ぎで血迷うたか、己がやツつけたんだ」

文「一同静かにしろ、兎も角も御用の馬を引留めました乱暴者は私でござります、お手数ながらお引立の上、その次第を御吟味下さいまし」

出張の役人は文治を駕籠に乗せ、外一同は腰繩にて、町奉行石川土佐守役宅へ引立て、其の夜は一同仮牢に止め、翌日一人々に呼出して吟味いたしますると、何れも私が下手人でござる、いや私が殺したのでござると強情を云いますので、誰が殺したのかさっぱり分らぬように成りました。取敢えず文治には乱暴者として揚屋入を仰付け、其の他の者は当分仮牢留置を申付けられました。

六

さて明治のお方様は、昔の裁判所の模様は御存じありますまいが、今の呉服橋内にあり

まして、表から見ますと只の屋敷と少しも変つた処はありませぬ。只だ窓々に鉄網が張
 ったあるだけの事、また屋敷の向う側の土手に添うて折曲つた腰掛がありまして、丁度
 白洲の模様は今の芝居のよう、奉行の後には襖でなく障子が箱つていまして、今の揚弓
 場のように、横に細く透いている所があります。これは後から奥の女中方が覗く処だと
 申しますが、如何でございましょうか。白洲には砂利が敷いてあつて、其の上は廂を以て
 蔽い、真中は屋根無しでございませぬ。正面に蓆の敷いてある処は家主、組合、名主其
 の外引合の者が坐る処でございませぬ。文治は今日お呼出しになりました、奉行石川土佐
 守御自身の御吟味、やがてシツ／＼という警蹕の聲が聞えますと、正面に石川土佐守肩
 衣を着けて御出座、その後にお刀を捧げて居りますのはお小姓でございませぬ。少しく下
 った公用人が麻袴で控えて居ります。奉行の前なる畳の上に控えて居りますのは目安方
 の役人でありまして、武士は其の下の敷台の上に麻袴大小なしで坐るのが其の頃の扱いで
 ございませぬ。一座定まつて目安方が名前を讀上げますと、奉行もまた其の通り、
 奉「本所業平橋当時浪人浪島文治郎、神田豊島町惣兵衛店亥太郎、本所松倉町源六店
 國藏、浪人浪島方同居森松、並に町役人、組合名主ども」
 と、一々呼立て、後、

奉「浪島文治郎、其の方儀去ぬる十二月二十一日、江戸橋に於て罪人友之助引廻しの際、一行を差止め、我こそ罪人なりと名告り出で候う由なるが、全く其の方は数人の人殺しを致しながら、今日まで隠れいるとは卑怯な奴じやぞ、併し上に於ては吟味の末、友之助が自身白状致したに依つて、仕置を申付けた次第であるぞ、上の裁判に一点の曇りは無いわ、何故今日となつて左様な事を申出でたか、徒らに上を弄ぶに於ては其の分には捨置かんぞ」

文「恐れながら文治申上げます、不肖なれども理非の弁えはございます、お上様を弄ぶなどとは以ての外ほかの仰せでございませう、かく申す文治、捨置きたい仔細あつて蟠龍軒を殺害せつがいいたすの覚悟にて、同人屋敷へ踏込み候ところ、折悪しく同人を討洩らし、如何にも心外に存じ候ゆえ、一時其の場を遁れ、たとい何処の果に潜むとも、汝生かして置くべきや、無念を霽はらして後訴のちえ出でようと思ひ居ります内、母の大病、めゝしくも一日々々と看病に其の日を送り、命数尽きて母は歿みまかりましたゆえ、今日母の葬式を済まし、一ひと七日経ちたる上は卑怯未練なる彼の蟠龍軒を捜し出して、只一打ひとうちと思ひ詰めたる時こそあれ、どういう了簡で濡衣ぬれぎぬを着たかは存じませぬが、江戸橋にて友之助の引廻し捨札を見れば、斯うく云々、よしや目指す敵は討ち得ずとも、我に代つて死罪の言渡しを

受けたる友之助を助けずば、武士の一分相立ち申さず、お上へ対し恐多一事とは存
 じながら、かく狼藉いたし候段、重々恐入り奉ります、此の上は無実の罪に伏したる友
 之助をお助け下され、文治に重罪を仰付け下さいますようお願い奉ります」

奉「フウム、然らば其の方が……」

時に横合より亥太郎「恐れながら申上げます」

役人「控えろ」

亥「え、こりやア私の……」

役「黙れ」

亥「控えろたつて残らず私の仕業で」

役「控えろと申すに何を寢言を申す」

亥「だつて皆な己が為たんでえ、お奉行様、この亥太郎を御処分下せえ」

國「恐れながら國藏申上げます、その六月十五日夜は私が切込みまして殺したのでござ
 んす、何うぞお仕置き下さいますよう」

森「兄イ、何を云うんだ、蟠龍軒の家へ切込んだのは誰でもねえ、この森松がヤツつけ
 たんで」

亥「やい、森松、國藏、何を云やがる、お奉行様、此奴らア気が違つたんです、私に相違ございません」

役「其の方ども控えろ控えろ」

つくばいの同心は赤房の十手を持つて皆々の肩を突きましたが一向に聞入れませぬ。お取上げがないので三人とも立上つて頻りに罪を背負おうと焦つて居ります。時に文治が、「これ一同静かにしろ」と睨み付けられてピタリと止つて、平蜘蛛のようになって居ります。

文「恐れながら文治申上げます、此の者どもが御場所柄をも弁えず大声に罪を争います為態、見るに忍びず、かく申す文治までがお奉行職の御面前にて高声を発したる段重々恐れ入ります、尚お此の上一言申し聞けとう存じます故、御免を願ひ奉ります」
奉「ウム」

文「これ一同よく承まわれ一人ならず三四人を一時に殺すというは剣法の極意を心得て居らんければ出来ぬことじゃぞ、技倆ばかりではなく、工夫もせねばならぬ、まして夏の夜の開放し、寝たというでもなし、さア貴様たちは何うして切込んだか、その申し口によつては御検視に御吟味をお願い申そうが、何うじゃ」

森「何うでも斯うでも其の時ア夢中でやつつけた」
 と臆おくめん面もなく自分の身に罪を引受けようと云う志は殊しゆしやう勝しょうなものでございます。

七

文治は少しく声を荒あららげ、

文「これ森松、夢中で人が殺せるか、貴様の親切は辱かたじけないが、人に罪を背負しようて貰もろう
 ては此の文治の義理が立たない、控えてくれ、お役人様、恐れながら申上げます、全く此
 の文治の仕業に相違ちがひございませぬ、お疑たれいが有りますなら誰と誰を切りましたのか、一々
 御吟味の程を願ねがひ奉ります」

奉「亥太郎、森松、國藏、其の方どもが上かみを偽る段不届であるぞ、五十日間手錠組合預あずけ
 を申付ける、文治郎其の方ことは吟味中揚屋入あがりやいりを申付ける」

左右に居ります繩取なわとりの同心が右三人へ早繩を打ち、役所まで連れ行きまして、一先ひとまず
 繩を取り、手錠を箝はめ、附添つきその家主五人組へ引渡しました。手錠と申しますと始終箝はめ
 て居おるように思おぼしめ召す方もあるか知れませぬが、そうではございませぬ。錠の封印へ紙を

捲き、手に油を塗つてこれを外し、只吟味に出ます時分又自分で箝めてまいりますだけの事でございます。こゝに松平右京殿、御下城の折柄駕籠訴を致した者があります。これは御登城の節よりかお退りを待つて訴える方が手続が宜しいからであります。お駕籠先の左右に立ちましたのはお簾すだれ先と申します御家来、または駕籠の両側に附添うて居りますがお駕籠脇、その後がお刀番でございます、これは殿中でんちゆうには御老中と雖もお刀を佩すことは出来ませぬ、只脇差ばかりでございます。それ故お刀番がお玄関口にてお刀を預り、御退出の折に又これを差上げます為にまいりますので、事によるとお増まし供と申して一二人余計連れてまいる事もございます。其の昔、駕籠訴をいたします者は何れも身軽に出立ちまして、お駕籠脇の隙を窺い、右の手に願書を捧げ、左手でお駕籠に縋るのでございますから、時に依ると簾を突破つぎやぶることがございます。大概お簾先が取押えて、押えの者を呼んで引渡してしましますが、屋敷へ帰りましてから其の書面は封の儘に焼棄やきすて、当人は町人百姓なれば町奉行へ引渡すのでありますが、実は願書は中を入替えて焼棄するのでございますから、御老中へ駕籠訴をするのが一番利目があつたそうでございます。右京殿が御下城の折に駕籠訴を致したのは、料理店立花屋源太郎でございます。さて源太郎は隙を覘つて右手に願書を捧げ、

源「お願いでござい、お願いでござい」

と呼わりながらお駕籠の簾に飛付きました。

供「それ乱心者が、願いの筋あらば順序を経て来い」

と寄つてたかつて源太郎を取押え、押えの侍に引渡してしまいました。右京殿は御帰邸の後、内々その願書を御覧になりました、

右京「これ、喜代之助を呼べ」

近習「はゝア、喜代之助殿、御前のお召でござる」

喜「はゝア」

右「喜代之助、近う進め」

喜「はゝア」

右京殿は四辺を見廻し、近習に向い、

右「暫く遠慮いたせ」

お人払いの上、喜代之助にお向いなされ、

右「喜代之助、そちを呼んだのは別儀ではないが、今日予が下城の節、駕籠訴いたした者がある、それは本所業平橋の料理屋立花屋源太郎と申す者であるが、そちは浪人中業平

橋辺に居つたそうじやのうあの辺の事はよう存じて居ろう、いつぞや閑ひまの折に文治という当世に珍らしい侠客があると云つたのう、その文治と申す者は一体何どういう人間か」

喜「申上げます、彼は母の命の親とも申すべきもので、近年稀まれな侠客でござります」

右「フーム、侠客か、一体文治の平へい生せいの行状は何どんなものじや」

喜「御意にございます、先ず本所にて面前にては申すに及ばず、蔭にても文治と呼棄よびすてにする者は一いち人にんもござりませぬ、皆文治様々々と敬うやまうて居ります、これにて文治の人となりなりを御推察を願います」

右「して、そちの母の命の恩人と申すは」

喜「左様でござります、手前が浪人中、別に一文の貯たくわえあるでは無し、朝から晩まで内職をして其の日くくの煙を立て、居りました、それが為に手前は始終不在勝でございまして、家内の事は一切女房に任せて置きましたのが手前の生涯あやまちの過失あやまちでございます、女房のお浅あと申します者が、手前の居ります時はちやほや母に世辞をつかいます故、左程しやけ邪しやけな女とも思ひませなんだが、不在を幸いに只たつ一人いちにんの老母に少しも食事を与えませず、ついには母を乾殺ほしころそうという悪心を起して、三日半程湯茶さえ与えず、母を苦しめました」

右「フーム、世には恐ろしい奴もあるものじやの、そちは何か、内職から帰ってそれを知らなかったのか」

喜「何なんとも恐入った次第でございませうが、母は当年七十四歳、手前などと違い余程覚悟の宜よい母でございまして、食を絶つて死のうという覚悟と見えまして、只病氣とのみ申し打うち臥ふしたまゝ、一言いちごんも女房の邪慳よこしまなことを口外致しませぬ故、一向心付かんで居りました」

右「そちも不覚であつたの、それから何どう致した」

と膝つひつを突付け、耳そぼだを欬せて、居ります。

八

喜代之助は其の当時の事を想い起したものと見えまして、口く惜やし涙に暮れながら、

喜「悪事あくじというものは隠す事の出来ぬものと見えます、母は手前にさえ一言も話さぬ位ですから勿もちろん論隣家の者などに話す氣遣いはございませぬが、何時いつしか隣家の者が聞付け、お淺さんも邪慳よこしまな事をなさる人だ、あのような辛抱強い年寄を、何が憎にくくって乾殺くわんせつせうという了簡りょうかんになつたのだらう、お氣の毒うかつな事だ。と云つてお淺の不在うけいを窺うかがい、親切にも

粥か何かを持参致しました所へ、生憎お淺が歸つてまいりまして、烈火の如く憤り、いきなり其の食器を取つて母の眉間に打付け、傷を負わせました、其の時文治殿は何処で聞付けましたか其の場に駈付けてまいりまして、義理ある親を乾殺そうとは人間業でない、此の様な者を生かして置いては此の上どんな邪慳な事を仕出さすかも知れぬと云つて、お淺を取つて押えて口を引つ裂き……いや私が其処へ歸つてまいって手討にいたしました」

右「ふうむ、文治が其の毒婦を殺したのか」

喜「いゝえ私が……」

右「お、其方か、それは何方でも宜い、文治という奴は余程義侠の心に富んだ奴と見えるな、定めし剣術の心得もあろうな」

喜「はい、真影流の奥許しを得て居りまして、なかくの腕利でございます」

右「天晴な腕前じゃの、それで七人力あるのか」

喜「御意にございます」

右「以前は堀家の浪人と申すが左様であるか」

喜「御意にございます」

右「よし、それで文治の素性並びに日頃の行状は能く相分つた、少し思う仔細が

あるから、内々にて蟠龍軒と申す者の素性及び行状を吟味いたすよう取計らえ」

喜「畏まりました」

それから段々蟠龍軒の身の上を取調べますと、法外な悪党という事が分りましたので、事細かに右京殿へ言上いたしました。それと同時に此方は文治の身の上、石川土佐守殿は再応文治をお取調べの上、口証爪印も相済みまして、いよく切腹を仰せ渡されました。併し其の申渡し書には御老中お月番の御印形が据らなければ、切腹させる訳にはまいりませぬ。町奉行石川土佐守殿は文治の口供ばかりではございませぬ、幾枚も一度に持参いたしますと、正面に松平右京殿その外公用人御着席、それより余程下つて町奉行が組下与力を従え、その口証を一々読上げて、公用人の手許迄差出します。御老中はお手ずから印形の紐を解くのが例でございませぬ。其の紐の長さは一丈余もありまして、紐の先を御老中が持つて居りますと、公用人が静かに印形を取出して奉行に渡し、奉行がこれを請取つて捺すという掟ですから中々暇が取れません。其の内にお退の時計が鳴りますと、直ぐ印形の紐を引きますから、捺しかけても後は次のお月番へ廻さなければなりません。それが為に命の助かった例もございませぬ。だんく捺してまいりまして愈々文治の口供に移りますと、まだ公用人が手を掛けませぬ内に御老中が頻りに紐を引きますので、

奉行は捺すことが出来ませぬ。再びお印形をと心の中うちに促しながら公用人の顔を見ますと、公用人も不思議に思いまして御老中のお顔を見上げました。けれどもお駕籠訴の一件がありますから、右京殿は不興ふきようげ氣に顔を反そむけて居りますので、何が何なんだか一向訳が分りませぬ。暫く無言で睨にらみ合つて居ります内に、ちん／＼とお退のお時計が鳴りました。右京殿は待つていたと云わぬばかりのお顔にて印形を手許に引寄せ、其の儘すつとお立ちに相成り、続いてお附添一同もお立ちになりました。余儀なく奉行も渋々立帰りましたが、何なにゆ故えに御老中が斯か様な計かようらいをするのか一向分りませぬ。何か仔細ある事と土佐守殿も智ち者しやでございますから、其の後外ごほか御老中のお月番の時は、文治の口供を持つてまいるのを見合せまして、又々右京殿お月番の時に、前の如く文治の口供を持参いたしますと、矢張前の通り手間取つて居りますので、到頭とうとう印形を捺すことが出来ませぬ。はて不思議な事と処分に困つて居りますと、時のお月番右京殿より、「浪島文治郎事業平文治儀は尚なお篤とくと取調ぶる仔細あり、評定ひやうじようしよ所に於おいて再吟味仰付おおせつくる」という御沙汰になりました。この評定所と申しますのは、竜たつの口の壕ほりに沿うて海鼠壁なまこかべになつて居おる処でございしますが、普通のお屋敷と格別の違いはありませぬ。これは天下の評定所でございしますから、御老中は勿論將軍家も年に二度ぐらいはお成なりになるという定例じようれいでございします、即ち正面の高た

かざしき
座敷が將軍家の御座所でございまして、御老中、若年寄、寺社奉行、大目附、御勘定奉行、郡奉行、御代官並びに手代其の外与力に至るまで、それ／＼席を設けてあります。業平文治が数人の者を殺しながら、評定所に於て再吟味になると云うのは全く義侠の徳でございます。

九

月番御老中を始め諸役人一同列座の上、町奉行石川土佐守殿がお係でございまして、文治を評定所へ呼込めという。

同心「当時浪人浪島文治郎、這入りましょう」

と白洲の戸を明けて、当人の這入るを合図に又大きな錠を卸しました。文治は砂上に畏まって居りますと、町奉行は少し進み出でまして、

奉「本所業平橋当時浪人浪島文治郎、去ぬる六月十五日の夜同所北割下水大伴蟠龍軒の屋敷へ忍び込み、同人舎弟なる蟠作並びに門弟安兵衛、友之助妻村、同人母崎を殺害いたし、今日まで隠れ居りしところ、友之助が引廻しの節、自分の罪を人に嫁するに忍びず、

引廻しの馬を止め、蟠龍軒の屋敷に於て数人の家人を殺害いたしたるは全く自分の仕業なりと、自訴に及びたる次第は前回の吟味によって明白であるが確と左様か」

文「恐れながら申し上げます、再応自白いたしましたる通り全く文治の仕業に相違ございませぬ」

奉「うむ、何らの遺恨あつて切殺したか其の仔細を申立てえ」

文「申上げ奉ります、大伴蟠龍軒なる者が舎弟蟠作と申し合せ、出入町人友之助を語らい、百金の賭碁を打ち候由、然るに其の勝負は予て阿部忠五郎と申す碁打と共謀して企みたる碁でございませぬから、友之助は忽ち失敗いたしました、然し百両というは大金、即座に調達も出来兼ます処から、予ての約束通り百両の金の抵当に一時女房お村を預けて置きました、それから漸く百両の金を算段して持参いたし、女房と証文を返してくれと申入れました処、その証文面の百という字の上に三の字を加筆いたし、いや百両ではない、三百両だ、もう二百両持つて来なければ女房を返す訳には行かぬと云つて、只百両の金を捲上げてしまいました、余りの事に友之助が騙りめ泥坊めと大声を放つて罵りますと、門弟どもが一同取つてかゝり、友之助を捕縛して表へ引出し、さん／＼打擲した揚句の果、割下水の大溝へ打込み、木刀を以つて打つやら突くやら無慙至極な扱ひ、その折柄何

十人という多くの人立でございましたが、只氣の毒だ、可愛相だというばかりで、もとよ
 り蟠龍軒の悪人なことは界限かいわいで誰知たれ知らぬ者もございませぬ故、係り合つて後難こうなんを招い
 てはと皆逡巡しりごみして誰一たれいちにん人止める者もございませぬ、ところへ丁度私わたくしが通りかゝりまし
 たから、直ぐさま飛懸つて止めようかとは存じましたが。予て左様な処へ口出しは一切い
 たしませぬと誓いました母と同道のこと故、急立せきたつ胸を押鎮おししずめ、急ぎ宅へ歸つて宅の者
 を見届つかに遣わしましたる所、以前に彌増いやす友之助の大難、最早棄置すておき難しと心得、早速蟠
 龍軒の屋敷へ駈付け、只管詫入り、せめて金だけ返してやってくれと申入れましたる所、
 私に対して聞くに忍びぬ悪あつこうぞうごん口雑言、其の上門弟ども一同寄つて群たかつて手当り次第に打
 擲あいたし、今でも此の通り痕あとがございしますが、眉間みけんに打疵うちきずを受けました、其の時私は蟠
 龍軒を始め一同の者を打果うちはたそうかとは思いましたが、予て母の意見もあります事ゆえ、
 無念を忍んで其の儘帰宅いたしました、然しかる処母が私の眉間の疵を見まして、日頃其方そち
 身体は母の身体同様に思えと、二の腕に母という字を入墨いれすみして、あれ程戒めたのに、何な
 故眉間まへまに疵を負うて来たかと問詰まめられて一言いちごんの申訳もございませぬ、母の身体同様の
 此の身に疵を付けては第一母に対して申訳なく、二つには彼あのような悪漢を生け置く時は、
 此の後のちどのような悪事を仕出しで来すかも知れぬ、さぞ町人方が難渋するであろうと思いま

すと、矢も楯も堪らず、彼等の命を絶つて世間の難儀を救うに若かずと決心いたし、去ぬ十五日の夜、御法度をも顧ず、蟠龍軒の屋敷へ踏込み、数人の者を殺害いたし候段重々恐入り奉ります」

奉「蟠龍軒が悪人ならば上に於て成敗いたす、悪人だから切殺したと申すは言訳にはならぬぞ」

文「恐入ります、言訳にならぬは承知の上、如何様とも御処分を願います」

奉「其の夜如何致して忍び込み、如何にして殺害いたしたか、詳しく申立てえ」

文「其の夜の丑刻頃庭口の堀に飛上り、内庭の様子を窺いますと、夏の夜とてまだ寝もやらず、庭の縁台には村と婆の兩人、縁側には舎弟の蟠作と安兵衛の兩人、蚊遣の下に碁を打つて居りました、よつて私は突然女ども兩人を切らば、二人の奴らが逃げるであろうと斯う思ひまして、心中手順を定め、堀より下り立ち、先ず庭に涼んで居りました村と婆を後へ引倒し、逃げられぬように手早く二人の足に一刀を切付け、それから縁側の兩人を目掛けて其の場に切伏せ、当の敵たる蟠龍軒は何処にありやと問毎々々々尋ねますと、目指す敵の蟠龍軒は生憎不在と承知いたし、無念遣る方なく手向う門人二三を打懲らし、庭に残して置きました村と婆を切殺して其の儘帰宅致しました、このお村と

いう奴は顔に似合わぬ毒婦にて、二世を契つた夫友之助を振捨て、蟠龍軒と情を通じて、友之助を亡き者にせんと企みたる女でございます、いつぞや私を取つて押え、痰まで吐きかけた恩知らず、私の遺恨とは申しながら、今に残念に思うて居ります」
と、一点の濼みもなく滔々と申立てました。

十

時に石川土佐守殿、

「其の方の心底はよう相分つたが、左様の義侠心を持ちながら何故其の場を逃退きしぞ」

文「恐れながら申し上げます、逃げたとはお情ないお言葉でござります、たとい敵の片割れ数人を切殺すとも、目指す敵の蟠龍軒を討洩らし、其の儘相果て申すも残念至極でござります故、瓦をめくり草の根を分けても彼を尋ね出し、遺恨を霽した其の上にて潔く切腹いたそうか、斯くては卑怯と云われようか、寧ろ此の場で切腹いたそうかと思案にくれて居りますところへ、何処で聞付けましたか下男森松が駈付けまして、母の大病直ぐ帰

るようにと急立せきたてられて、思わず帰宅つかまつしました、ところが案外の大病、母の看護に心を奪われ、思わず今日こんにちまで日を送りましたる次第、心から女々しき仕打を致しました訳ではございませぬ、文治の心底、御推量下さらば有難き次第に存じ奉ります」

奉「ふうむ、確しかと左様か」

文「恐れながら一言半句いちごんはんくたりとも上かみを偽るような文治ではございませぬ、御推察を願います」

奉「うむ、同心、源太郎を引け」

同心「は、つ、業平橋 三右衛門店さんうえもんたな 源太郎、這入りませえ」

奉「源太郎、其の方儀、去る十四日御老中松平右京殿御下城の折、手続きも履ふまずお駕籠訴申上げ候段不届であるぞ」

源「恐入ります、併しかし手前は町人の事にて何なんの弁わきまえもございませぬが、何の罪もない者に重罪を申付くるといふ御法ごほうがございませうか」

奉「黙しんれ今日こんにち其の方に尋ぬるは余の儀ではない、友之助が北割下水にて重傷を負い、其の方宅へ持込まれたと云うは何月何日じや」

源「御意にございませぬ、それは六月十四日の夕刻とおぼえて居ります」

奉「確しかと左様か」

源「はい」

奉「其の時浪島文治郎は其の方宅へまいったか」

源「はい、もう其の日の暮くれ方がたでございましたが、急いで手前の宅へまいりまして、友之助は何処どこに居おるかとお申しますから、奥に寝たきり正体もございませんと申上げますと、誠に気の毒な事をしたと申しながら奥へまいって、何どういう訳こで今日こんにちあのような目めに遇あつたか、事の概略あらましは聞いて来たが、一通りお前の口から聞かしてくれと申しまして、あの悪党の蟠龍軒が無慈悲な為され方を聞いて居りました、そう云う訳では聞き棄ずてにならぬ、これから蟠龍軒の処へ往つて掛合かけあうて来ると申しますから、手前は彼あのような悪人にお構かまいなさるなど強たつて止めましたが、日頃の御気象、お肯入きいれもなく其の儘おいでになりました、其の時は何どういうお掛合かけあをなすつたか知りませんが、遇あつたら聞きこうと思つて居りますと、其の翌晩、蟠龍軒の屋敷に四人の人殺ざんざつしがあつたという評判、只今承うければ文治様の仕業だと申す事ですが、全く蟠龍軒の屋敷の者ものを斬殺ざんざつしましたのは、諸人しよにんの為でございませぬ、何なに卒とそお命いのちだけはお助け下さいますよう願ねがひ奉まります」

と文治のあさましき姿を見ては水みづ 洩づばなを啜すつて居ります。

奉「それに相違ないな」

源「御意にございます」

奉「文治郎、源太郎、追つて呼出すゆえ神妙に控え居ろうぞ」

同心「立ちませえ」

是にて吟味落着致しまして、諸役人評定の上、文治儀は死罪一等を減じて、改めて遠島を申付けるといふ事に決定いたしました。総じて罪人に仕置を申し渡しますのは朝に限つたものですが、尤も牢名主へは其の前夜、明日は誰々が御年貢といふことを知らしたものでございます、そうすると牢名主の指図で、甲の者がお召になります時は、外の罪人二人と共に髪を結わせ湯を使わせますから、事実誰がお召しになるのか分りませぬ。銘々慾がありますから自分ではあるまいと思つて居ります。さア其の日の朝になりますと、当人へ今日お年貢といふ事を申し聞けるや否や、すぐ切繩と申しまして荒繩で縛つて連れて行かれるのでございます。此の時は何様な悪人でも、是が此の世の見納めかと萎れ返らぬ者はありません。其の昔罪人は日本橋を中央として、東国の者ならば小塚原へ、西国の者ならば鈴ヶ森でお仕置になりますのが例でございます。で、鈴ヶ森へ往く罪人ならば南無妙法蓮華經、また小塚原へ往く罪人ならば牢内の者が異口同音に南無阿弥陀

仏ぶつを唱となえて見送つたそうでございます。さて文治遠島の次第は重役は勿論、右京殿家来藤原喜代之助も其の前日聞知りましたが、当番の都合にて直ぐ様文治の留守宅へ知らせる事が出来ませぬ。漸よつやく其の日の夕方文治の宅へまいりまして、

喜「え、頼みます」

町「はい……おや藤原様でございますか、さア何どうぞお上あがり下あがさいまし、まア暫しばらくでございますました、何こうぞ此方こち方へ」

喜「存外御無沙汰いたしました」

町「手前の方でも御存じの通り種いろく々心配がございしますので、思いながら御無沙汰いたしました」

という声も涙声、母には死なれ、頼みに思う夫は揚屋あがりやい入り、後あとに残るのは其の身一人ですから、思えばお町の身の上は氣の毒なものでございます。

十一

喜代之助は云い出しにくそうに、

喜「さて、今日きょう参りましたのは、えゝ……いや、どうも誠に御無沙汰ごむさたいたしました、就つきま
しては……」

町「もし藤原様、あなたは文治の事でお出いで下すつたのではございませんか」

喜「さゝ左様」

町「さア何どうなりました藤原様え……藤原様、文治が命に別状でもありはしませぬか、
ねえ藤原様」

喜「いえ、お命に別条はござらぬが、只ただ……」

町「藤原様、何どうぞお早く仰しやつて下さいまし、もし文治が遠島にでも……」

喜「左様、これが愈々いよいよ明日になりました」

町「えッ、いよく……」

喜「はい」

と暫く二人は俯向うつむいたまゝ思案に暮れて居りましたが、やがてお町は心を取直しまして、
町「藤原様え、明日は何時頃いつごろ出帆しゅっばんいたすのでございましょう、たしか万年橋まんねんばしから
船が出るのか承うけりましたが左様でございますか」

喜「左様、あなたも嘸さぞ御心配なすつたでしょうが、明日こそはお目に懸かれます、併しし私わたし

はお役柄の御近習ゆえ、役目に対して残念ながらお目に懸ることが出来ませぬ、あなたはお名残のためお出でなさいまし、御近所まで私が御案内いたしましたしよう」

町「はい、何うも致し方がございません、一目……え、もう止ましようよ」

喜「そりやまた何故ですか」

町「何故つて貴方、叱られますもの」

喜「あ、成程日頃の御気性をよく御存じでございませぬ、併し是が一生の……」

町「左様でございませぬ、会つて話は出来ませんでも、せめては……いや思い切りましよう、事に依ると生涯離縁するなど……もう……諦めましよう」

と云う声さえも涙でございませぬ。

喜「それは御尤ですが、併し……はてな、何うしたら宜かろうか知らん」

と俱に涙に暮れて居りますと、表の方に

「お頼み申します」

町「はい、何方で……おや亥太郎さんでございませぬか、さアお上りなさいまし」

亥「え、もう此処で宜しゅうござります、御新造様永々お世話になりましたが、明日私やア遠方へまいります、また長えことお目にかゝれませぬ、へえ、ご、ご御機嫌よう、左

様なら……」

町「あゝもし亥太郎さん、まアお待ちなさい」

亥「えゝ、もう」

町「まアゝ少しお待ちなさい、お顔色もお悪い様子で、何か変事でもございますか」

亥「いゝえ別に」

また、表の方で、

「へえお頼み申します、國藏でございます」

亥「やア國藏か」

國「やア棟梁か、へえ御新造、御機嫌宜しゆうござんす、棟梁にも宜い処でお目にかゝりました、まア当分お目にかゝれませんから、随分御機嫌よう、へえ左様なら、お暇を……

……

亥「おいゝ國藏待て、変なことを云うじゃねえか、己も実は此方へお暇に来たんだ、お前は何処へ往くのだ」

國「えゝ中々遠方でござんすまア当分お別れだ」

亥「手前は明日万年橋へ……」

と云いかけて暫く四辺を見廻し、

「國藏、貴様も遣付ける積りか」

國「棟梁、お前も」

亥「ウム、己も決心した」

國「そんなら頼もしい」

と眼と眼で示し合わして、

兩人「御新造様、御機嫌よう」

町「まあ〜お二人ともお待ちなさい、今一言仰やった万年橋というのは」

二人「実は命を棄てましても」

町「まあお二人とも」

喜「こらく〜お二人ともお控えなさい」

二人「これは〜藤原様、お前さんのお蔭様で旦那も命が助かりました、有難うござんした、さア直ぐお暇致しましょう」

喜「まあお二人とも少しお待ちなさい、え〜只今お二人がお蔭で旦那の命が助かりましたと仰しやったが、その次第柄は御存じで仰しやったか」

亥「そんな事を知らねえで済みますものか、ねえ、いろくお前さんのお骨折で助かったことア蔭ながら……なア國藏、お礼を申さねえ日は無えなア」

喜「それほど文治殿の助かった事を喜びながら、その文治殿に恥を搔かせる積りかな、それとも殺す気かな」

亥「こりやア妙な事を仰しやいますねえ、旦那を殺すの恥を搔かせるのとは何のことでござんす、此方とらア自分の命を棄て、も旦那を助ける覚悟だ、又一旦那思い込んだ事一寸も後へ退かねえ此の亥太郎でござんすぜ」

喜「然らばお前さん方は其の恩人の文治殿を、明日の遠島船の出帆の場に切込み、同人を助け出して上州あたりへ隠そうという積りでござろうな、それとも違いましたかね、何うでござりますな、さア其の文治殿は悪人でござるか、乃至泥坊でござるか」

亥「えッ旦那、妙なことを仰しやいますね、誰が悪人と申しやした、泥坊なんぞ為るよな旦那で無えと云うことは誰でも知つてるじゃアござんせぬか」

喜「さア其処です、文治殿こそは日本に二三とあるまじき天晴名士と心得ますが、何うでござるな、その日本名士が上州あたりの長脇差や泥坊が、御法度を犯して隠れて汚れた国へまいりますか、よもや文治殿はそんな拙い者ではありませんまい、よしまた往

くとしても、生涯山さんちゆう中に隠れ潜ひそんで、埋木うもれぎ同然に世を送るような人物とは些ちと肌かが
 違いましようぞ、左程逃げたき文治殿ならば、友之助が無実の罪に服したのを幸いに、の
 めくくと宅たくに居て知らぬ顔をしていましよう、友之助を助けようが為に自分の一命を差出
 して明白かみに上のお裁きを仰ぐくらいの名士、そんな端はしたない者ではござりませんな」
 と云われて亥太郎と國藏は眼ばかりパチくやつて居ります。

十二

藤原喜代之助は尚なおも言葉を継いで、

「こゝで文治殿が一度逃出せば、生涯悪人の汚名を負わなければ成らぬ、そんなむずか
 しい事を云つても分りますまいが、天網てんもう恢かい々く疎そにして洩あらさず、其の内に再び召捕めしと
 れたら、いよく國こくちゆう中へ恥ちを曝さらさなければ成りますまい、只今お町殿へ明日あすのことを
 申上げ、お別れに只ただ一目お逢いなされてはと申入れましたが、文治殿の平常ふだんの氣象を御
 存じゆえ、此の場合未練がましく別れにまいったら、定めし叱ちられましよう、お目に懸かり
 たいは山々なれども、じつと堪こらえてまいりますまいと、流星さすは文治殿の御家内だけ……女

ですら斯様かようでありますのに、あなた方は只文治殿の事のみを思い、お心得違いをなさいますなア、さア分りましたらお止りとどまなさい、如何いかゞでござるな」

これを聞きました兩人は頭を下げ、只男おとこなき泣なに齒はぎしりして口もきかれませぬ。

喜こ「まだ御合点ごがてんなさいませんか」

兩人「それじやア旦那にお目にかゝる事は出来ませぬか」

喜「いゝえ、何どうしてあなた方も明日あしたは是非せひお見送りを願います、まさか私わたくしは役人やくにんでござるから、よし義の為にもせよ、一旦罪人と極きまつて遠島申付けられた者に逢うことは出来ませぬ、是非ともあなた方はお出で下すつて、私の申した事を文治殿へ宜しく申もうしつた伝たえて下さい」

兩「よく分りました、じやア仰せに従つて諦めましょう、けれども御新造様も私わつちどもと一緒に、お別れに只ただ一目お逢いなせえまし、此の世の名残なごりに往いかつしやるのに、何なんぼ御気象おんきさうの勝すぐれた旦那だつて、人情を知らねえ事ありますめえ、何なんとも仰しやる氣遣きづかいはありやアしませんや、ねえ旦那」

喜「如何いかにも……就つてはお町殿、せめて遠目とんめでなりとも」

町「万年橋とやら申す橋より船までは余程離れて居りますか」

國「へえ、僅か半丁ばかりしか離れて居りません」

町「それでは其の橋の上から旦那の心付かぬように、余所ながらお別れいたしましたよう」
喜「成程、それが宜しゅうござろう、各々文治殿には見知られぬよう気を付けてやつて下さい」

両「承知いたしました」

お話分れて、本所大橋向うの万年橋、正木稲荷の河岸は、流罪人の乗船を扱いまする場所でございます。尤も遠島と申しますのは八丈島、三宅島にて、其の内佐渡は水掻人足と申しまして、お仕置の中でも名目は宜いのでござりますが、囚人の身に取つては一番辛い処でありますから、滅多に長生する者はございませぬ。今文治が遠島と極りましたのは三宅島でございます。いよく船が万年橋から出るといふ前夜になつて、親戚故旧の人に知らせますので、当日は親類縁者は申すに及ばず、友人達は何れも河岸に集つて身寄の囚人を待受けて居ります。其の内に追々囚人が送られてまいります。中には歩けませんで畚に乗つて参る者もございます。文治は成るたけ人に逢わぬように、俯向いて目立たぬように小さくなつてまいりましたが、國藏が早くも見付けまして、

國「やア旦那々々」

文「國藏か、よく来てくれたな、皆んな達者で居るだろうな」

國「へえ、皆な達者ですが、旦那、何故私を代りにやってくれねえんです、やい森松、早くお町様をお連れ申せ」

文「こりや國藏何故に町を連れて来たか、此の姿を女房に見せて己に恥を搔かせるのか、此処へ連れて来ると女房も貴様も離縁してしまうぞ、此の文治は予て切腹と覚悟して居ったところ、上のお慈悲で助けられ、生恥を曝すことかとなるだけ人に姿を見られぬよう心して来たのに、未練にもお前達まで集まって此の文治に恥の上塗をさせる了簡か、近寄ると生涯義絶するぞ」

國藏は恟り驚いて、

國「何時に変わらぬ旦那の氣象、悪い気で来たのじや無えから勘弁して下せえ、やア森松、御新造を橋の上に置いて手前ばかり来い」

森「だつてそりやア無理というものだ、御新造様、旦那があゝ云つても生涯のお別れですから、彼処までお出でなせえ」

町「いゝえ、私は此処でお顔を拝見してお別れいたします、日頃の御氣象はよう存じて居ります」

と橋の上にて手を合せたまゝ、声も出さず、涙一滴流しもせず、一心に夫の無事を祈つて居ります。森松は気の毒に思ひまして、

森「御新造様、たとい叱られてもお側へ往つて一目お逢いなせえまし」

町「未練がましく近寄れば必ず離縁されるに相違ござりませぬ、私わたしやアそれが辛つらうございますから」

國「やア森松、もう時間が切れるぞ、早く〜」

時に獄ごく丁の横目よこめと申す者が、

「さア〜限りはねえ、早くしろ〜、長くなると為に成らねえぞ」

と一々囚人を集めて居ります中に、ブウ〜という法螺貝の音、

横「さア〜此奴こいつらア何時いつまで居やがるんだ」

と追々囚人を引立て、船に乗込まして居ります。

十三

見送つて居ります國藏、森松の両人は

「旦那了、旦那了、御新造を始め後のこた了御心配なさいますな」

と男泣に泣出す途端に亥太郎が駈付けてまいりまして、

亥「森松、國藏、旦那は何処どこに居るんだ」

國「あゝ亥太郎兄イか、旦那は彼処あそこへ」

亥「ど、ど何処に」

森「もう船に乗っていらあ」

亥「やア旦那、一寸待ちよつとつて下せえ、遅かった」

役「これく控えろ、もう時間だ」

亥「時間も糸瓜へちまもあるものか、ぐずくすると打殺ぶちころしてしまうぞ、誰だと思ふ、豊島

町の亥太郎だぞ」

役「やアまた亥太郎めが来やがったな」

亥「やかましい、旦那、何どうも飛んだ事になりましたなア」

と鬼あやむを欺く亥太郎も是が一生の別れかと、わつとばかりに泣出しました。附添の同心も

予かねて亥太郎の事は承知して居りますから、

同心「やア亥太郎が始めて泣きやアがったぜ、大きな口だなア、其の癖手放しで泣いて

居やがらア、アツハ、ハ、さア、もう宜かろう」

亥「え、未だ何にも云やしねえ、ぐずぐずしやがると死者狂いだぞ、片ツ端から捻り殺すからそう思え」

文「これ、亥太郎殿、お上の御法を犯しては成りませんぞ、何事も是までの因縁と諦めて、随分達者にお暮しなさい」

亥「お前さんばかり口がきけて私にやア少しもく、く、口がきけねえ、旦那、達者でいて下せえよ」

此処へ大橋の方から前橋の松屋新兵衛が駈付けてまいりましたが、人ごみで少しも歩かせぬ、突退け撥返し、或は打たれ或は敲かれ、転がるように駈出しましたが、惜いかな罪人はあらまし船に乗つて、今一度の貝の音でいよく出帆するのであります。新兵衛は大声を挙げて、

新「業平橋の旦那ア、業平橋の旦那ア」

役「これ、静かにしろ、控えろ」

と突退けますので、此方から潜つて往こうとしますると又突退けられます。向うに亥太郎と文治の姿が見えながら近寄ることが出来ませぬ。新兵衛はふと一策を案じて懐中から

金入かねいれを取出し、物をも云わず
つかみだ「#「つかみだ」は底本では「つかだ」と誤記」
 出

しては横目や同心

に水向け致しまするが、同心どもは金の欲しいは山々なれども、
 仲ちゆうげん間まや重役の前を憚はげつて顔と顔を見合せて居ります。気が急せかれます故、新兵衛は突いきなり然いちぶぎん一分銀を一掴みぱら／＼と撒まき付けますと、それ金が降つて来たと、餓虎がこの肉を争う如く金を拾わんと争う間を駈抜けて文治の前へまいりまして、

新「旦那様、お情ないお姿におなりなさいましたな」

文「新兵衛殿、ようお出で下された、かく成り果はつるも自業自得、致し方がござらぬ、最早出帆の時刻、お役人にお手数てすうをかけては相済まぬから、早くお帰り下さい」

役「其ほうの方は何者じや、控えて居れ」

新兵衛はホロ／＼涙を流しながら、

新「旦那様、これが一生のお別れかと思うと、何どうも此の身体が……申上げたいことは山々ございますが、何から申上げて宜しいやら……これはお餞せんべつ別べつでござります、何うか御受納下さいますよう」

と五十両の小判を文治の懐中へ入れようと致しまする。側に居ります同心は一応あらた検めて罪人に渡しますが掟おきてでござりますから、横よこ合あひから手を出して取ろうと致しますると、

亥太郎が承知いたしませぬ。

亥「やい同心、刃物や火道具じゃア有るめえし、引ツ奪るには及ぶめえ、何だと思ふ金じゃアねえか、さア己が検めて見せてやろう、此の通りだ、何も不都合はあるめえ、旦那お懐へ入れますよ」

文「新兵衛殿、何よりのお餞別、何時に変わらぬ御親切、御恩誼は決して忘却致しませぬ」と言葉の切れぬ中に法螺貝の音ブウウウ。文治が船に足を掛けるや否や、はや船は万年橋の河岸を離れました。船中に居ります罪人は何れも大胆不敵の曲者でありましたが、流石に面に一種の愁を帯び、総立に立上りまして、陸を見上げる体を見るより、河岸に居る親戚故旧の人々はワツワツと声を放つて泣叫ぶ。その有様は宛ら鼎の沸くが如く、中にもお町は悲哀胸に迫つて欄干に掴まつたまゝ、忍び泣をして居ります。さて三宅島は伊豆七島の中でありまして、最も罪人の沢山まいる処であります。先ず島へ船が着きますると、附添の役人は神着村大尽佐治右衛門へ泊るのが例でございます。此の島は伊豆七島の内で横縦三里、中央に大山という噴火山がありまして、島内は坪田村、阿古村、神着村、伊豆村、伊ヶ島村の五つに分れ、七寺院ありて、戸数千三百余、陣屋は伊ヶ島に在りまして、伊豆国韮山郡代官太郎左衛門の支配、同組下五ヶ村名主兼勤の森

大藏いぞうの下役頭したやくがしら平林勘藏ひらばやしかんぞうという者が罪人一同を預かり、翌日罪状と引合せて、それ／＼牢内に入れ置く例でございませう、文治を乗せたる船が海上恙つひがなく三宅島へ着きますると、こゝに一条の騒動出しゅつた来らいの次第は次回に申上げます。

十四

護送役人の下知げじに従いまして、遠島の罪人一同上陸致しますると、凶らずも彼方あなたに当りパツパツと砂すな煙けむりを蹴立けたつて数多あまたの人が逃げて参ります。村方むらかたの家々にては慌あわて、戸を閉じ子供は泣く、老人は杖つえを棄て、逃にげるといふ始末で、いやもう一方ひとかたならぬ騒ぎでございませう。何事か知らんと一同足を止めて見ますと、向うから罪人が四五十人、獲物えもの々々たずさを携たずさえ、見るも恐ろしい姿で、四辺あたりに逃にげげ惑まどう老若男女ろうにやくなんによを打うちたくやら蹴け飛ばすやら、容易ならぬ様子であります。中には刃物を持つて居おる者もあります。此方こなたは数十人の役人、突棒つくぼう刺さすまたてつぼう鉄棒てつぼうなどを携たずさえて、取押とえようと必死になつて働いて居りますが、何しろ死者狂の罪人ども、荒れに荒れて忽たちまち役人も三四人打倒うちたおされました。一同何どうなることかと顔を見合せて居りましたが、追々怪我けが人は増えますばかり、義氣に富みたる文

治は堪え兼て、突いきなり然一本の棒を携え、黒くろけむり煙の如き争闘の真ま只中ただなかに飛込んで大音だいおんを挙げ、

文「まあく待て、何事かは知らぬが控えろく」

と仁王立におうだちに突立ちました。此の態ていを見るより先に立ちたる大の男が、

「やい、汝わりやア何者か、邪魔をしやアがると打殺うちころすぞ」

死者狂いの四五十人が異口同音に、「それ置ため、殺せ」と犇ひしめき勢せ凄まじく、前後左右よ

り文治に打つてかゝりました。

文「よし、拙せつしや者の止めるのを肯きかぬのか、さア来い」

と二打ふたうち三打さんうち打合うちあいましたが、予かねて一人でも打据うちすえる気はございませぬ、受けつ流しつ

数十人を相手に程よくあしらつて居ります。「えゝ、こんな奴を相手に手間取るは無益だ」

と一人の罪人は烈はげしく打合う其の中を搔か潜かくつて通り抜けようと致しますから、文治は飛と

退ひきながら、その一人を引留め、「まあく待った」と声を掛ける途端に、また其の他たの

者が逃出でたれそうと致しますから、飛ひ鳥ちようの如く彼方あなへ駈かけ此方こなたに戻つて一々引留める文治が

手練てだれの早業はやわざに、さしも死者狂の罪人も一歩も進むことが出来ませぬ。隙すかさず文治は立直

りまして大音を張上げ、

文「どういふ訳でお前達が挙つて騒ぎ立てるかは知らぬが、見れば喧嘩のようでもなし、御法を破るからにやア何か仔細があるう、何うじやく〜」

罪人「やい、汝ア何者だ、死者狂いの己らを何故止めるか、ふぎけやアがると其の分には棄置かねえぞ」

文「まあ〜静かにしろ、己はの、只た今此の島に流罪の身になつて来た罪人だ、仔細を聞いた其の上で、共々、味方になつてやろう、業平橋の文治という者だ」

と聞いて、囚人は顔と顔とを見合せて、少しく怯みました様子でございませう。先に立ちたる二三の者は、

「やア旦那様か、始めてお目にかゝります、予てお名前は聞いて居りましたがあなたが業平の旦那様ですか、道理で腕に応えがあると思つた、仔細というは外でもない、少し訳があつて此の島の取締り役人を敲き殺し、一同死ぬ気でございませう」

文「その又取締が如何いたした」

罪「日頃罪人一同の喰物の頭を刎ね、剩え年に二度か三度のお祭日に娑婆飯をくれません、余り無慈悲な扱いゆえ、三人の総代を立て、只管歎願いたしました処が、聞入れないのみか、上役人の扱いに不服を唱えるとは不届千萬な奴だと云つて、そ

の三人を庭の樹の枝に縛り上げ、今日で三日半ほど日乾にされて居ります、たとい悪党にもせよ其の三人を助けなきやア浮世の義理が立ちません、何うぞ業平の旦那様、此の儘我ら一同をお通しなすつて下せまし」

文「ふうむ、そうか、そりや宜くない話だ、そういう訳なら斯く申す文治が一身に引受けて、お役人にお詫をして見ようから、まア暫く静かにして下さい」

一同「旦那、そりやア兎ても駄目でござんす、訳を云つたところが兎ても分る奴じゃアありません、いつその事に」

文「まアく待ちなさい、兎も角も己が往つて詫びて見る、己が挨拶をするまでは決して手出しをしては成らんぞ、悪口しても棄置かんぞよ、いよく肯入れなければ兎も角も、血氣に逸つて心得違いをいたすまいぞよ」

と一同を制して、其の中の重立ちたる一人を案内に立たせまして、流罪人取締の屋敷へまいりますると、二三の若者が抜刀で立つて居ります。そんな事に恐れる文治ではございませぬから表に一同を待たせ置き、身に寸鉄も帯びず、泰然自若として只一人玄関指してまいりますと、表に居ります数多の罪人が、「旦那、危ねえ、危ねえ、抜いてらく、そうれやツつけれ」と気早な連中は屋敷の内へ飛込もうと致します。

文「これく無礼を致すな、己にも心得があるから暫く静かにしている」

やがて文治は抜刀を携えたる若者の面前に膝を突いて一礼いたしますと、

役人「やいく貴様は何者か、ぐずくすると打切るぞ」

文「はい、私は只今江戸表より流罪になりました囚人でござります、只今一同の囚

人の大騒ぎを見るに忍びず、一旦鎮め置きまして段々仔細を聞きましたるところ、囚人に
有勝ありがちの食料のこと、棄置かれませんかゆえ、お役人様へお目通り歎願いたしとうござりま
す、宜しゅうお取次を願います」

と落着き払って述立てました。

十五

文治の言葉を聞いて役人は目に角を立て、

役「何だ新入の囚人だ、生意気な奴だ、打据えるぞ」

文「これはしたり、囚人一同の者に代り申上げます事故、御無礼の段は御容赦下さいま
して、一度はお聞済の上、お頭様に拝顔の適いますようお取計らいを願います」

役「小癩こしやくな奴だ、新入の癖くせに一同の総代とは何事だ、えゝ面倒だ、切殺せ」

と一人の役人が抜刀を振上げました。此の時に奥に居りました平林が、「これゝ少し待て」と玄関正面に立上り、文治を眼下みおろに見下しまして、

平林「其の方は何者か」

文「恐れながら申上げ奉ります、手前は江戸表本所業平橋の浪人者でござります、此の度流罪たひ申付けられ、只今御島内へ到着いたしました者でござります、もとより島内の御様子を知ろう筈はずもございませぬが、数多あまたの罪人どもが死者狂いの大騒ぎ、何事やらんと取押えまして様子を承わりましたる所、何かお上かみよりのお手当に就つきまして不服いふだを抱いだき、大勢徒党たいていいたしましたる様子、以もつての外ほかの事、不届至極と一応取鎮め置おきまして、歎願なげにまかり出でた次第でござります、承われれば罪人の内三人の総代をお留置とめおきに相成り候由、非道のおん事も是れ有るまじくとは存じますが、残り一同の罪人どもは、何どのような扱いを受けて居おるかも知れぬと心配いたして居りますに依よつて、何卒お留置に相成ります三人の総代をお免ゆるし下さいますよう、さすれば一同の悦いび如何いかばかりかと存じます、併しかし一旦騒さわぎ立ち候う段は如何にも不届至極の振舞でござります故、御法に照しての御処分は余儀なき次第でござります、くれ／＼もお慈悲もつひとえを以て偏ひとえに御勘弁の程を願ねがい上げ奉ります」

平「して只今其の方が申したお上よりのお手当とは何事じや」

文「はゝア、手前は只今島に着きましたばかり、一向島内の御法は弁えませぬが、何か一箇年に両三度罪人どもへ娑婆飯とか申して米の御飯を下され候由、僅かの事を樂しみに歳月を送ります無氣力の囚人ども、お助け下され候わば一同悦ばしく存じます、此の儀偏えにお汲取り下さいませよう」

平「黙れ、それはな、上のお慈悲を以て下さる事ではあるが、本年は囚人どもが平生の不届少からぬに依つて、白飯のお手当がないのじや、虫けら同然の其の方どもとは云いながら、人間の皮を被つて居るからにやア少しは考えて見るが宜い、然るに上のお慈悲なきは身に罪ある故と知らず、徒党を組んで乱暴いたすとは容赦ならぬ曲者ども、一人も免すことは相成らぬ、皆殺しに致すから左様心得ろ」

文「お言葉に背くは恐入りますが、平生不届の事がございませれば、それ／＼御処分方もございませう、お手当を減ずるといふは如何かと存じます、お慈悲を以てお改め下さいませようくれ／＼も願ひ奉ります」

平「うるさい、いや、貴様も同類だな、者ども縛り上げえ」

文「かくの通りお役人様方抜刀の下に居りますこと故、縛られて居るも同様、此の上お

縄を頂戴いたしますとも決して厭いは致しませぬが、何卒右の願いお聞濟の上にて：
 …」

平「成らぬ、それ打て」

下役「はっ」

と抜刀を鞘に納め、檜棒を持ちまして文治の脊中を二つ三つ打ちましたが、文治は少しも動く気色もなく、両手を支いたまゝ暫く考えて居りました。何思ひけん不図起き上りまして、又打ち来る利腕をピタリと押え付け、

文「無法なことを為さいますな」

役「あいたゝゝ、あいたゝゝ」

見るより平林は烈火の如く憤り、

「それ、その悪党を切つてしまえ」

役「畏まつて候」

と抜刀の兩人、文治の後より鋭く切掛けました。其の時早く文治は前に押えた腕を振上げ、同役二人が振下す刀の下へ突付けました。はつと思つて二人が退る途端に身を交して空を打たせ、素早く搔潜つて一人の利腕を振上げ、尚お一人が、「小癩なことを為

やがる」と横合より打込み来る其の間に、以前に振上げたる下役の腕を反して前へ突放したから耐りませぬ、同役同志鉢合せをして二人ともに打倒れました。残りし一人が又々抜刀を取直し、「無礼なやつ」と打掛る下を潜つて一当て当てますと、脂を管めた蛇のように身体を反らせてしまいました。此奴容易ならぬ曲者なりと、平林は手早くも玄關の長押に懸けてありました鉄砲へ火繩を挟み、文治へ筒口を向けましたから、文治は取つて押えた兩人を玉除に翳し、

文「さア打つなら打つて見ろ」

と袖下に忍んで様子を窺つて居ります。流石の平林も如何とも詮方なく、踵を反して奥の方へ逃込みました。何をするか知らぬと思ふ間もなく、三日半も干乾にして庭樹の枝に縛り付けてあつた囚人目がけてズドンと一発放つや否や、キヤツという叫び声。最早これまでなりと文治は飛鳥の如く飛上り、平林が振上げて居ります鉄砲の手元へ潜り付き、一当て急所へ当て、倒れるを見向きもせず、吊し上げたる三人の繩を解き、疵を検めて見ますと、弾丸は外れたものと見えて身体に疵はありませぬ、尤も鉄砲の音に胆を消したものと見えて、三人とも氣絶して居ります。

十六

樹きの枝に縛り付けられて居ります三人の囚めしゆうど人は氣絶して居おるので、文治は冷水れいすいを吹掛けて介抱して居りますと、後うしろの方に当ってわあくという騒さわがしい声、振向きますと、表に待たして置いた罪人の内七八人の逸はやりお雄おが踏ふんご込んでまいりまして、最早もはや平林を刺さ殺ころしてしまいました。文治は恟びつくりして、

文「え、これ何事じや、役人を殺すくらいなら今まで苦勞は致さぬぞ、最早これまでな
り」

と身支度して切腹の様子でございます。

一同「旦那、何を為なせえます、あなたは何も知らねえ事、素もとく々くこちとらが始めた仕事です、仮令たとえど何の様な事が有ろうとも決して旦那に御迷惑は掛けません、さア斯こうなるからは仕方がねえや、遣やる所まで遣やっ付けろ」

文「此の上尚お徒党を組んで乱暴な振舞をしては上かみの御法に対して済なままいぞ、先まず一同控かえろ」

一同「何なんの、何どうせ晩おそかれ早はやかれ命ねの無なえ身体だ、それ遣やっ付けろ」

文「まあ、暫く」

と制して居ります処へ、江戸より送りの役人を始め地役人一同表の方へ駈付けてまいりました。切腹と覚悟したる文治は、諸役人の姿を見るより門外に飛出し、後に続く罪人一同を制しながら、ピタリと両手を支えて、

文「え、恐れながら文治申上げ奉ります、只今不法の振舞、皆私が仕業でござります、御吟味の上お仕置を願います」

時に江戸役人は、

「其の方共一同静かにいたせ、文治とやら、只今不法の振舞は其方一人であると申すか」

文「御意にござります」

役「然らば其の方を召連れ吟味致さねばならぬ、一同の者、文治の吟味中、謹んで居るうぞ、立ちませえ」

と文治一人を連れて役所へまいりますと、続いて地役人一同も引上げました。これは江戸役人の頓智で、死物狂いの囚人を残らず召捕らうと致しますと、どんな騒動を仕出さすかも知れませぬ故、一時其の場を治めるために態と文治一人を引立てたのでございま

す。さて江戸役人島役人立会いにて、文治を白洲へ引出し、吟味いたしますと、全く平林が非道の扱いに堪え兼て、囚人一同徒党を組んで暴れ出したという事が分りました。そればかりではございませぬ、平林という奴は誠に横着な奴で、平生罪人の内女の眉目好き者がありますと、役柄をも憚らず妾にするという、現に只今でも一人囲い者にして男児を設けたということでございます。それに引換えて文治の罪状送書を見ますと、下のような裏書があります。

「右の者思召有之候に付、遠島中軽々しく取扱い申すまじく候事、町奉行公用人某印」

としてあります。さア其の頃の仕事でございますから、町奉行公用人の裏書は中々幅の利いたものでございます。一同顔を見合せましたまゝ別に評議もいたしませぬが、以心伝心で文治に十分の利を持たせ、結句平林は自業自得、殺され損ということに落着いたしました。尚お別席に於て諸役人一同評議の上、文治を呼び出して、「今日より右平林の後役は其の方に申付けるによつて役宅に住い、不都合なきよう島内囚人の取締を致せ、下役人一同左様心得ませえ」との有難き言渡してございます。文治は恐入って両三度辞退いたしました。お聞済がございませぬから、余儀なくお請け致しました。文治は上々の

首尾にて白洲を引取り、何うなる事かと心配して居りました徒党の囚人一同に向いまして、

文「各々方お悦び下さい、拙者は軽くつて切腹、重くつて縛り首と覚悟してお白洲へま
いりしところ、上のお慈悲を以て罪をお免し下されたのみか、勿体なくも平林殿の後役を
不肖文治に仰付けられました、一同左様心得ませえ」

一同夢かとはばかり暫し呆気に取りられて居りましたが、

一同「え旦那、貴方へお取締役を申付けたのでござんすかえ」

文「如何にも」

一同「それじゃア嬉しいなア、流石にお役人様にやア眼が有らア、時に私どもが徒党の
罪は何うなつたのでござんすか」

文「そち達は好んで徒党いたした訳でない、平林の非道に堪え兼て起つた事ゆえ、今度
に限り其の罪を宥すとの事じゃ」

と聞くより一同雀躍して、

「えつ無罪、え、も勿体ねえ、旦那様お有難う存じます、天道様は正直だなア」

と一同手を合せ大声を上げて泣出しました。文治も共に涙に暮れて居りましたが、稍あ

つて声を和らげ、

文「え、各々少し文治がお前達にお頼みがあるが、快く聞濟んでくれるか」

一同「そりやア旦那様、何事かは存じませんが、私どもの命を助けて下さった恩人の仰しやること、何事によらず承わりましょう」

と一同静まり返つて居ります。

十七

文「うむ、聞濟んでくれるか、頼みと云うは外ではない、只今御吟味中に一寸小耳に挟んだ事だが、先役人の妾に子供が有るそうじやな」

と云いかけますと、三四人の荒くれ男が思い出したように立上り、面相変えて駈出しました。

文「これく待てつ」

三人「何ですか」

文「何だじやない、仮令夫は非道な扱いをしたにしろ、女子供に罪はない、その婦人

と子供に少しでも手を出す者は棄置かぬぞ、夫が殺されて見れば嘸その女子供が難儀するであろう、義として助けなければ成らんから、拙者を其の妾の宅へ案内してくれぬか」

一同「えつ、旦那、あんな奴を助けるのですか、私やア面を見るのも小憎らしい」

文「いや、坊主が憎けりや袈裟までというのは人情だが、そこが文治が一同への頼みじや、何うか気を鎮めて聞済んでくれ」

×「然し旦那、彼女め以前江戸にいる時分にやア、同じ悪党仲間で随分助け合つたものですが、此の島へ来て平林の妾になつてからは、一緒になつて非道なことを為やがつて、義理も人情も知らねえ悪婆でござんすぜ、何うで生かして置いたからつて為になる奴じやアありやせん、寧そ今から往つて是までの意趣返しに……」

一同「そうともく遣付ける」

文「それをする位なら、こうして一同へ手を下げて頼みはせぬ、まア己に任してくれえ」
×「旦那の仰しやる事だから一言でも背きたかア無えが、本当に彼奴ア憎らしいからなア」

文「それだから頼むのじや、何うぞ其の宅へ案内してくれ」

×「別段案内にやア及びますめえ、先刻二三人廻して縛つて……」

文「何だ、縛り上げて置いた、無法なことをするなア、そんなら仕方がない、兎も角此処へ連れて来てくれぬか」

暫く経ちますと、「助けて、何うかお慈悲を」と叫び狂う婦人を連れてまいりました。数多の罪人が揃って居りますのを見て、その婦人は色を失って居ります。文治は遠くより声をかけまして、

文「これ、手荒いことをするな、是れへ」

お瀧という妾は恐るゝ文治の傍へ坐りました。

文「お前は何という名じや」

瀧「瀧と申します」

文「今日のことは嘸お前も立腹したであろうが、何事も成行じや、諦めなさい、さて今日の始末は定めてお聞及びであろうが、お前が夫の平林氏が非道の扱いに堪兼て、一同の囚人が徒党を組んで既に屋敷へ押懸けようと云うところを、此の文治が止めたが、つい過まつてお前の夫を殺してしまつたのは誠に気の毒の事であつた」

一同「なアに、そりやア己らが殺したんだ」

文「まあ、静かにしてくれ、さア私やアお前のためには夫の仇、その仇の此の方がお

前を呼付けて斯様なことを申したら定めし心外に思うであらうがな、何事も是までの因縁と諦めて、一時此の場の治まりの付くよう勘忍してくれ、然し其の子供が成長して私を仇と狙うなら、其の時は又快く打たれてやろう、それまでは何事も私に任せてくれんか、その内子供が十五歳になつて親の後役を継ぎたいという志があるならば、必ず譲るように計らつてやろう、それ故お前も昔は音に聞えた悪党、残念では有ろうが善くく謹しんで赦免の日を待つが宜かろう、何うだ」

瀧「え、お有難う存じます、私は決して貴方をお怨みは致しませぬ、何うぞお慈悲を願ひ申します」

文「よし、そういう了簡なら、お前の身は此の文治が引受けて助けてやる、これ一同、此の後この婦人に対して少しにても無礼を致すと其の分にやア棄置かんぞ、さアお瀧殿、平林の屋敷の有金は勿論、衣類其の外入用の品は何なりと持って行きなさい」

もう是までの運命かと半ば諦めて居りますお瀧は、文治の情で一命を取留めた其の上に、只今の情厚き言葉に悪婆ながらも感じたものと見えまして、

瀧「お有難うございます」

と泣伏して居ります。罪人どもは、

「旦那、金や衣類を遣るなんて、そりやア余りお慈悲が過ぎらア、せめて其れだけは……」

文「あゝ、そうく、気の毒ながら米は其の儘文治が受取ります、明日は後役引受の祝いとして、一同の者へ赤飯を振舞つてやるぞ」

いや罪人どもは赤飯と聞いて悦んだの何の。

一同「へえくお有難う存じます、旦那様、寿命が延びます、辱なく存じます」

文「一同今日は是にて引取りませえ」

とそれ／＼役人へ引渡しました。いやもう囚人どもは明日の赤飯を楽しみに喜び勇んで引取りました。思えば罪のないものでございます。此のお瀧と申します婦人はもと八丁堀の碁打阿部忠五郎という者の娘でございます。是にてお話が一寸後へ戻ります。

十八

えゝ、大伴蟠龍軒は丁度秋のことでございますが、自分の屋敷に居りまして、手を拍ち、蟠「これくお瀧か、一寸お出で」

瀧「はい、何ぞまた旨い仕事でもありますか」

蟠「いやお瀧今日は御殿女中になつて貰わにやアならん」

瀧「おや、御殿女中とは俄の出世だねえ、まア」

蟠「旨くやると今日こそ金になるぞ」

瀧「そりやア有難いね」

蟠「緑町の口入屋の婆アを頼んで置いたが、髪は奥女中の椎茸髷しいたけたぼに結ゆつてな、模

様の着物も金欄きんらんの帯も或る屋敷から借りて置いた、これく安兵衛、緑町の婆アが来たら是れへ通せ」

安「へえ、婆アは先刻さつきから仲の口で独語ひとりごとを言つたり居眠りをしたり、欠伸あくびの十もした時分で」

蟠「そうか、此処こちらへ通せ、お、婆アか、久し振ぶりだな、何時いつも達者で結構々々、何どうだ近頃は金儲かねもちでも有るかな」

婆「いゝえ、此の頃じやア金儲けどころじやアございません、不景気なせいか田舎から奉公人が皆無かひむ出て来ませんし、また口も好よい口がございませんで困り切つて居りますわたくし私どもで此の商売を始めてから斯こんな商売の閑ひまなことはござんせんねえ」

蟠「時に婆ア、手前は始終屋敷方へ奉公人を入れて居るが、大名や旗下へ女を出すにやア、髪はどんな風に結うかな、定めしそう云う女中の髪ばかり結う者もあろうな」

婆「そうね、只の髪と違つて御殿女中の椎茸髷は六かしいんですよ、幸い此の婆アは年来結いつけて慣れていきますから、旗下は斯う大名は斯うと、まア婆アぐらいに結分るものは有りませんね」

蟠「お前は一体器用だからな、婆ア少しお前に頼みがある、今日はまア緩り遊んで往くが宜い」

婆「有難う存じます」

蟠「こりやア誠に少しばかりで気の毒だが、これで酒の一口も飲んでくれ」

婆「まア、何うも済みませんね、毎度有難う存じます」

蟠「礼にやア及ばねえ、頼みというのは外じゃねえがな、此女を今度或る大名へ奉公に出すのだが、余り下方風も安ッぽい、手数であろうが御殿風に髪を直してくれまいか」

婆「そんな事なら何の造作も有りませんが、少し道具が入りますから、一寸宅へ帰つて持つてまいりましょう、奉公先はお大名ですか、お旗下ですかえ」

蟠「大名よ」

婆「それなら其の様に道具を持ってまいりましょう」

蟠「宅へ帰るのは宜いが、己の宅で斯うく斯様な事を云つちやア困るぞ」

婆「へへへ、そんな入らざる口をきくような婆アじやアございませぬ、何か外に御趣向が……」

蟠「いや別に」

婆「そんなら一寸往つて参じます」

蟠「なるたけ急いでな」

と出て往く婆を見送りまして、

蟠「お瀧ッ」

瀧「はい、今日は何んな狂言をするんですかね」

蟠「これは何処其処の御殿女中でござると云つて、それ彼の松平の屋敷へ往つてな、殿様の碁の相手をするのよ、己は御近習衆と隣座敷へ退つて、一杯飲みながら折を見て寝た振をして居る、やがて御近習が居眠りを始めたら、己がエヘンと咳払いをするから、それを合図に宜いか、旨くやつてくれ」

瀧「だって、そんな事は私には……」

蟠「何なんの出来ぬ事があるものか、遣やりそこなつたら斯こう斯こう」

とひそく／＼囁ささやいて居ります処へ、

婆「只今往つてまいりました、さアお髪ぐしを解きましよう、まア好いいい恰好こつぱに出来ていますねえ、ほんに毀こわすのは勿体ないよ」

瀧「まだお前、昨日きのう結うたばかりだもの」

婆「椎茸鬚しんすは、何どうしても始めて結う時は、油あぶらを沢山たん塗けないと旨いいい恰好こつぱに出来ませんからね、お心こころ持もちは悪わるうございますが、我慢して下さいまし、少しお痛いたうございますよ……さア出来ました、まア／＼好よくお似合にあい申ましますよ、全体お人柄じんがらでございませうから、本ほん当とうに好よく似合にあいますねえ」

蟠「やア何時いつの間まにか出来上あつてしまつたな、ウム、旨いいい、併しかし婆ばあア近所きんじよへも極ごく内ない々々にしてくれえ」

婆「大丈夫だいじゆうでございますよ、序ついでに召物めしものもお着せ申ましましょうか」

蟠「宜よろしく頼たのむ」

婆「まアすツぱり出来上ありました、左様さやうならお暇いとま申まします」

蟠「くれ／＼も内々うちうちにしてくれよ」

婆「はい、宜しゆうございますとも、左様なら」

蟠龍軒はお瀧を連れて松平某ぼうの中の口へまいりまして、

蟠「頼むく」

中小姓「どーれ……これはく大伴先生」

蟠「お殿様は御在邸でござるかな」

小姓「はいく丁度御前様ごぜんさまもお屋敷でござります、暫くお控え下さいまし」

暫くして近習きんじゆが出てまいりまして、

近習「これはく先生、よくおいでになりました、さア何うぞ此方こちらへ、おうこれはく

予かねてお話しかの御婦人様でござりますか」

蟠「はい、左様にござります」

近「御前様もお待兼まちかねでいらせられます、直ぐお通り下さりませ」

蟠「然しからば御免ごうむを蒙ります、さア何うぞお先へ」

近「どう致しまして、先まずく先生、お通り下さいますよう」

蟠「これは恐入ります、仰せに従いまして失礼を致します」

と先立つて御殿へ上あがる其の様子は、如何いかにも事慣れたものであります。

十九

このお瀧という女が、先に申上げました阿部忠五郎という碁打の娘で、碁は初段の位でございませぬ。諸家へ奉公致して居りました故、なか／＼多芸な娘でございませぬが、阿部の悪心から終に島流しになるような不運な身になつたのでございませぬ。御殿女中というものは苦勞のない割合に、身体を動かしますから、大概は栗虫のように太りかえつて、其上着物に八口がありませんから、帯が尻の先へ止つてヒョコ／＼して、随分形の悪いものであります。お瀧は其れとは打つて變つて成程眉目形は美しゆうございませぬが、丈恰好から襟元までお尻の詰つた細そり姿、一目見ても気味の悪くなるような婦人でございませぬ。

殿「宜う先生おいでたな」

蟠「これは／＼御前様、此方は予て申上げました御殿女中瀧村様でございませぬ」

殿「お、左様か」

とに／＼御機嫌の態

蟠「さア瀧村様此方へ、御当家の御前様であらせられます、お近所に」

瀧「はい左様でございますか、始めて拝顔を得まして辱けのう存じます、私は瀧村と申します不束者、何うか宜しゆう」

という挨拶振の芝居掛りなるに蟠龍軒は笑いを洩らして、

蟠「は、奥女中の御挨拶は些と芝居めきますな、さて御前、お約束のお碁でございますが、私は瀧村殿に二目置きますから、丁度御前様とはお相碁でございますよう」

殿「いや、それは、なか、強いもの」

蟠「何うも御前、世の中には種々の気性の方もあつたもので、瀧村殿には僅に三日や四日のお宿下りに芝居はお嫌い、花見遊山などと騒々しいことは大嫌いで、只緩々と変つたお方と碁を打つのが何よりの楽しみとは、お年若に似合わぬ御風流なことでございますな」

殿「風流を好む女子には、時として然ういう者もあるの」

蟠「時に御前、始めてのお手合せでございますから、何か勝ちました者に御褒美を出すとしては如何でございますよう」

殿「それも宜いの」

蟠「御前が万々お負けなさる氣遣いはありますまいが、万一お負けなすつたら、え、斯うと……金子……金子は些と失礼なようではございますが、外に是れという心付きもござりませんから、矢張金子がお宜しゅうござりましょう、また瀧村殿が負けました時は、金子という訳にもまいりませず、はてな其の外の品々を差上ぐるも失礼、こうと、困りましたな、何か御前また御所望もござりましうから、何なりお好みにお任せ申すとして、其の辺は取極めぬ方がお宜しゅうござりましう」

殿様は婦人の珍客ですから余程悦に入つて居ります様子。

蟠「何うも御前様、毎度まいります度に御酒の馳走は恐入りますな、これはく〜千万辱けのう存じます、さア〜御近習衆、お側で御酒はお碁のお邪魔だ、ちよつとお次で戴くとしましよう、何れもさア〜」

近「さらばお次で」

蟠「え、御前一寸御免を蒙ります」

と其の場を外して次の間へ退り、胸に企みある蟠龍軒は、近習の者に連りと酒を侷めますので、何れも酩酊して居眠りをして居ります。蟠龍軒も少しくいびきを掻きながら、様子を窺つて居りますと、

瀧「お、昼の中に帰ろうと思いましたが、凶らず夜に入りまして恐入りました、御前様それはいけませんよ、いゝえ私は其処へ打ちましたものではございません、此方へ伸びたのでございます、お寄せなすツちやア御無理ではございませんか、御前様お止し遊ばせ、手前は暮のお相手に……」

頃合を計つて蟠龍軒、

「ウーイ、余り御酒を過したので御前をも憚らず、とろくと睡つて大きに失礼いたしました、おや、お燈火が消えましたな、御近習お燈火を」

と御前の座敷へ踏込み、何やら難題を吹掛けましたので、松平の殿様も弱り果て、

殿「何事も内済に致せ、これ誰そある、金子を遣わせ」

近「は、ッ」

とまごくして居ります処へ、後の襖を押開けて、当家の老臣妻木數馬という者が入り来りまして、

數「その金子は手前どもが遣わします、御前様にはお奥へく、これ御近習衆、御前をお奥へお連れなさい」

近「は、ア」

と殿様のお手を取つて奥へ連れ込んでしまいました。老臣數馬は容を正し、

數「これ大伴氏、いや先生もう少しお進みなされ、さて先生、この婦人は何れからお連れなすつた、御殿女中なら御宰（下供）を連れべき筈なるに、男一人同道するとは如何にも不審と承りましたゆえ、御殿へまいり、篤と様子を取調べました処、左様な女はござらぬという、さア何処の奥からお連れになりました、大伴氏如何でござるな」

と問詰められて、流石の悪漢も返す言葉なく、

蟠「え、これはその何でござる、実は先日朋友がまいりまして、八丁堀辺の侍の娘で、御殿奉公を致して居る者であるが、至つて甚好な娘、折があつたら御前へとと取持を頼まれました」

と苦しまぎれの出鱈目を云つて居ります。

二十

時に妻木數馬は、

數「いやさ、御殿女中とは真赤な偽りでござろう、尤も衣類簪の類は好う似て居るが、

髪かみの風ふうが違いますぞ、これはお旗下かきか諸役人衆しよの女中の結むすい方、御城中お並びに御三家とも
少しづつ区別くわくべつがあると申す事故じゆえ、其の道の者に鑑定かんてい致いたさせたる処、よく出来ては居るもの、
御殿風ごてんふうではないという、察さつするところ、囲碁いごの心得こころえある何者かの娘を御殿女中風ごてんじゆうふうに仕立て、
御前ごぜんを欺あざむいて金銭きんせんを貪むさぼる手段しゅだんでござろう、さればこそ衣類いりと髪かみの不ふ似合にな装まいをしたので
ござらぬか、さりとは不届ふとど至極しごくな為ためされ方、さア此の上こゝは兩人とも当家おうちを引立ひつたて、大目おおもつ
附衆けしゆうへ差出さしださねば成ならぬ、其の上こゝに越度おちどあらば寺社奉行てらじやほうぎやうの裁判さいばんを受けるでござろう、
とは申すもの、罪人ざいにんを作るも本意ほんいでない、何も言いわずに此の儘ままお帰かへりなさるか」
とすつかり凶星きゆうせいを指さされて何なんと言いい紛まらす術すべもなく、

蟠わだかま「ウウツ、ウーム、これは全く、へえ〜何も言いわずに此の儘……」

數かず「然しからば免ゆるし遣つかわす、併しかし大伴氏おほともぢ、今日きよう限り当家おうちへお出入でいしゆは御無用ごむじゆうでござるぞ」

と追立おつたてられまして、蟠わだかま龍軒りゆうけん、お瀧たきの兩人は目算めざんがらりと外ほかれ、這々ぼんぼんの体ていで其の儘まま逃にげ
歸かへりました。悪事あくじ千里せんりとは好よう申ましたもの、何時いつしか此こゝの事ことがお上かみの耳みみに伝つたわりまして、
お瀧たきは忽たちまち召捕めしとりとなり、続つづいて遠島とんぱを申付まをけられました次第しだいでござりますが、如何いかにも島し
人まひとに珍めづらしき美人めいじんでありますから、平林へいりんが勝手に引出ひきだして、妾めかけにいたして置おきました処、
前回ぜんかいに申上げた騒動さわどうが起おつて、夫平林おとへいりんは殺ころされてしまったのでございます。お話わ變かつて町

奉行石川土佐守は、ある日御用があつて御老中松平右京殿のお役宅へまいりました。さて御用済の上右京殿は土佐守に向いまして、

右「いかに御奉行、唐土もろこしから種々いろいろの薬種やくしゆが渡来いたして居るが、その薬種を医者おが病氣の模様よに依つて或は緩めあるいゆる、或は煮詰めて吞ませるといふのも、畢ひつきよう竟よう多くの病人を助ける為で、結句けつくみくに御国の為じやの」

土「御意にござります」

右「日本の島々に居る者でも随分用いように依ると、国の為になる者もあるうの」

土佐守は御老中が突然だしぬけの間に、はて奇妙なお尋ねも有るものかなと暫く考へて居りましたが、もとより奉行でも勤めるくらいのお方でありませうから、それと心付きまして、

土「御尤ごもつともにござります、思召おぼしめし通り取計らいますよう」

とお受を致しました。別段申上げませうとも、文治を赦免いたせと云う思召であると云うことは皆様もお察しでございませう。奉行は役宅へ歸りまして、「三宅島罪人小頭こがしら浪人浪島文治郎儀、流罪人扱かい方宜しく且又当人島則かを嚴重に相守り候段、神妙の至りに付、思召を以て流罪赦免致すもの也」といふ赦免状を認めまして、その赦免状の三宅島に着きましたのは、天明てんめいの前年すなわ即ち安永あんえい九年初夏の頃でござります。さてまた本所業平

橋の文治留守宅におきましては、主人あるじが流罪の身となりましたので、お町は家計を縮め、森松を相手に賃仕事などして、其の日々を煙を立てゝ居ります。松屋新兵衛を始めとして亥太郎、國藏も文治の恩誼おんぎを思い、日々にちくよ夜々稼ぎましては幾許いくばかの手助けをして居ります故、お町は存外困りませぬ、或日あるひ友之助が尋ねてまいりまして、

友「へえ、お頼み申します、友之助でござります」

森「やア友さん、よく来たなア、大分暑くなつたじゃアねえか、さア上らつしやい」

友「時に御新造様は御機嫌宜しゆうござりますか」

森「あゝ別に變つた事もねえね」

友「それは何より結構、へえ御新造様、おや今日こんにちはお土用干どようぼしでござりますか、これは皆旦那様のお品々、思い出すも涙の種、御新造様世の中には神も仏もないのでございませうか…これも旦那様のお品でございませうな」

町「それに就ついていろいろお話があるのでございませう、丁度私わたくしが当家へまいつて二日目でございますが、亥太郎さんのお父とつさんが歿なくりました、其の時に亥太郎さんが葬式とむらい金にお困りなすつて、これを抵当かたに金を貸してくれと申してまいりました、旦那は彼あアいう氣象ですから、金は貸すが品物は預からぬと云つて、暫く押問答して居りますと、亥太郎さん

が何と云つても肯きませんので、そんなら私も少し考える事があるから、兎も角も預かつて置くと申しまして、その儘預かりました、ところが彼アいう訳で良人が島流しになりましたから、何ういう仔細があつて預かつたかは知りませぬが、何時までも人の物を預かつて置くのも不実と思ひまして、今日にもお出でがあつたらお返し申そうかと思つて居るのでございますよ」

友之助は不審の眉を顰めまして、

友「はてな、亥太郎さんが此品を持っていると云うのは不思議でございませぬ、この煙草入は皮は高麗の青皮、趙雲の円金物、後藤宗乗の作、緒締根附はちぎれて有りませんが、これは不思議な品で、私が銀座の店に居りました時、手掛けた事のある品物でございませぬ」

と噂をすれば影とやら、表の方から亥太郎がやつてまいりました。

二十一

亥太郎は門口に立ちて、

亥「え、お頼み申します、亥太郎で、滅相お暑くなりました」と云う声を聞付けまして、

友「これは、豊島町の棟梁、さアお上りなさいまし」

森「さア、棟梁お上んなせえな」

亥「御免よ」

友「いや棟梁、一寸お聞き申しますが、此の煙草入は貴方がお持ちなすつていたので、すか」

亥「持つてたと云う訳じやアありませんが、実はこりやア桜の馬場の人殺しが持つていた品です、左様さ、御新造が此方へ縁付いてから二日目のこと、丁度三年前の五月三十日の晩ですが、水道町の仕事の帰りに勘定を取つて、相変らず一口やつた揚句の果、桜の馬場の葭簀張、明茶屋でうとく寝入ると、打ちまけるような大夕立にふと気が付いて其処らを見ると、枕元でキヤツという叫び声、さては人殺しと寝ぼけ眼で曲者の腰の辺へ噛り付いたが、その曲者も中々堪えた奴で、私へ一太刀浴せやがった、やられたなど思つたが、幸いに仕事の帰りで、左官道具をどつきり麻布の袋に入れて背負つていたので、宜い塩梅に切られなかつた、振放す機に引断つた煙草入、其の儘土手下へ転がり落ち

た、こりや堪らぬと草へ掴まって上つて見たら、何時の間にか曲者は跡を晦ましてしまう。翌日聞けば殺された奴は盲目の侍だそうで、其の時凶らず取った煙草入だが、持つていちゃア悪かろうとぐずぐずしている中に親父の大病、医者に掛けるにも銭はなし、脊に腹は代えられねえから、一時の融通に旦那へお預け申しましたが、其の儘になっているのでさア

町「亥太郎さん、それは確かに五月三十日のことですね」

亥「え、勘定取った帰りがけで」

町「その殺された侍は盲目でございますか」

亥「いかにも」

友「もし棟梁、その煙草入は私が銀座の店で蟠龍軒に売った品、御新造の敵は確かに蟠龍軒でございますぞ」

お町は悔りして、

町「え、父の敵はあの蟠龍軒ツ」

亥「御新造、あなたのお父さんの敵が蟠龍軒と知れて見れば、この敵討をせざアなりませんよ」

友「そうともく、此品こそ何よりの証拠、私が確かに証人でござります」

と一同齒がみをなして居ります処へ、家守の吉右衛門が悦ばしそうに駈けてまいりまして、

吉「皆な悦んで下せえ、今日お奉行所よりのお達しで、旦那様が御赦免になりました、もう直ぐにお歸りでございます」

亥「えッ、旦那が赦免だ、そりやア有難え」

國藏と森松は氣も顛倒して、物をも云わず躍り上つて飛出し、文治の顔を見るより、あツと腰を抜かしてしまいました。

亥「そんな処で腰を抜かしてくれちやア困るじゃねえか」

と大騒ぎ。近所では火事と間違えて手桶を持つて飛出すもあれば、鳶口を担いで躍り出すもあると云う一方ならぬ騒動でございます。只見ると、文治は瘦衰えて鬚ぼう／＼、葬式の打扮にて、袴こそ着ませぬが、昔に変らぬ黒の紋付、これは流罪中上へお取上げになつていた衣類でございます。お町は嬉しさ余つて途方に暮れ、手持無沙汰に狼狽えて居りましたが、文治の姿を見るより玄関まで出迎えまして、両手を突き、

町「旦那様、御無事で……」

と云つたきり、後は口がきけません。文治は落着き払つて、

文「これは皆さん、ようこそお出で下さいました、流罪中は万事お心に懸け、よくお世話下さいました、千万辱けのう存じます、お、町か、留守中さぞ苦勞しなすつたろう、よう達者でいてくれた、文治も皆さんの助力と天の助けで、再びお前に逢うとは此の上の喜びはない、さア皆さん奥へお出で下さいまし、ゆるりとお礼を申しませう、いや皆の衆、予て覚悟とは申しながら、何とも彼とも申しようのなき心配をいたしました、いつその時死んだら此のような苦勞は致すまじきに、皆々様に余計な心配を掛けまして、飛んだことを仕出来しましたなア、併しこれも男の役か知らんて」

亥「私やア嬉しくつて〜」

森松も國藏も胸一杯になつて嬉し涙を流しては、文治の顔ばかり見詰めて居ります。

喜「頼みます、藤原喜代之助でござる」

森「あツ、藤原様が来た……いや今日は袴で」

喜「お喜びにまいりました、宜しくお取次ぎ下さい」

森「え、旦那様、藤原様がお喜びにまいりました」

文「さア何うぞ是れへお通り下さりませ、宜うこそおいで下さいました、定めし其許

様のお執成しとは存じますが、何から何まで御配慮下さいまして、千万辱のう存じます」
喜「どう致しまして、此の上の喜びはございません、お町様、こんなお目出度い事はござりませぬ、お喜び申上げます」

町「はい、有難うございます、あなた様が万事にお執成し、何ともお礼の申そうようもございませぬ」
とお町は気も軽く、取つときの茶を仕立て、親切に扱うて居ります。

二十二

この時亥太郎は、

亥「え、旦那、まことに面目次第もござえませぬ、旦那が万年橋から島流しになりや
す時、國藏と二三の奴らを頼み合い、飛んだ事をやろうと為やしたところを、お前さんに
叱り付けられて思い直したお蔭で、旦那を始め私らまで今日の喜び、実に面目次第もござ
んせぬ、有難う存じます」

喜「併しあの時は宜くお止り下すつた、そのお蔭には此の通り文治殿にも表向きで、お

目に懸れるような仕合せになりました」

文治はそれと悟りまして、

文「ハ、ア、それじやア流罪になります時、あの万年橋で、多分そんな事だろうと思つて、それとなく叱りましたが、藤原氏何かに付けて穩おんびん便びんなおあつかい、有難う存じます」

亥「え、旦那、もつと目出度めでてえことが有りやすぜ、おい友さん、此方こつちへ来きねえ、あの桜の馬場の人殺し一件よ、あの時取つた煙草入を旦那に預けて置きましたが、ありやア友さんが蟠龍軒に売つた品だという、して見りやア御新造様のお父とつさんを殺した奴は、あの蟠龍軒に相違ごごさんせぬ」

文「フーウム、友之助、ちよつと此処こゝへ、今棟梁が申した通り、あの煙草入は確かにお前が蟠龍軒に売つた品か」

友「え、こりやア私が仕立てました、高麗青皮の胴どうらん乱らん、金具は趙雲の円まる形がた、後藤宗乗の作、確かにもく外ほかに二つとない品でござります、口惜くやしい事をしましたな、それと知つたら早くお上かみへ訴えて、敵かたきを取つてやるのに、神ならぬ身の知るよすがもなく、皆さんに苦勞を掛けたのは口惜くやしいなア」

森松と國藏は膝を叩いて

「こいつア話が面白くなつて来た」

喜「いや文治殿、その蟠龍軒なら少し聞込んだことがござる、拙者しゆうか主家の御領分越後えちご高田たかたよりの便たよりによれば、大伴蟠龍軒ににより似寄の人物が、御城下きたに來りし由、多分越後新瀨辺に居おるであらうと思われませう」

文「さてく悪運というものは永く続かぬものじやなア、然しからばお国表の様子を聞合せ、直ぐさま出立いたすでありますよう」

喜「それなら此方こつらに伝手つてがありますから、早速屋敷へ歸り、お国表を調べた上、お知らせ申す事に致しましょう」

文「それは辱かたじけない、何なに分宜ぶんいしく」

一同「さア、いよく面白くなつて来たぞ」

と皆々腕うでを撫なつて居ります。さて中山道なかせんどう高崎より渋川、金井、横堀、塚原、相あい俣またより猿が原の関所せきじよを越えて永井の宿しゆく、これを俗さんに三宿さんしゆくと申しまして、そろく難所なんじよへかゝります。三國峠みくにとうげへ差しかゝりました文治と妻お町の二人連れ、

文「漸よううのことで國藏、森松、亥太郎の三人を言い伏せて出立いたしたが、いや藤原は身内のこと、まして侍だが、町人三人の志、実に武士も及ばんなア、さぞく後あとで怨んで

いようが、苟かりそめにも親の仇討あだうちに出立する者が、他人の助力を受けたとあつては、後日世間の物笑いになるからな」

町「はい、実にお留守中も貴方あなたがおいでの時と少しも変りなく、朝夕まいりまして一ひとか方たならぬお世話をして下さいました」

文「左様かな、併しかし今日は霜月しもつきの中ちゆうにち日たんじつ、短日とは云いながらも薄暗くなつたなア」

町「はい、少し雪催ゆきもよおしで曇りました」

文「山さんちゆう中いっは寧いっそ人に逢あわぬ方が心安い、眼前に大事を控えた身でなくば、さぞ此の景色も佳よいであろうがな」

町「左様でございます、併あし今夜はお寒うございますから、早く泊りへまいり度たいもの
でございます」

文「そうく、三国峠を越えれば浅貝宿あさがいじゆく、三里で泊るのは少し早いが、浅貝宿へ泊るとしよう」

と話しながらいりますと、二人の昇夫かこやが、
昇「え、もしく旦那え、私わっちどもは三みつ俣またまで帰るものですが、尤もつとも駕籠かごは一いっ挺ちよう

しか有りませんが、お寒うござんすから、奥様ばかりお召めしになつたら如何いかでござんす、二居たいまで二里八丁、いくらでも宜しゆうございます、空荷からにで歩くと却かえつて寒くて堪たまりません、女中衆一人ぐらい何なんの空籠からかごより楽でござんす、ねえ旦那、乗つて下せえな」

文「いや、もう私は浅貝わしで泊る積りだ、折角だがいらんよ」

昇「え、旦那え、今日は雪空のようでございますが、此の峠ふゆむきは冬向いっつは何時こんでも斯こん様な天気でござりやす、三里でお泊りも余りお早うござんす、二居までお供を致しやしよう、え、旦那、失礼ですが二百文もん下さいまし、後の宿あとしゆくで一口やつて最早もとう一文なしでござりやす、え、もう向うへ浅貝が見えます、それから只ただた二里八丁、今までのような山阪やまざかではござりません、え、奥様え、お足から血が出ましたね」

と二人の昇夫は煩うるさく附纏つきまとうて勧めて居ります。

二十三

文治はお町の足から血が出ると聞きまして、

文「町、何どうした、足が冷ひえるから一寸躓ちよつとつまずいても怪我だいぶをする、大分血が出るな、足袋たびを

脱いで御覽」

町「いゝえ、少しも痛みはしません、何の貴方、長い旅に是しきの事で然う御厄介になりましては、思つたことが遂げられませぬ」

文「これくゝ昇夫、駄賃は幾許でもやるから浅貝の宿までやって呉れ」

昇「へえくゝ、なアに駄賃なんざア一合で宜しゆうござりやす、さア奥様お召しなせえ、駕籠の中でお足を御覽なせえまし、大した疵じやアございやせん」

と急いでまいりますと、程なく浅貝宿。

文「御苦労々々もう宿へ来たの、此処で下してくれ」

昇「旦那え、余りお早いじやアありませんか、此の通りの道で只た二里八丁、一二居宿まで遣りましよう、それとも日のある中にお泊りなせえますか、ねえ奥様、如何で」

町「旦那様、貴方さえ宜しくば私は一宿も先へまいる方が宜しゆうございます」

昇「えゝ旦那え、二三日中に大雪かも知れませぬ、雪の無え中に峠を越した方が宜しゆうござんしよう」

文「左様か、二里三里思案したところで足しにもなるまい、昇夫、急いでやるかな」

昇「へえ、有難う存じます、さア此の肩で棒組、確かしろよ」

棒組「よし、どっこいさ、旦那少し急ぎましよう」

文治は二居までに峠はあるまいと思ひますと、此の二里八丁の路は山ばかりで中々登るに骨が折れます。さりとして途中で引返すことも出来ず、駕籠に附いてまいります中に、吹雪が風にまじつて顔へ当たります。昇夫は慣れて居りますから、登るに従つて却つて足が早うございます。やがて火打坂と申す処へ来かゝりますと、向うから一人の旅人、物をも云わず摺れ違ひました。文治は心にも懸けず遣り過しましたが、二三丁まいりますと、一人の旅人が素ツ裸体で杉の樹に縛り付けられ、身体は凍えて口もきけず、がた／＼震え上つて居る体を見るより、昇夫は、

「やア大変だ、旦那／＼」

文治もこれを認めまして、

文「これ／＼昇夫、その駕籠は二三間先へ置けよ」

昇「成程、女中衆にこんな物を見せては」

と云いながら五六間先へ駕籠を下しまして、一人が附添い、一人が帰つて来まして手を合せ、

昇「旦那様、何うぞ助けてやつて下さいまし」

文「山賊の仕業しわざと見えるな、何しろ恐ろしい奴もあるもんだな、これ昇夫、駕籠どは何うした」

昇「へえ、直じき其処そこへ下しまして棒組むとり一人を付けて置きました、御安心なせえまし」

文「そうか」

と文治は手早く差添さしぞえを抜き、その繩を切きりほど解ほどきまして、

文「おい昇夫、水はないか、そこらに水溜りがあるなら手拭しめを濡ぬして来い」

昇「御覽の通り此処ここは山の上で、水は少しもありませんが、一体何どうしたんでしょう」

文「知れた事、追剥おいはぎよ、何なんとかして水を見付けてくれんか」

昇「地蔵様の前に水がありますが、凍こおり切きつて居りやす」

文「その氷を持って来い」

文治は懷中より薬を取出し、旅人の口へ入れて氷を含ませ、

文「旅人々々」

と呼ばれて漸ようやく気が付きました。

旅「ウ、ウ、ウム」

文「旅人、気が付いたか、確しつかりしろ」

旅「有難う存じます」

文「定めし山賊の仕業であろうな」

旅「ウ、ウ、ウ、お、苦しい」

文「金子も衣類も取られたか」

旅「皆取られてしまいました、今しがた二三の山賊が其処らに居りました」

文「山中とは申しながら、日中旅人の衣類金銭を剥ぐとは恐ろしい奴だなア」

旅「私もこんな目に遇おうとは思いませんでした」

昇「これ旅人、その追剥は何方へ逃げたか知らねえか」

文「いやさ昇夫、知れたところが己が追掛けて往つて捕まえるという訳にも往かぬ、併し其方も素ツ裸で、嘸寒かろう、あの昇夫、其方も裸体同様だが、今の駕籠の中に少しの包があるから持つて来てくれんか」

昇「私も寒さが身に泌みて、動けそうもござりやせん」

文「そうか、それじゃア気の毒だ、そんなら一寸己が往つて来よう」

半丁ばかりまいりましたが、駕籠は何処に在るのか影も形も見えませぬ。

文「お町や、お町」

と呼べども一向ことた応えはありませぬ。

文「何処どこへ駕籠おろを下したのか知らん、あの昇夫おろに聞いたら分るだろう」

と氣遣いながら元の処へ引返ひっかえしてまいりますと、何れいずへ行つたか旅人も昇夫も居りませぬ。

文「さては奴らは山賊の同類か、して遣やられるとは浅あはかな、汝おのれ、この分には棄置あかぬぞ」

と又取つて返してお町の乗りました駕籠の跡を追掛けてまいりましたが、いくら往ゆきましても姿が見えませぬ。それも其の筈道はずみちが違いますので、駕籠は五六間先おろへ下すや否や、待伏まちぶせして居りました一人いちにんの盜賊あどぼうが後棒かづを担かぎまして、

昇「え、御新造さま、旦那様は泥坊おせを捕とえると云つて後あとに残つておいでなさいます、駕籠は二居しゆくの宿しゆくまで遣やつて置けと仰おほしやいましたぜ、さア棒組おせ、急いげく、少し雪がやつて来たようだぜ」

と頻しきりに急いいでまいります。

お町は昇夫のいうことが能く分りませぬから、

町「昇夫さん、旦那様は何う為されたと云うのです」

昇「あの、樹に縛られて居た旅人の着物や金を取返してやると云って、盗人の跡を追掛けて行かした、もう今頃は浅貝あたりへお帰りになりましたろう、旦那の云うにやア、奥様に斯んな物を見せちやア悪いから、一足先へ二居までやってくれろと、こう仰しやいました」

町「いえく、旦那より先へ往くことはなりません、どうぞ後へ返して下さい」

昇「まア折角旦那が先へやれと仰しやつてたものを、後へ帰ると泥坊が居りますよ」

町「いえく、何が居ても構いません、後へく、何故そう急ぐのです、私はもう飛降りますよ」

昇「やい女郎、静かにしろ、もう後へ往くも先へ往くもねえ、此処は道が違わい、二居ヶ嶺の裏手の方だ、猪狼の外人の来る処じやア無えや、これから貴様を新潟あたりへばらすのだぞ」

町「さては汝らは山賊か、無礼いたすな、たとい女であろうとも武士の女房、彼是いた

すと棄置かんぞ」

と懐劍の柄つかに手を掛けるより早く、「どツこい、然そうは」と後うしろから抱締うまめました。

町「あいたゝ」

昇「虎藏とらぞう、其の手を確しつり押かえて居ろ」

と二人掛りでとうとうお町を押え付けました。最前まへからの山やま冷ひえにて手足も凍え、其の儘ままに打倒うちたおれましたが、女の一心いっか、がばと起上り、一喝いっかつ叫んでドンと入れました手練しゅれんの柔術やわら、一人の昇夫おつかはウームと一ひとこえ声、倒れる機はずみに其の場を逃出でしました。ところが一人の昇夫おつかが追掛おつかけて参りますので、お町は女の織細かほそき足にて山へ登るは適かないませぬから、転まげるように谷おへ下おりました。続いて後あしから追掛おつかけて来ました盗人ぬすは、よう／＼追付おつかいて、ドンとお町の脊中せなかを突きましたから、お町はのめる機はずみに熊くまの棲すんでいる穴の中へ落ちました。穴は雪の為に入口くちを塞ふがれて居まりますから、表からは見えませぬが、手を突つくはずみに、土の盛たつてある処ところを突破つぎやぶり、其の儘穴の中へころ／＼。熊の棲む穴にはいろ／＼種類しゅがありまして、また国々によつて違ちがいますが、多くは横穴よこあなでございます。縦たに深く掘ほるうと思おもいまして土を出だすことが出来ませぬから、横へ／＼と深あくいなりますので、或あるは天然てんぜんの穴を利用するのもありますが、これは大きな井戸いどの如ごとき穴を利用したのでございます

から、深さは十四五間けんあります、底にはいろ／＼な柔かな物が敷いてありまして、其の上
に熊の児こが三四匹居りました。親熊は其の物音に驚き、落ちた女に構わず、一いっさん散に飛上
つて伴くだんの盗人を噛か倒し、尚お驚いて逃出そうとする一賊うしろうの後から両手を伸のばして噛かり付き、
あわや喰殺し兼まじき見幕けんまく、山賊も九死きゅうし一生いっしょうの場合ですから、持合しましたお町の
短刀、熊を目がけて打付けましたが、短刀は外それて熊の穴へ落ちました。熊は二人ににんの旅人
を谷底まで打落しまして、子が気に懸ると見えて、すぐと穴の中へ飛んで帰りました。此
方なたのお町は隅すみの方に蹲うずくまり、両手を合せて一心かみほとけに神かみほとけ 仏を念じて居りますと、何か落ち
て手の甲に当りました。何かしらんと取上げて見ますと、自分が所持の懐劍、幸いに柄つか
方が手に当りましたので怪我も致しませぬ。お町は胸中に

「こりや私が所持の短刀、これを持って熊か猪ししかは知らぬが殺して出よという、神様のお告つげか知らん、あゝ有難し有難し、いや併しかし此の穴の深さは何どのくらいあるか知れぬ、殊こと
に獣けものも沢山あやういる様子ではあり、迂濶うかつな真似をして此の身を害そこなつてはならぬ、いよ／＼一命
が危あやういという時にこそ、この短刀を持って突殺してくれよう、それまでは獣の様子を見ま
しょう」

と短刀を懷中に隠して、隅の方へ小さくなつて居りますところへ、熊が飛返つてまいり

まして、正面からお町の顔を見て居る其の物、凄さ、両眼、炯々として身を射らるゝの思
い、普通の婦人なら飛掛つて突くのでございませうが、流石文治の女房、胆力も据つて
居りますから、じつと堪えて此方も熊を見詰めて居ります。熊はだん／＼近づいて、今
度はお町の顔となく手となく嗅ぎ始めました。お町はいよ／＼気味が悪くなつて突こうか
と思いましたが、この時は日の暮方で、穴の様子も確と分りませんから、じつと辛抱し
て、いよ／＼となつたら突いてくれようと身構えて居ります其の恐ろしさは何に喩えよ
うもございませぬ。暫くして熊は後へ退り、しず／＼と兎の側へ往きましたから、お町も
少し心を落着けまして、人に物をいうような静かな声で、

町「これ、そちは私を何と思うぞ、くれ／＼も猫人ではない、また悪人でもない
ぞよ、山賊のために追掛けられ、過つて此の穴へ落ちたのじゃ、決して其方に手出しはせ
ぬ、どうぞ私を助けてくれ、これ熊よ、私は此の通りの扮装で居るぞよ、夜が明けたら穴
の様子を見て、どうぞして此の穴を出るゆえ、心あらば助けてくれよ」
と両手を合せて頼みました。

無心の熊もお町の言葉を聞分けしか、児を抱いたまゝころりと寝た様子でござります。
お町は漸く安堵して、其の夜は神仏へ願掛けて、「八百万の神々よ、何卒夫文治郎に逢うて敵を討つまで、此の命を全うせしめ給わるように」と瞬きもせず夜の明くるまで祈つて居りました。其の中に冬の夜の明方と見え、穴の口より少し日が映して居りますが、四辺はまだ暗がりでもだ能く見えませぬ、まるで井戸の中へ這入ったようござります。恐るゝ四方を搜つて見ましたが、少しも足掛りはなし、如何せばやと胸騒ぎいたしました。しが、余り騒いで熊が目を感じ、噛付かれてはならぬと思案に暮れて居ります中に、もう夜は明けたに相違ござりませんが、何処から上ろうという足掛りもござりませぬ。

町「あゝ、世に私ほど不幸なものはあらず、図らずも夫文治が赦免という有難き日に親の敵を知り、多年の鬱憤を霽らさばやと夫と共に旅立ちして、敵討の旅路を渡る山中にて、何の因果か神罰か、かゝる憂目の身となりしぞ、たとい此の身は何うなるとも夫に逢わで死すべきか」

と思わず独語した其の物音に熊は起上り、暫く四辺を見廻して居りましたが、何思いけん、また穴の入口を目がけ、ひらりと飛上りました。

町「いや、熊が私に噛付かぬは神仏のお蔭か、但しは友を呼びに往き、帰って私を殺す気か、いよく噛付く様子なら、私が命のあらん限り突いてく突殺してくれる、それまでは何事も」

と少しも体を崩さぬよう身構えて居りました。文治は其の夜二居ヶ峰の谷々まで根限り尋ねましたが、少しも足が付きませぬ。その筈でございませぬ、雪は益々降り頻り、いやが上に積りまして、足跡とても見えぬくらい、谷々は只真つ白になって少しも様子が分りませぬ。其の中に長き夜の白々と明渡りまして、身体はがっかり腹は減る、如何せばやとぼんやり立縮んで居りましたが、思い直して麓の方へ下りました。二居ヶ峰の中の峰より二里半、三俣という処まで来ますと、宿はずれに少しばかり家がございますが、いずれも門の戸を閉切つて焚火をして居ります様子、文治はその家の前に立ちまして、文「もしく、少々お願い申します、私は旅人でござるが、大雪に難儀を致します故、お助けを願います」

と戸を叩きますと、内より一人の老人、

「あゝ旅の衆か、この雪で御難渋なさるとは、そりや気の毒だ、さア明きますからお明けなせえ」

文「はい、有難う存じます」

老「やれ〜此のお寒いのに宜よくお一人で峠をお越しなさいましたな、さア〜火の側へ其の儘お出でなせえまし、やア貴方はお武家様でござんすな、これは御無礼、御免下せえましよ」

文「何どうぞお構い下さるな」

と炉端に両手を出したまゝ、暫く口もきけませぬ様子。

文「当家には鉄砲が掛けてあるが、かりゆうど 獵人ではござらぬか」

老「はい、左様で、せがれ 忤が只今出掛けましたがな、此の辺では獵人でなくても鉄砲が無くちやア一夜でも寝られやアしません」

文「何方どつちを向いても山ばかり、恐ろしい獣けものでも来ますかな」

老「左様さ、獣も折おり節ふし来ますが、第一泥坊が多いので困るでがす」

文「はゝア、そんなに盗ぬす人びとが来ますかな」

老「併しかわたくしにもは金も衣物きものもないと知って居ますから、金を取りに来やアしません、火打坂や二居ヶ峰あたりで、旅人を殺したり追剥をしたりしちやア此こゝ処いまで来て、真夜中に泊めてくれと云って時々戸を叩くでがす、さア明けねえと打ぶち毀こわすぞなんて威おどしますか

らな、其の時にやア此の鉄砲を一発やるだね」

文「はゝア、して見ると此の辺は盗人の往来と見えますな」

老「時々女が担かつがれたり、旅人が裸はだか体で逃げて来るでがす」

思わず文治は、

文「さては其そいつ奴らにやられたか、えゝ残念」

と聞いて老人、

老「旦那様、お連れの方でもやられましたか」

文「はい婦人を一人」

老「道理で昨夜ゆうべ、曲者らしい奴が二三人、往つたり来たりして居やした様子」

文「その人にんてい体はどんな者でありました」

老「なアに戸を締めて置きやしたから分りやせんが、また何か仕事をしやがったと思ひ

ました」

文「その曲者は何方どっちへ往つた様子ですか」

老「いやそれは確しかと分りやせんが、多分しもて下手の方へ往つたかと思ひやした」

文「然しからば長岡か新潟辺かな」

老「先^まず六^{むい}日^か町^{まち}から十六里、船に乗つて長岡か新潟あたりへ持つて往^ゆきましてな、それから着物は故^け買^い屋^やへ売り、女は女郎町へ売るそうだが、早くお殿様から手を廻して捕まえて下されば宜^よいが、時々取逃すので困るでがす」

文「此の辺は矢張^{やは}榊^{さかき}原^{はら}式^{しき}部^ぶ殿^{どの}の領分でござろうな」

老「いや此の辺はお代官持^{もち}で、公方^{くぼう}様^{さま}から沙汰が無^ねえば手え入れられねえでがす」

文「何^{なん}と御無心だが飯はありますまいか、昨夜はまんじりともせず、食事も致さぬ故、如何^{いか}にも空腹で堪^{たま}らぬが、一^{いっ}飯^{ぱん}助^{すけ}けてくれまいか」

老「へえ、お安いことで有りやすが、飯を炊きかけて居ります、少し有った飯はな、悴^せが皆^{みな}獵^りに持つて往つたでな、少しも無^ねえだ」

二十六

この時文治は、

文「御子息が獵師ならば、此の辺の山^{やま}道^{みち}は委^{くわ}しく存じて居りましような、今から御子息を尋ねて往つて、今一度此の辺を搜して見たいが、御子息は何^ど方^{ちら}の方へお出でか、分つ

て居りましような」

老「さアとても分りやせん、分つたにしたところで、この雪じやアとても尋ねて行くことは出来ねえだ、雪解けまで待たざアなりますめえ、幸いお女中が無事で居なさりやア、此の辺に居る氣遣は無えね、越後か上州へ連れて往かれたに違えねえだ」

文「成程、それも尤も、何しても腹が減つて堪らない、飯が出来たら一飯売つてはくれまいか」

老「え、旦那様、麦飯ですが宜うござりやすかね、とても不味くつて喰えるもんじやア無えだ、それよりか此の先へ半里ほど往きやすと、三俣という町があつて、宿屋もあるし飯もあるべえから、我慢して其処まで往きなせえまし」

文「いや大事な、ひもじい時に不味い物なし、是非一飯売つて貰いたい、大分身体も暖まつて来た」

と御飯の出来るのを待つて居りますと、

老「旦那様、お飯が出来やしたが、菜は何もありませんぜ、只玉味噌の汁と大根のどぶ漬があるばかりだ」

文「何でも苦しゅうない、そんなら一飯頂かして下さい」

と文治は漸う飢を凌ぎまして、

文「これく親父殿、これは些かであるが、ほんのお礼の印だ」

老「やア旦那様、こんなに頂いちやア済まねえな」

文「どうか受納して貰いたい」

老「はいく恐入ります、有難う存じます」

文治は支度そこく、獵師の家を立去りまして、三俣へ二里半、八木沢の関所、荒戸峠の上下二十五丁、湯沢、関宿、塩沢より二十八丁を経て、六日町へ着しました。

其の間凡そ九里何丁、道々も手掛りの様子を聞きつゝまいりますこと故、なかく抄取りませぬ。夕景漸く六日町に着しますと、松屋仙次郎という商人宿がございます、尋ね物をするには斯ういう宿に若くはないと考えて、宿の表に立ちかゝりますと、

下女「お早うござりやす、お寒うござりやす、只今お湯を上げやす、えゝ内の旦那どん、お客あはアお侍様だが、此間見たように座敷が無えとつて、グザラしても困りやすのう」

文「いやく、皆々と同席でも大事ない」

女「はアそうけえ、お湯へ這入りますけえ」

文「都合で何うでも宜い」

女「さア此処こけえお上んなせえまし、お荷物を持ってめえりやしよう」

文「もう宜いく……これは皆さん御免下さい、御一同お早いお着きですな」

旅人「これはく旦那様、さア上座かみぎへお坐りなせえ」

文「何う致して、後あとからまいつて上座じょうざは恐入る、私は何分なにぶんにも此の寒さに耐こたえられな
いから、なるたけ囲炉裏の側へ坐らして貰いたい、今日の寒気かんきは又別段ですなア」

旅「旦那様、お一人でござえますか」

文「はい、連れがありました、途中ではぐれて誠に心配して居ります、もしや貴方あなたが
たは女を一人お見掛けなさいませんか」

旅「へえ旦那様もお女中連づれかね、やつぱり女ア連れて逃げてござらしたのけえ」

文「これは怪けしからぬ、連れと申すは私の女房でござります」

旅「あゝ左様かね、その女あ泥坊かどわかに勾かどわか引されて新潟へ売られてしまいましたよ」

文「さては貴方は其の女を御覧になりましたか」

旅「知つてますとも、年の頃二十五六で……」

文「左様々々」

旅「江戸っ子で色の白い、好い女でありやした、だんく話を聞いたところが、今こそ
斯様《こん》な零落おちぶれているが、昔は侍の娘だと云つて大變溢こぼしていやした、余あんまり氣の毒
だから、私わつちやア別に百文氣張つて来ました」

文「それは何時いつのことですか」

旅「先月十日頃、新潟で遊んだ女です」

文「いや、それは違います、私の申すのは昨日きのうのことです」

旅「は、あ昨日、また其様そんな事がありましたかね、何方どっちの方へ連れて行つて何処どこへ売つ
たのでしょうか」

文「これはしたり、それが知れぬからお前さんに尋ねるので……」

旅「はア左様けえ」

文「外ほかのお客様にお尋ねしますが、此の辺では左様なことが度々たびくあるのでござりまし
ようか」

乙「どうも此の辺は物騒な処で、冬向ふゆむき女おんなづれ連れんや一人旅では歩けませぬ、折々かどわか引
しや追剥おしはが出来ます」

文「成程、その品物や女は何処うりさばへ売捌くのですか、御存じありますまいか」

旅「まあ重おもに新潟へ捌くそうで、何しろ新潟は広いから、一寸ちよつと気が付きませんからな」

丙「此の間新潟の者の話に、海賊の大將が沖にいて、その子分達が女や金を奪つて持ち運ぶとかいうことで、それで此の頃御領主様から船頭の達者なものと劍術の先生を欲しいと云つて、江戸屋敷へ御沙汰になつたそうでございます」

文「成程、これから新潟へ往ゆくには船で往く方が便利でしような」

旅「はい、これから船で十六里、長岡へ着きまして、それから又船で十五里、信濃川しなのがわを下くだつて新潟へ着くのでございます」

文「左様か、それは千万かたじ辱けない」

と翌あくるひ日は意を決して新潟へ往く支度をして居ります。御案内でもございませうが、十六里、十五里とも川舟かわふねで、夜に掛つて往くのでございます。

二十七

さて文治は漸ようやく新潟に着きまして、古手町ふるてまち 秋田屋清六あきたやせいろく 方へ泊り、早速主人を呼びまして、

文「御主人外ほかの事ではないが、自分は仔細あつて当地の海辺を見物したいと思うが、船の都合は何うどいうものであるうな、それに就て途中で様子を聞くと、海賊が船中に忍んで居つて此の辺を荒すということだが、そんな事もあるものかな」

主「左様さまでしけえ、そんな噂をしやすいもんな有りやすが、誰も是だと云うものを見たもんが無ねえすけに、まア分りやしねえ」

文「併しかし、そんな噂をいたす者もあるかなア」

主「いえはアえらく有りやす、お上様かみさまでもえれい船頭と劍術遣つかいが有らば宜よいと、尋ね居おるだてえ話がありやした」

文「噂があれば尚更のこと、海辺見物の船を出して貰もらいたいが、何うどじやな」

主「いえ、それが往いけやしねえ、二三日沖は荒れ通していやす、まア一降り降りやすか風が変らねえば、とても沖へ出ることはなりやせん」

文「はゝア、然しからば舟子ふなこが出ぬのかな」

主「いくら銭を出しても命にやア替えられねえと云つて、往いく者がありやせん、まア二三日逗とまり留りゆうなさるが宜よいね、また海でなくともへえ見物場けんぶつばアえらく有りやすでえ」

文「そういう訳では何うども致し方がない、事によると二三日厄介になるかも知れぬ、兎

も角も御飯の支度をしてくれんか」

主人はにこ／＼笑いながら、

主「へえ御機嫌宜しゆう、こりやアお客様に飯を上げろえ」

うしろふすま
後の襖を開けまして、年の頃四十前後の飛脚体の者、旅慣れた袴こしらにて、

旅「え、御免下せえまし、只今隣で聞いて居りますと、海辺を御見物なさりてえと亭主へお頼みなさりましたが、宿屋てえもなアいやはや狡ずるいもんでしてね、三四日御逗留ねげを願えてえもんだから、あんな事を申しやす、私は此の辺を歩きます旅商人たびあきんどで、こゝらの船頭に幾干いくらも知つた者がありやすから、直ぐすに頼んで上げましょう、併ししか旦那ア、こりやア亭主に云わねえ方が宜ようござりやすよ」

文「それは御親切な事で、併し今も亭主から聞きました、大分此辺こゝらに盗人ぬすびとが居つて、婦人などを勾引かどわかすとか申しますが、全く左様な事があるのでございましょうか」

旅「専らもっぱ然そういう評判を致す者があります、併し私は年来此処こゝらを歩いて居りやして、大抵の事は知つて居りやすが、まア新潟には無なえようでございますね、尤も海岸もつとは広うござんすから、確しかとお請合うけあいは出来ませぬが、まア此辺こゝらは天領でござんしてな、存外御政治ゆきとも行届ゆきといて居りやすから、そんな事ありそうもござんせぬ、何なんなら舟人ふなびとを頼んで上

げましようかね」

文「併し見ず知らずのお前様に、御苦労を掛けるも気の毒でござるな」

旅「なアに直じき其そこ処でございます、ちよつくら序ついででもありますから、じゃア往つつてまいりましよう」

文「それはお気の毒な、宜しくお頼み申します」

出て往ゆく後うしろすがた姿を見送たつて、文治は手を鳴らし、

文「これく亭主」

亭「へえ、何御用で」

文「今出て行つた客は当家へ折々泊る客か」

亭「よく見掛ける人でござりやす」

文「ふうむ、聞けば旅商人たびあきんどということじゃが、渡世とせは何なんだか知つておるか」

亭「左様、どうも能よう分りませんね、且那何かお頼みなら、まア止すが宜ようござりやす」

文「ふうむ、分らぬか」

亭「へえ、どうも世間じやア余あんなり好よく申しやせんが、お客様ゆえ断る訳にも往ゆきやせん
で、お泊め申して置くとは云うものゝ、実は持もて余あまして居おるんでやす、後あとが恐こうおござりや

すからなア」

文「なに、後が恐い、ふうむ何だ、恐いというのは」

亭「意趣返しが……はア今に帰るべえに、私が此処にいたら、又酷え目に逢わねえとも云われやせん、まアお気をお付けなせえまし」

文「はゝア、彼奴は譬えにいう護摩の灰か、よしゝ承知した」

と心の中に頷いて思案して居ります処へ、例の旅商人が帰りまして、何か主人と話をし
て居りましたが、それから直ぐ奥へまいりまして、

商「旦那え、舟人たちに聞合せますと、陸と沖とは余程違つたものだそうですが、

二人頼んでまいりました」

文「違ふと申して幾ら呉れというのか」

商「一日一貫文、其の代り御祝儀には及びません」

文「それはゝゝ千万お手数であつた、これゝ亭主」

亭「へえ」

文「いよゝ明日は見物に出掛ける所存だ、これは誠に少々だが、お茶代じゃ」

亭「へえ、有難う存じます、併し旦那、明日はまだ沖合が何うでございませうかな」

商「あ、これく主人、旦那が往こうと仰しやるのに何だ、入らざるお世話をして、引込んで居れ」

亭「へえく、旦那お支度をなさいまし、随分お支度を……」

と心ありげに立ち去りました。文治はそれと悟り、蛇の道は蛇とやら、此奴を櫓子にしたらお町の様子が分らぬ事もあるまい、また敵の様子も知れるであろうと十分に心を用いて、翌日船に乗込む事に取極めました、これぞ文治が大難に逢うの基でございます。

二十八

さて文治は船頭を二人雇うて乗出しますと、

舟子「旦那、心配しなざるな、私らが二人附いていりやアどんな風でも大丈夫ですが、陸を行くよりも沖の方が宜いくらいで、やい吉い確かりしろ」

吉「よし、やツ、どっこいさア」

だんく漕いでまいりますと、俄かに空合が悪くなりまして、どん／＼と打寄する浪は山岳の如く、舟は天に捲上げられるかと思ふ間もなく、ご／＼／＼と奈落の底へ

沈むかと怪しまるゝばかり、風はいよく烈しく、雨さえまじりてザア／＼ドドドウという音の凄まじき、大抵の者なら氣絶するくらいでございます。

文「もう斯うなつたら仕方がない、二人とも確かりやれ」

と文治も一生懸命であかを掻出して居ります。烈風ますます猛り狂って、黒雲の彼方此方は朱をそゞいだようになりました。船頭はこれを赤じまと申します。何方が西か東か一向見分けも付かぬくらいで、そこらに船でもあれば、船は微塵と碎けるは必定、実に三人の命は風前の燈火の如くであります。流星に鉄腸強胆な文治も、思わず声を挙げまして、

「不幸なる我が運命、何卒敵を討つまでは、文治が命をお助けあれ、神々よ武士の一分立てさせ給え」

もう斯うなつては何人も神仏を頼むより外に道はございませぬ。二人の船頭も大声を挙げて思い／＼の神々を祈つて居りますが、風雨は一向歌む模様はございませぬ。

吉「もう兎てもいけやせん、日頃悪事の報いか、魚の餌食となるは予ての覚悟だ、仕方が無え、南無阿弥陀仏／＼」

庄「えゝ縁起の悪い奴だ、何を云つてやがる、手前や己ア生れて此方悪事を働いた覚え

は無え、確かりしろえ、舟乗稼業は御年貢だ、旦那アまだ宜しゆうござえやす、どうぞ神様をお頼み申して下せえやし」

と三人とも手に手を尽して漕いだ甲斐もなく、とうとう日は暮れて四方八方黑白も分らぬ真の闇、併し海は陸と違ひまして、どのような闇でも水の上は分りますが、最早三人とも根絶え力尽きて如何とも為ん術なく、舟一ぱいに水の入った其の中へどツかり坐つて、互に顔を見合せ、只夜の明けるのを待つのみでございますが、そうなるかと又長いもので、中々夜が明けませぬ。運を天にまかして船の漂うまゝに彼方へ揺られ、此方へ流されて居ります内に、東の方がぼんやりと糸を引いたように明るくなりました。さては彼方が東から知らん、夜が明けたら少しは風も静まるであらうと思ひの外、明るくなつても風は止まず、益々烈しく吹いて居ります。三人とも心付いて見ると、櫓も皆吹流されてしまいました。

船頭「やア、これじゃア風が止んだつて何処へも往かれることじゃねえ、情ねえな、吉、もう是までの運命と諦めろ」

文「まあ〜待て、決して短気な事をしては成らんぞ、今にも大船が通らぬとも限らぬ、又異国の船でも此の難儀を見れば助けてくれるは人情だ」

と云つて居ります中に、風は漸く凧いでまいりました。

文「やア大分風が静かになつて来た、これで天気になつたらば、また助ける風も吹くであらう、死ぬも生きるも約束だ、各々確かりしろよ」

船「有難うござりやす、旦那の方が気が丈夫だ、こうなつちやア人間業で助かる訳にやア往かねえ、どうか旦那、神様を信心して下せえ」

文「そち達も信心が肝要だぞ」

吉「なアに此方とらア信心したつて神様が……」

庄「やい何を云うんだ、確かりしろよ、気が違つたか、心を改めて信心するが肝心だ、ねえ旦那」

文「そうともく、それ天気になつた、風も止んだぞ」

庄「やア、こりやア有難え、これと云うのも信心のお蔭だ、何しろあかを搔かざアなるめえ」

吉「だつて、あか搔も何も流されてしまつたじゃアねえか」

時に文治は、

文「よし、こゝに宜い物がある」

吉「へえ、宜い物つて何なんですか」

文「宿屋から持つて来た弁当箱がある」

吉「何ど処こに」

文「此の通り腰にぶら下げて居おる、飯も菜さいも沢山あるが、これを明けてから気長に掻い出いそうじやないか」

吉「旦那、飯をお棄てなせえますか、そりやア勿体ねえ、これから何日食わずに居いるか知れやしねえ、旦那、勿体ねえじや有りませんか」

文「いや私わしは食くべべとうない」

吉「旦那、棄てるのなら私わっちに下せえまし、弁当も何も此の暴風あらしで残らず流してしまつたア、旦那が上らねえなら私どもに下せえな」

文「いや〜これは食くわぬ方が宜よかろう」

兩人「なアに勿体ねえ、少しぐらい汐しおが入つても此の場合だ、飯と聞いちやア食わずに居いられねえ、何どうか下せえな」

文「そんなら上げもしようが、中あてられるなよ」

吉「大丈夫、さア庄しょう、あかは後あとにして先まず二人で遣やつけようじやねえか、成程こいつア

中々旨え」

と二人とも十箇ばかりの握飯と菜まで残らず食してしまいました。

二十九

吉「さア重箱が殻になつた、これから気長にあか搔をするんだ」

文「これく重箱の毀れぬよう静かにやってくれよ」

暫くすると船の底の見えるように掻い干しました。

吉「さア、これから船を動かす道具だ、何も彼も皆な流して始末に往かねえな、え、且

那え、此の木をお刀で割つて下せえな、少し柄の方を細く削つて下さいまし」

文「權をこしらえるのか、成程手頃の棒だ」

と文治は脇差を抜きまして、

文「こうか、これで宜いかな、これく手を出しては危い、さアこれで宜いだろう」

庄「旦那ア、貴方ア些たア道具ごしらえをやつた事があると見えますな、それで結構で

ござりやす」

文「これく船頭、遙か向うに黒く見えるものがあるが、ありや国か島か」

兩人は飛上つて、

「やア有難え、島だく」

文「あの島は何処だろう」

庄「昨夜から大分暖かになりましたから、余程南へ流されて来たに違えねえ、何しろ新
潟の河岸を離れてから昼夜三日目、事に依つたら唐まで流されて来たかも知れねえなア」

文「ウム、そうかも知れぬ、併し何処の国でも人鬼は居らぬ、こういう訳で難渋する
からと頼んだら助けてくれぬ事もあるまい。さア一生懸命でやれく」

文「治も手伝つて船を漕ぎますが、どうも手ごしらえの櫂といえは櫂、棒同然な物で大
海を乗切るのでありますから、虫の匍うより遅く、そうかと思うと風の為に追返されま
すので、なかく抄取りませぬ。其の内に何処かの岸へ近づきました。」

文「やれく信心のお蔭でいよく命が助かったぞ、おい船頭、何うぞしたか」

庄「ウムくウーム、旦那々々……旦那……苦しい、薬があるなら早くく」

吉「これ庄藏、確かにしろえ」

文「これ、庄藏とやら、気を確かに持てよ」

と云いながら、手早く印籠いんろうより薬を取出して、汐水しおみずで庄藏の口に含ませましたが、もう口がきけませぬ、其処そこら辺あたりへ取付きまして苦しむ途端に、固まったような血をカツと吐きまして、其の儘息が絶えた様子。

文「吉公、可愛相なことをしたの、とうとう死んでしまった、折角骨を折って此処こゝまで漕こぎ付けて、もう一丁も行ゆけば国か島かへ上あがるものを、一体何どうしたのか知らん」

吉「今、私わしどもが喰くった弁当は宿屋から呉くれましたか、それとも小頭こがしらか、いやさ彼の相宿あいやどの者がくれたのですか」

文「飛脚ひきやく体の旅人が折角ひきやくくれると云うから貰もらって来た」

吉「えッ、あの相宿の飛脚から……やアしまった、秋田屋の印しるしの重箱だから、腹の減へつたまぎれに油断して喰くったのが……」

文「なに、油断して喰くった、それじゃア相宿の飛脚は怪しい者か」

吉「旦那、これが因果応報なんというのでござんしよう、何なんだか私わちも腹はらが痛いたくなりました、済すまねえが旦那きつげ氣付きつけを一服下せえまし」

文「やア其方そちも腹痛はらいたか」

吉「旦那、大変な事をいたしました、真まツ平御免びら下せえまし、実は私わちらは海賊の手下で

ござんす、あの旅人に姿を扮やつしていたなア小頭の八十松やそまつという者で、貴方を親船へ連れて往つて、懐中にある百両余りの金と大小衣服を剥ぎ取つて、事に依よつたら貴方をば手下にするか、殺すかしてと相談しましたが、一昨日宿屋を出る時に手強い奴と思つたかして、弁当の中へ毒を入れたのでござんしよう、それとも知らず自分の弁当は流してしまい、旦那の持つて居なさる弁当箱には秋田屋の印しるしがござんすから、二日二夜ふたよさの飢ひもじさに浮うっかり喰つたのが天道様の罰ばちでござんしよう、旦那、宥ゆるして下せえまし」

文「成程、分つた、新瀉を出る時に怪しい奴と思わぬでもないが、それ程の奴とは心付かなんだ、そう貴様が懺悔ざんげするからは其方そちの罪は宥ゆるして遣つかわす、さア今少し薬を呑んで助かれ、庄藏とやらはとても助からんぞ」

吉「旦那ア、私も最早わっちいけません、眼が眩くらんで旦那の顔さえ見えなくなりました」

文「これ、吉とやら宜よく聞きけよ、生前まへに何どの様な悪事を働いいても、臨終いまわの際きわに其の罪を懺悔すれば、慈悲深き神様は其方そちの未来を加護し給うぞ、さらりと悪心を去つて静かに命数の尽つきるを待て」

吉「あ、あ、有難うがす、私も今更ほっしん発心ほっしんしました、死ぬる命は惜おしみませぬ、何どうか樂じょうぶつに成じょうぶつ仏ぶつの出来きますよう、念仏の一つも唱なえて下せえまし」

文「ウーム、殊勝しゆしやうな心掛こころがけじや、時に吉とやら、そちの親方という新潟の沖にて親船に乗つて居る奴は何なんという名で何処どこの国の者か」

吉「私も根からの海賊じやアござんせぬ、新潟在の堅気かたぎの舟乗ふなのりでござんしたが、友達の勧めに従つて不図ふとした事から海賊の手下となり、女でござれ金品でござれ、見付け次第だまに欺だましたり剥取はぎとつたりして親船へ持運びして、女の好いいなア頭かしらの妾めかけ、また頭の氣に入らぬ女は寄つて群たかつて勝手にした其の上に、新潟の廓くわわへ売飛ばすという寸法で、悪事に悪事を重ねる中、去年の秋から一人の劍術遣つかいが来て、頭を毒殺して其の子分を手下に従え、以前に優まさる悪業あくぎやう、今じやア其の侍が頭でござりやす、悪事に悪事を重ねた私わっちども、此の苦しみを受けるのは天道様の罰ばちでござりやす、お、苦しい、旦那様早く殺して下さいまし」と両手を合せたまゝ、悶もだえ苦んで居ります。

三十

文治は吉藏が懺悔話を聞いて、そゞろに愛憐あいれんの情を起し、共に涙に暮れて居りましたが、二度目に来た劍術遣いと聞いて、

文「待て〜確しつかりしろよ、今いう二度目に来た劍術遣いの名は何なんというのだ、また幾人ばかりでまいったのか」

吉「確か、今頭あたまになつてゐるのは大伴蟠龍軒ばんりゆうけんといたしました、今一人はもと医者だそうです」

文「その名は何なんと申したぞ、これ〜今一人いちにんの名は何と……」

吉「あゝ苦しい、いゝゝゝ今一人ひとりは確か秋田……」

文「これ吉藏、吉藏」

と呼べども答えはございませぬ。

文「はて、これも緯切こしぎれたか、自業自得とは云いながら二人ににんの舟人ふなびとに死別しにわかれ、何処どことも知れぬ海中に櫓こしもなく、一人ひとりにて取残とこされしは何なんたる不運ふえんぞ、今この吉藏きちざうが臨終りんじゆうの一言いちごん、海賊の頭を殺して再び其の跡を受継うけつぎぎしは大伴蟠龍軒、医者いしやは秋田と聞くからは、こりや滅多には死なれぬわい、何処どこの島かは知らねども最早岸には一二丁、夜よの明けるのを待まちつた上、命限りに助けを得て、新潟沖の親船おやぶねに賊窟ぞくくつを構かまえたる敵大伴蟠龍軒、秋田穗庵すいあんの兩人、やわか討うたずに置くべきか、此の日本に神あらば武士たる者ものの一分いちぶんをお立てさせなされて下されまし」

と其の夜一夜を祈り明かし、夜の白々と明くるを幸い、板子を割いたる道具にて船を漕ぎ寄せようと致しますると、一二丁は遠浅で、水へ入れば腰のあたり、

文「いよく、神の助け給うか、有難し、辱なし」

と漸う陸へ上りまして、船を引上げ、二人の死骸は人目にかゝらぬようにして、島の入口二三丁往けども、人家はなし、只荒れ果てたる草木のみ、人の通りし跡だになければ、流石の文治も暫し呆氣に取られて、ぼんやり彼方此方を眺めて居りましたが、小首を捻つて、

文「いや、これほどの島に人の上らぬ事はあるまい、何処にか住居があるに違いない」と心を励まして或は上り或は下り、彼は一里余も捜しましたが、人の居そうな模様はございませぬ。もとより用意の食事は無し、腹は減る、力は抜ける、進退こゝに谷まつて、どつかと尻を据えまして、兎やせん角やと思案に暮れて居ります。

文「最早十二月の中旬、妻は何処に何うしている事やら、定めし今頃は雪中に埋もれて死んだであろう、さなくば色里に売られて難儀をして居るか、救いたきは山々なれども、此の身さえ儘ならぬ無人島の主、思えば我が身ほど不運な者はない、いや、愚痴を溢すところでない、海上にて彼の難風に出会い、幸に船は覆りもせず、此の島に漂い着いた

というのは……そのみか海賊の口から敵の在処の知れしは是ぞ神の助けであろう、あゝ無分別な事をしては第一神様に対しても相済まぬ」

と心を取直して又々一里ほど行けどもく人の足跡さえござりませぬ。

文「はて変だな、此の通り草木の生い立って居る処を見ると、余程暖かい島に相違ない、何処にか人里があるであろう」

と一番高い樹に登って四辺を見廻しましたが、眼に遮るは草木ばかりで人家のあるべき様もござりませぬ。

文「さては愈々話に聞いていた無人島か」

と力なく樹を降り、根尽きて其の儘其処へ気絶いたしました。お話分れて、此方は信州二居ヶ峰、中ノ峰の谷間の熊の穴に落ちましたお町が成行でございます。前に申上げました通り、お町は隅の方に小さくなって居りますと、穴の外へ飛出した親熊が帰つて、我子の寝て居ります側に蹲まって居ります様子、お町は薄気味悪く、熊の正面に向います、人間に物いうように、

町「これお前、先刻も申す通り私は決して悪人ではない、賊の為に災難に逢うて逃げる機に此の穴へ落ちた者、其の時お前が追掛けて出た彼の二人の者こそ泥坊じゃぞえ、私は

お町は余り腹が空きましたから、前に積んである胡桃を取上げましたが、さア割ることが出来ませぬ、懐剣を出して割ろうかとも思いましたが、いや／＼熊が見て自分を殺すと思ひ違い、万一の怪我でもあつては成らぬと氣遣いまして、齒に掛けて見ますけれども頓と割れませぬ、二つ持ってカチ／＼叩いて居りますと、熊はむっくり起き上つて、のそり／＼とお町の前へまいりまして、その胡桃を取ろうとする様子でありますから、お町は震え上つて、思わず持っていた胡桃を投出しました。熊は一向騒ぐ気色もなく、静かに其の胡桃を取上げて二つ三つ口へ入れましたが、忽ちぽり／＼と二つに割つて、それを両手に乗せてお町の前に出しました。さては私に食べるということかと、そつと一つ取りまして熊の顔を見ながら食べました。又二つ三つと其の通りにして食べますと、熊も安心の様子にて我子の側にころりと寝転んで、児に乳を吞まして居ります。お町は漸く胸を撫でおろして、

町「この猛獸までが私を助けてくれるか、あゝ有難い、これと云うのも日頃念ずる神様が此の熊に乗り移つて我身を守護して下さいるのであります、此の上ともに首尾好く穴を脱け出で、夫文治殿に逢わして下さいますよう祈り奉ります」

と一心不乱に祈りまして、

町「どうしたら此の穴を出ることが出来るか知らぬ」

と足掛りのする処へ足を掛けて立上つては見ますが、前にも申す如く此の穴は熊が自身に掘つたのでなく、天然の穴を用いたので有りまして、さながら井戸の如き切立て、深さも二三丈はありまして、其の穴からまた横に掘つたのでございます。熊は慣れて居りますから自由に出入いたしますが、人間殊に女子の身では熊のように自在に飛上つたり飛下りたりする事が出来ませぬ。居るともなしに此の穴の中で余程の日数を費しました。熊は折々雪の塊を持つて来ては兎にも食ませ、自分にも喰い、またお町の前へも持つてまいりませぬ。ところが段々その雪も解けて失る時分になりますと、穴の隅からたら／＼と清水が垂れてまいります。さア然うなると一日々々とだん／＼寒くなつてまいりまして、もう穴の中に居耐らぬ位になりました。獸類とは申しながら熊は誠に感心なもので、清水が滴るようになったので、熊の兎を穴の途中まで出しました様子、お町の心配は何程か知れませぬ。さては神様が我身を見殺しにする思召か、情ないと思つて居りますと、親熊が頻りにお町の前へ来て、後向に脊中を出して居ります。お町も始めの内は心付きませぬが、町「はて是れは、熊が私の脊に取付けというのか知らん」

と恐々、熊の脊中を撫でて見ますと、いかにも温順しくジツとして居りますから、思
い切つて熊の脊中へ確かり取付き、一生懸命神々を念じながら目を瞑つて居りますと、件
の熊は一飛びで穴の入口へ飛上りました。お町はホツと一息、四辺を見れば谷間々々に少
しずつ花が咲いて居ります。始めて蘇生の思いをなして、

町「あゝ辱けない、夢ではないか、それとも今までのが夢であつたか知らん」
と心を定めて四辺を見廻しますと、後の方に例の熊がジツと守つて居ります。

町「まだお前は私を守護してくれるのか、人と見たら嚙付くべき猛獣が、私の命を助け
るとは此の上の恩誼はない、辱けない、さア熊よ、お前はもう宜いから早く元の穴へ
お戻り、うか／＼して居ると、猫人のために撃たれるぞよ、必ず／＼お前の恩誼は忘れ
ませぬ、早くお帰りなさい」

と熊の頭を撫で、
「さア／＼」と熊を後に向けて促しますと、のそり／＼歩き出
しましたから、其の後姿を見送り、手を合せて、

町「あゝ有難い、辱けない」

と熊の影の見えなくなるまで暫く休みまして、又々一丁程登つて後を見ますと、横に熊
が来て居ります。

町「え、まだお前は安心せぬか、此処まで来れば大丈夫じゃ、何うぞ帰つて下さいよ」と頭を撫でて居りますと、

獵「やア女郎、脇へ寄れ、その熊を撃つのだ、早く〜」

と声掛けられてお町は恟り驚き、

町「な、な、何と仰しやいます、この熊をお撃ちなさると、そりやアまア慘たらしい〜」

と熊の惣身に抱付きました。此の体を見るより獵人は益々大音に、

「汝え其処退かねえか、そんな真似をして居ると共に打放すぞ」

町「いゝえ、この熊は私が命の恩人でございます、何うぞ助けて下さいませ、今頃熊をお取りなさいましても、左程のお徳にもなりますまい、どうぞ〜助けて下さい」

と熊の前に立塞がり、両手を合せて拜んで居ります。

三十二

一人の獵人は他の獵人に向いまして、

甲「おい、あの女め、熊に抱付いたぞ、ありやア只者^{たゞもの}じゃアあるめえ、魔法使か化物だろう、いつそ人ぐるみ撃殺してしまおうじゃアねえか」

と鉄砲を向けますと、

乙「これく人間を撃つと又名主殿へ呼付けられて酷^{ひど}い目に遇^あうぞ、まア待てく」

甲「それもそうだな、やい女郎^{めろう}め、其の熊ア汝^{われ}え縛^わつて引いて来いやア」

乙「おいくそんな無理な事を云うなつてば……女郎に熊ア連れて来られるもんか、何か仔細^{ちひ}があるに違^{ちが}えねえだ、汝^{わりや}ア此^{こゝ}処^{こゝ}に只鉄砲を向けて見張^よつてゐるが宜^よい、己^{おら}ア名主殿へ往^くつて話して来^くべえ」

甲「そんなら早く往^くつて来いよ、これ女郎、その熊ア逃^にがすと汝^{われ}え撃つぞ」

と暫^{しば}く山と山、谷^{へだ}を隔^{へだ}て、睨^{にら}み合^あつて居^ゐりました。

町「それ見なさい、お前は今更逃^にげる事も出来ない、あの獵人^{りやうじん}が万^{ばん}一^{いち}お前^{まへ}を撃つならば、私も共に命^{いのち}を棄^すてましょう、必ずくお前^{まへ}ばかり撃^うたせはせぬ、世^よにまします神^{かみ}々^々よ、たとい獸類^{じゆんるい}なればとて、命^{いのち}を助^{たす}けし大恩^{たいおん}あるもの何^{なに}うぞ助^{たす}けて給^{たま}われかし」

と熊^{くま}の傍^{そば}に寄^より添^そいまして、

町「さア穴^{あな}の方^{かた}へ往^ゆけよ、さアく」

と追いやる如く引立つれば、熊は頷く様子にてお町の顔を一度見て、一散走りに谷間の方へ駆け出します。

町「それ撃たれなよ」

と云う間もあらばこそ、一発ズドンと打放しました。お町は熊を見返りまして、

町「やれ撃たれしか」

と云う間にまた一発放ちました。さてお話變つて、文治の漂い着きました無人島は、佐渡を離れること南へ何百里でございますか、島の大きさも確とは分りませぬが、白鳥、鸚鵡、阿呆鳥などという種々の鳥が沢山居ります。文治は尋ねあぐみて殆ど気絶の体でございしましたが、暫くして我に返り、

文「あゝ天何故に我を斯くまで懲らしめ給うか、身に悪事をなしたる覚えなきに、如何なれば斯く我を苦しめ給うぞ、世にある時は人を助け、人のために人を懲しもし、また彼の友之助を助けるために蟠龍軒の屋敷へ踏入り、悪事加担の奴ばらを切殺したりとは云いながら、これ私慾のためならず、世のため人のため、天に代つて誅戮を加えたるに過ぎざれど、其の職其の身にもあらぬため却つて罪となりつるか、かゝる無人島に彷徨いて徒らに乾殺され、後世人の笑いを受けるより、寧ろ此の場に切腹して潔く相果て申さん」

と覚悟いたしました、また思い直して、

文「いや、見すく蟠龍軒似寄（により）の者が、新瀉の沖なる親船に忍んで居（お）ると聞きながら、武士と生れて一太刀怨（ひとたちうら）みもせず、此の儘死ぬるも残念至極、また女房とても生死の程も分らぬ中に、空しく無人島の鬼と化したる其の後に、それと知つたなら嘸（さぞ）かし我身を恨むであらう、さぞや蟠龍軒が笑うであらう、こりや土を喰つても死なれぬわい、よし／＼二人の舟子の衣類を剥（は）いで、船の修覆（しゆふく）の材料となし、獸類魚類さては木の実を搜して命を繋ぐ工夫が肝腎、ウム、向うに見えるは鳥なるべし」

とやおら身を起して腕に覚えの（ひとつぶて）一礫、見事に中（あた）つて白鳥一羽撃留（うちと）めました。やれ嬉しやと切石（きりいし）を拾うて脇差の柄（つか）に打付け、袂（たもと）にあり合う綿（わた）に火を移し、枯枝にその火を掛けて焚火（たきび）をなし、また樹の枝（き）を折つて樹から樹を柱（はしら）に、屋根をこしらえて雨露（あめつゆ）を凌（しの）ぐの棲家（すみか）となし、先ず其の日暮しの用意は出来ました。

文「これで先ず露命（つな）を繋ぐ趣向が出来たというもの、此の上は（いちじつ）一日も早く此の島を脱け出（い）でて、再び蟠龍軒（めく）に廻り合（あ）ひ、武士の嗜（たしな）み思う存分に敵（かたき）を討たなければならぬ、あゝ／＼我は斯（か）かる無人の島に漂（た）うて辛うじて命を継（つな）ぎ居（お）るに、仇（あだ）は日々夜々（ひびよ、）に歓楽を極めて居（お）ることであらう、實（げ）に浮世とは申しながら、天はさま／＼に人を操（あやつ）るものかな、蟠龍

軒よ、此の方が再び廻り合うまでは達者で居れよ、我妻もまた此の世に居らば何うぞ無事で居てくれよ」

と心の中に祈らぬ日とはござりませぬ。別に話し相手というもなく、只だ船を繕うこととのみ屈托して居りまする。折々木を切り魚を捕りますごとに、思わず、

文「汝蟠龍軒、切つてく切殺しくれん」

と大声に呼わりましては又我に返り、

文「これで思いが届かねば、人と生れた甲斐もなし、蟠龍軒達者で居れよ」

と云う折しも、木蔭に怪しき声ありて、「達者で居れ」という。文治は暫く四辺を見廻しまして、

文「さては何者か、我が哀れ果敢なき境涯を見て笑うものと見えるわい」

と体を潜めて様子を窺つて居りましたが、別に怪しい様子もござりませぬ。

文「はて、不思議なこともあるものだ、達者で居れと己の口真似をしたのは何者か知らん、まさか夢ではあるまい」

と段々山深く入込んで、彼方此方を尋ね廻りますると、高き樹の上に一筋の矢が刺さつて居りまする。

三十三

文治は端なくも樹の上に征矢を認め、

文「はて、彼処に矢の刺さっている処を見れば、今は人が居ないにしても、我のように漂うて来た者があるに違いない」

と独語をいいながら其の樹に攀登り、矢を抜いて見ますと、最早竹の性は脱けて枯枝同然、三四年も前から雨曝しになつていたものと見えて、ぽきくと折れます。

文治は窃ツとこれを抜取りまして、

文「チエ：有難や、これこそ確かに人の造りし征矢、案に違わず此の島は折々四辺の島の訪い来る島に相違ない、たとい其の島人が鬼であろうが蛇であろうが、事を分けて話したら、よもや頼みにならぬ事もあるまじ、やれ嬉しや、ヤツ……それ、今達者でおれと口真似をしたのは其の島人にはあらざるか、但し心の迷いかは知らぬが、かゝる矢種のあるからには、何時しか人の来るに相違ない、あゝ有難い」

また木蔭に声ありて、

「あゝ有難いく〜」

文「いや、今のは確かに……」

と四辺あたりを見ますと、一羽の鸚鵡おつむがつくねんと樹の又またに蹲うずくまって居ります。文治は心中に、「さては鸚鵡でありしか」と我ながら可笑おかしさに耐えず、

文「達者で居れ」

鸚「達者で居れ」

文「馬鹿野郎」

鸚「馬鹿野郎」

なか〜よく人の真似を致します。

文「やツ、これは面白い」

と其の鳥を押えますと、平生人の居りませぬ鳥でありますから、少しも人を恐がる様子もなく、馴々しく手の上へも止りません。

文「これは好よい鳥を見付けたわい」

とそれから二三の鸚鵡を押えて、住居すまいへ持帰りまして、「旦那様か、お町でございます」などと口真似をさせるのが何よりの楽たのしみ。日々鸚鵡を話相手同様にして其の日〜を送つ

て居りましたが、何分にも島には虫が多く居りまして、少しも火を絶やすことが出来ませぬ、昼夜とも焚火をして其の側に寝起して居ります。虫が多いくらいですから、夏は随分暑うございますが、冬は案外暖かく、寒中でも四月頃の陽気であります。月日の絶つのは早いもので、早くも一箇年を過ぎました。待てど暮せど人も来ず、身の上にも別に變りたる事もなく、食物を漁るの外は日々船繕いに余念なく、無事に大海へ乗出すことの出来るようにと工夫する外には何の考えもございません。此の島へ上つてから最早一年余になりますから、着物は切れ、鬚はぼうくとして、何う見ても人間とは思われませぬ。今日も船繕いに疲れて、夜に入り木の実などを食べて、例の通り焚火の端に打倒れて一寝入りいたしますと、何者にや枕元に立つて揺り起すものがあります。文治はがばと撥起き、

文「いや、其の方は何人じや、お、お町ではないか」

町「はい旦那様、ようお達者でおいで下さいました、お懐かしゆうございます」

文「ウム、町や、そちも達者でいてくれたか、まア何うして斯様な処へまいりしぞ、して能く私の居る処が知れたの」

町「はい、あの峠で端なくも貴方にお別れ申してから、さま／＼の艱難辛苦をいた

しましたが、それでも神様のお助けで、虎の顎を遁れまして、再び貴方にお目に懸ることが出来ました、これと云うのも矢張神様のお助けでございませう」

文「まあ何は扱置き、明暮其方のことを案じぬ日とてはなかつた、宜く達者でいられた、人も通わぬ無人島、再び其方に逢うというのは斯んな嬉しいことはない」

町「はい、貴方もお達者で」

と後は涙に物云わせ、暫し文治の顔を見詰めて居りますと、文治も堪え兼て熱い涙を流しながら、お町の手を握って引寄せますと、足もとから長さ三尺にも余ります蛇がのたりを打つてずる／＼／＼。お町は驚いて、「あれッ」と夫に凭れかゝりますと、

文「町や、こんな事は毎日の事じや、何うも致しはせぬ、お町々々」

と呼べども答えはございませぬ。文治は眼をこすりながら、

文「え、また夢か、馬鹿々々しい」

総身の汗を拭いまして、

文「もう夜が明けたのか、誠や聖人に夢なしとか、心の清らかなる人に夢のあるべき筈はない、我は夜となく昼となく夢現に心を痛め、さながら五臓を掻きむしらるゝの思、武士の家に生れながら腑甲斐なし」

と我と我が心に愧じて、焚火の辺にてほとと息を吐く折しもあれ、怪しや弦音高く一枝の征矢は羽呻りをなして、文治が顔のあたりを掠めて、向うの立木に刺さりました。

文「やア今の夢といい、また矢の飛び来りしは此の身の助かる前兆か知らん、此の身が彼のまゝ寝ていたら、或は此の矢のためにあたたら命を失ったかも知れぬ、妻の夢のため眼を覚せしところを見れば、定めしお町が八百万の神々に此の身の無難を祈っているのであろう、あゝ辱ない」

人情の常として、何に付けても思い出すのは女房子でございます。

文「あゝ危かった」

と思う間もなく、また二の矢がブウンと羽響きをなして飛んで来ました。文治はハツと身を拵り、矢の来た辺へ眼を付けて、

文「やアく拙者は決して怪しい者ではないぞ、漂流いたして難儀の者、助けたまえ」

と声を限りに手を合せて助けを乞いましたが、弓取る人は、聾か但しは言葉の通ぜぬためか、何程手を合わして頼み入つても肯入れず、又も飛び来る矢勢鋭く、殊に矢頃近くなりましたから、憫れむべし、文治は胸のあたりを射通されて其の儘打倒れました。

三十四

文治は囚らずも二の矢を射られて倒れたまゝ、身動きもせず様子を窺つて居りますると、弓を提げた島人が、小石を拾つて打付けましたけれども、文治は少しも動かぬものから、死んだと思つてか、いよく側に寄りまして、文治の胸元に刺さりました矢に手を掛け、引起そうと致しまする其の手をむんずと掴んで起き上りますと、島人は悔りして、島人「あゝ、あゝ」

文治は手を取つた儘、胸元に刺したと見せた矢を片手に持ち、

文「これ島人、最前から怪しい者ではない、助けてくれと申した言葉は其許の耳に通じないか、我は難船した者でござる、頼りなき漂流人でござるぞ、お聞入れなすつたか、宜しいか」

と手を放しますると、又々腰に差したる木刀様の物を持つて文治に打つてかゝる。その小手下を搔潜つて又も其の手を確と押え、

文「はて、此奴は言葉が通ぜぬと見えるわい、何時まで問答しても無益なり」

と考え直して、手真似口真似して「己は決してお前に仇をなす者ではない、漂流人で難

儀して居る者である」ということを知らせますと、少しは分つたものと見えまして、強しいて手向いする様子もございませぬ。

文「あなたは何処どこからお出いでになりました、何と申すお国のお方でございます」

島人「これ、己おれえ島だ」

文「成程、何と申す処なんからお出でかな」

島人「これ、己え島だ、彼方あっちからカノーで来ただ」

文「左様でござるか、どうぞ貴方の島へ御同道して下さいまし」

と手真似かた／＼申しますると、

島人「己え此の島で鳥を捕とるだ」

文「左様ならば私わたくしも同道して鳥を捕るお手伝いをいたしましょう」

文治はもう此の島人を逃がしては此の島を出る機会おわりがないと思ひまして、いろ／＼上手うまいを使って、話も確しかと分りませぬが、片言かたこと言まじりで交際つきあいながら、彼方あなた此方あなたを経廻へめぐつて、

さま／＼の鳥を撃取りました。最早日暮になりましたが、島人は夜よに入いつても帰る気色けしきがございませぬ。勿論無人島は虫や獣が沢山居りまして、慣れぬ身には安心して泊ることが出来ませぬから、島人は夜に入つて一夜を明かす所存と見えます。併しかしこう何か思案し

て居りますから、文治は、

文「さア〜」

と急せぎ立て、海岸へ出て見ますと、舟がございます。只今申上げましたカノウと申しまするは舟のことであります。これは丸木で彫ほりあ上げました物で、長さは凡およそ三間さんげん、幅は二尺五寸ぐらいあります。只今考えて見ますと、大阪の博物館にあります、古風の独木舟まるきぶねのようなもので、何なんの木か一向分りませぬ。舟といえは舟、人の二人も乗りますると、外ほかに何も置く処はございませぬ。さア何どうか此の舟へ乗せて連れて往つてくれと申しますと、島人は何なんだか未まだ文治を疑うたぐつて居ります様子、飛乗る途端に文治を陸おかへ突き放し、自分一人が飛乗りまして漕こぎ出そうと致します。併しかし海岸は遠浅で、岩角が沢山有りますから思うように舟が出ませぬ。是幸いに文治は突いきなり然海へ飛込み、カノこべりの小縁こべりに取付きました。その手を件くだんの島人が木刀を振上げて打とうと致しますから、文治は手早く其の手を取つて押え、其の儘舟へ飛上りまして、

文「やい最前からはほど申しても分らぬか、いかに言葉が碌ろく々通ぜずとも、あれ程手を合あわして頼たのんだじやないか、いよく肯きかずば打殺うちころすぞ、さア何どうだ、これでもか」

と手を振ねじあ上げますると、

島「ウーム、負けるく」

文「分ったか」

島「おおすみあきら大隅明へ……」

文「その大隅明と申すのは其許そのもとの名か」

と指さし致しますると、

島「えツく」

と親指を出しましたので、

文「さては此の島人の居おる島に大隅明という島しまつかぎ司おが居ると見えるわい、其の人ならば必ず分るであろう、召使同様な此奴こいつが分らぬのも無理はない我われが舟に乗るのを拒んで手向むかいしたというのも、我が同類を殺しはせぬかと疑うたぐつての事であろう、尤もつとも千万、併しかし我われが強ごうりき力りきに恐おそれてか、温順おとなしくなつたとは云うものゝ、油断ゆだんはならぬわい」

と文治は不図ふと思い付おきまして、提物さげものを取出して島人に遣つかわしますると、島人は嬉うれしそ
うに繰返くりかし／＼見て居おります。又文治が胴卷うちまの中より金かねを取出し、一分銀一枚を与えま
すると、島人は然さも嬉うれしそうに之これを押おしいたさぐ戴たいきました。掌ての上に乗せて、ためつすがめつ
見る様ようは、始めて手にしたものは思おもわれませぬ。

文「こう喜ぶところを見ると、金かねということを知って居おるものと見え。併し島司が有つて見れば、この金を遣やつたところで、自分の物にするという訳には行くまい」と感付きましたから、又々錢を出してやりますと、島人は両手を支つき、頭を下げて喜んで居おります。

三十五

さて文治は島人の喜ぶ様子を見まして、

文「漸ようやく心が解けたと見えるわい、さア舟を漕ぐように」

と手真似で知らせますと、島人は領うなずき、篋へらのような物を出しまして、ギユウくと漕ぎ始めました。只今の短艇たんでいのようなものと見えます。始めの内は風もなく、誠に穩おだやかな海上でありましたが、夜の更ふけるに従つて浪はますます烈はげしく、ざぶりくと舟の中に汐水が入りますのみか、最早小縁こへりと摩すれくになりまして、今にも覆くつがえりそうな有様でございませ。文治は心の中うちに、

「又も難船か、何なんたる不幸の身ぞ、八百万やおよろずの神々よ、どうぞ一命を助けたまいて、一

度蟠龍軒に遡り近めますよう、又二つには女房お町に逢いまして、共々に敵討の出来ますよう、助けたまえ護らせたまえ」

と思わず声を放ちて祈りますると、島人は不思議そうに文治の顔を見ては、何うかされるのかと怪んで居ります。文治はそれと心付きて、島人を励まし、自分も力を添えて舟を操りましたが、

文「いや待てよ、何処の島へ往くのか知らぬが、磁石も無ければ的もない、何方の方へ往く所存か知らん、困ったものだ」

と思ひまして、

文「これく島人、何処まで往つても見当が知れぬではないか」

と真似をして見せますと、

島「風暑い」

と申します。さては南の方へ往くのかと少しは安心いたしました。が、兎角する内に東の方が糸を引いたように明るくなりました。

文「は、ア、東は彼方の方だな、途方もない見当違いをして居るものだ、大分浪も静かになったようだが、こうして居る内には何れかの島へ着くであろう」

と夜の明けるに従つていよく安心いたしました。よう／＼其の日の巳刻頃になりますと、嬉しや遙か彼方に当り微かに一つの島が見えます。これぞ当時は八九分通り開けて居りますが、小笠原島でございませぬ。文治は盲亀の浮木に有附きたる心地して、

「正直の頭に神宿るとは宜く申した、我は生れて此の方、不正不義の振舞をした例はない、天我を憐みたまいてお救い下さるか、あゝ有難し辱けなし」

と喜んで居りますと、俄然一陣の猛風吹き起つて、忽ち荒浪と変じました。見る／＼中に逆捲く浪に舟は笹の葉を流したる如く、波上に弄ばれて居る様は真に危機一発でございませぬ。取付く島の見えぬ内は案外胆も据つておるものでございませぬが、微かなりとも島が見えますと、頼りに想う心が出ますので、何うしても気が焦るものでございませぬ。文治も島人も一生懸命になつて居りますが、何分櫓一挺しかござりませぬから、何うすることも出来ませぬ。浪のまに／＼揺られて居ります折しもあれ、大きな岩と岩との間に打込まれました。其の儘にして風の止むのを待つて居れば宜しいのでございませぬが、其処が気が焦つて居るものですから、

文「やツ、こりや大変、もし此処に斯うして居て、今に波が被つて来ると、岩間の鬼と消えなければ成らぬ、それツ」

と島人を励まして、岩と岩との間に櫓を挟んで舟をこじり出そうと致しましたのが運の尽、すわと云う間に櫓は中程よりポツキと折れてしまふ。その機みに舟は再び海上に飛出しました。もう如何ともする事が出来ませぬ。どう／＼と寄せ来る波上に車輪の如く廻りながら、彼是二三十丁も押流されましたが、又も大きな岩角へ打付けられて、無慙や兩人とも打ち処が悪かったと見えて、其の儘絶息いたしました。不思議にも文治が命の助かります次第は後のお話といたしまして、扱此方は二居ヶ峰の麓、こんもり樹茅の茂れる山間には珍らしき立派な離家があります。多分獵人の中の親方でございますよう。

獵人「やア喜右衛門どん、今なア二居ヶ峰にえれえ事がありやしたア、己アとな彌右衛門と二人での、帰るべえと思つたら、えれえ熊ア出やした、撃つべえと思うと、側に女さア附いているだて撃つことが出来ねえだ、己ア大え声で、女郎退けやアと喚つても退かねえでな、手を合せて助けてくれちツて泣くでえ、女郎退かねえば撃つ殺すぞと云つても逃げねえだ、彌右衛門め腹ア立つて、彼奴は化物だんべえから熊と一緒に撃つべえと云うだ、そんだから己ア後でまたお前におつ叱られると詰んねえだから、一走り往つて喜右衛門どんに聞いて来べえと云つて、此処へ来る途中で鉄砲が鳴りやした、多分彌右衛門め、己の帰りを待たねえで撃つたんだんべえ、何ほ何でも喜右衛門どん、人間を撃つちやア悪

かんべえな」

喜「悪いともく、たとい間違いでも人を撃つ殺すと、自分の首さアおっ飛ぶぞ」

獵「やア、そりや困つた事が出来たな」

と兩人は顔をしかめて居ります。

三十六

獵 人 二人が案じて居りますところへ、見馴れぬ女が尋ねてまいりまして、

女「はい、御免下さいまし」

一人の獵人は消魂しく、

獵「やアあの化物がやって来た」

喜「馬鹿野郎、そんなに騒ぐもんじやア無え」

流石に獵師の親方だけあつて落着いたもの。言葉静かに、

喜「一体お前様は何でがすえ」

女「はい、私は仔細あつて昨年夫婦連にて旅行の途中、二三里あとの山中にて山賊に

逢いまして、連合つれあひの者は行方知れず、私は二人の山賊に追われます途端、幸か不幸か、思いがけなく熊の穴へ落ちまして、其の熊に嚙み殺されることかと思いの外ほか、却かえつて熊のために助けられました、今まで命を存ながらえて居りました、不憫ふびんと思召して何どうぞお助け下さいまし」

喜「何しろ怖おっかねえ姿なりだなア、化物じやアあるめえなア」

女「決して怪あやしい者ではござりません」

喜「はア、そんじやアお前めえは何処どこの国の者で、名なんア何ちゆうのか其処そこえ書つけて見なせえ」
獵「成程、喜右衛門どんが云わつしやる通り、字い書くが一番宜いだ、さア化物、字い書けやア」

喜「紙ねイ無なえが、六郎どんが置いて往いつた筆えあるから、これで書かつせえ」

女「私は江戸の者で」

喜「まアそんな事あは後あとで宜いいから早く字いを書かつせえ」

女「はい」

と筆とを執とりまして古今集の中の

我が恋は行方はも知らず果はもなし

逢ふを限りと思ふばかりぞ

本所業平橋際某と書きました。

狛「それが汝が名けえ、馬鹿に長え名だなア」

女「いゝえ、これは私が子供の時習いおぼえました古い歌でございます」

狛「やア歌きやア、そんなら汝え唄え、己ア踊るべえ」

喜「馬鹿野郎、汝が踊るような歌とは違わア、汝イえれえ字イ書くだなア、これじゃア

はア人間だんべえ、こんな字イ書くもなア己が村に無えだ、名主どんに見せべえ」

喜右衛門が其の書いた物を持参しまして、其の村の名主に見せますと、

名主「やアこりやア能い書じやア、喜右衛門、なぜ其の女を連れて来ねえか」

喜「己はア連れて来べえと思つただが、出し抜けに連れて来てほざかれると詰らねえだ

から、連れて来ねえだ」

これからお町を同道致しまして名主の宅へ連れてまいりますと、

名「さア此方へお上りなせえ、さぞ難儀しなすつたんべえ」

町「これは御丁寧な御挨拶で恐入ります」

喜「ひやアこれ女子、こりや此の村の名主の紋左衛門様で、よく頼まつしやい」

町「有難うございます」

紋「お前めえらが熊くまおんな女な先生せんせいでがすかねえ、何処どこの者にしろ、金がねえば仕様がねえで、村むらでも何どうかしべえから心しんぺえ配へしねえで居おるが宜いいだ、此この村むらの奥おくへ十丁じゅうていべえ参まゐりやすと寺てらがあるだ、此この頃ころ尼にが死しやして子供こどもらア字じイ書いくことことがなんねえで、手てにおえねえが、淋しみしかんべえが旅たび金かねの出来きるまで子供こどもらに字じイ書いくことことを教おせえてくんろ」

町「御親切ごしんせつに有難うございますが、人ひとさまに字じを教おせえるなどという手前てまへではございませ
ん」

紋「そうでねえ、この界かい隈わいにお前めえぐれえ書いくものはねえだ、まアその形なりじゃア仕様が
ねえだ、これ婆ばばアどん、女おんなの着きるもんが有あるなら出でしてくんろ、さア熊女くまおんな、この着物きものを着
るが宜いいだ」

町「はい、有難う存ぞんじます、そのお寺てらと申まをすは余程あま山奥さんおくでございましょうか」

紋「なアに、山やまア一つ越こすべえで、そうさ、これから十丁じゅうていもあるかな」

町「そうでございますか、私は其そのの山奥さんおくが大だい好すきでございます」

喜き「ひやア山奥さんおくが好きすきだてえぞ、それい〜化物かぶつだんべえ」

町「なるたけ人の目めに掛からんのが宜いしいのでございます」

田舎こと殊へきそんに山間の僻へき村では別に手習師匠もござりませんので、寺の住持が片手間に教え
て居ります。その住持も近頃居りませんので、お町は日にち々く子供を相手にして、せい／＼
／仮名なづ尽くしや名な頭がしらぐらいを指南して居ります。偶たまには歌などを書くことも有ります。何し
ろ熊女が書いたというので土地では大評判おほ、新潟あたりへ聞えることもござります。一いちじ
日っ名主紋左衛門が寺へやってまいりまして、

紋「ひやア御免下せえまし」

町「これはく名主様、ようお出でなさいました、さア何どうか此方こちらへお通り下さいまし」

名「夕ゆう方かた、人の家うちへ来るでもねえが、急用あつてめえりました」

町「急用とは何事でございましょう」

紋「先ず話をしねえば分らねえだ、此の間中新潟の沖に親船が居りやしたが、それが海
賊だという事だまでな、その船の側に来る船は矢鱈に鉄砲を撃掛けたり、新潟あたりの旅人を
欺だましちやア親船に連れだつて、素すツ裸ばだか体に剥むぎ取つて、海に投ほうり込むてえ話だ、さア御領
主様も容易ならねえ海賊だてえんで、御人数ごにんずを出しても、海の中から飛道具で手向いする
もんだに依よつて、何どうにも手に負えねえてんだ、そこで御領主様から誰か船の中へ忍び込
んで討取る者へは褒美を出すてえ触ふれが出ただ、すると此の頃江戸から武者修行だと云つて

来ていた二人の侍が、その親船へ乗込んで海賊の親方を叩ツ切つて、船へ火イ掛けやして、泥坊を根絶ねだやしにしただ、何と強え侍じやねえか、大層お役所から御褒美を貰つたそうだが、その剣術の先生が今日わぎ／＼己おらア処へやつて来ただ」

町「へえ、江戸表の剣術の先生でございますか」
と首を傾けました。

三十七

紋左衛門は一服吸つて煙草盆を叩きながら、

紋「その剣術の先生様がな、お前めえさま様の字イ書くのを見て、此の女たゞものア只者じやア無えち
ゆうて、わぎ／＼越後からお前様に会いにござらして、私わしが家うちにいるだ、悪い事アあ
んめえから、ちよツくら私が家へござらつしやい」

お町は暫く考えて居りましたが、

町「え、其の先生と申すのは、まったく江戸のお方でございますか」

紋「言葉の様子では全く江戸のお方に相違ねえだ」

時にお町は、

「その剣術の先生というのは若しや蟠龍軒ではないか知らん、まこと蟠龍軒にしたところ、夫の誠めもあるゆえ我身一人で手出しはならぬ、また蟠龍軒にあらずとも、江戸のお侍に此の今の姿を見られるのも心苦しい」

と思ひまして、

町「はい、あなたの御親切はまことに辱のうございですが、零落れ果てたる此の姿、誰方かは存じませぬが、江戸のお侍に会いますのは心苦しゅうございませぬ、何卒お断り下さいますし」

紋「いや、それは宜くあんめえ、たとえ昔は何様な身分だつても今は今じゃねえか、海賊を退治して御領主様から莫大の御褒美を頂きなすつた位の大先生だ、会つて悪いこともあんめえから、会うが宜いじゃねえか、事に依つて金でも呉れさしたら、その金で路用も出来るてえもんだ、二つにはまた我が亭主の居所も知れるかも知れねえだ、そんな因業なことを云わねえで、私と一緒に往かつせえ」

町「いゝえ、思召は有難う存じますが、お断り申します」

紋「まあ然う云わねえでござらっしゃい」

町「此の儀ばかりは何うぞお免し下さいまし」

と押問答して居りますると、表の方にて大伴蟠龍軒外二人が、

「え、そんな事であろうと思つて、表に立つて聞いていた、御免よ」

と押取りがたな
押取刀で入つてまいりました。お町は素より顔を知らぬものですから、蟠龍軒と

は心付かず、

町「いゝえ、お恥かしゆうござんす」

と裏口から逃出しました。

大「それツ」

と云うより早く、遠見に張つて居りました門弟一人、一筋道に立塞がり、

門人「どツこい、そう肯くはいかんぞ」

と取押える後から追い来りし蟠龍軒、お町を取つて引据え、と見ると心の迷いか、小野

庄左衛門の娘の顔だちと少しも違ひませぬ、心の中に、

大「はて、よく似た女子もあるものだ、併し彼がこんな山奥に来よう訳もない、寧そ打

明けて蟠龍軒と云おうか、いや、桜の馬場でお町の親父庄左衛門を殺し、脛に疵持つ此

の身、迂濶なことは云えぬわい、他人の空似ということはあるが、真実庄左衛門の娘かも

知れぬ」

と思ひました故、さあらぬ体にて、

蟠「これく女中、お前は何処どこの者だか知らんがな、拙者の眼には都の者としか見えぬ、拙者も元は江戸の者だ、難儀なことがあるならば何処までもお貢みつぎ申そう、これく女中、そんなに力を出しても……これ門弟、えゝ氣の利かぬ奴らだな、手て伝つたえというのではない、何をまごくして居おるのだ、予かねて貴様たちに言付けて置いたではないか」

門弟二人は領うなずきまして、

「左様々々、まア名主、そなたも我らと一緒にまいれ」

と無理に連立つて此方こなたへまいりました後あとで、

蟠「これ女中、もう其許そこもとが何程一もが※いても逃すもんじやアない」

町「あなた、何うぞ御免下さいまし」

蟠「分らん奴だな、えゝ面倒な、じたばたすると斯か様よういたすぞ」

とお町を其の場に押倒し、其の上に乗し掛つて、

蟠「さア何うだ、今更何うも斯こうもねえ」

今はお町も一生懸命、用意の懐剣を取出そうと致しますると、

蟠「やア此奴め、刃物を持って居やがるな」

ぎゅツと其の手を押え付けました。

町「あいたゝゝ」

蟠「さアこれでもか、何うだゝ」

と無理強談、折柄暮方の木蔭よりむつくり黒山の如き大熊が現われ出で、蟠龍軒

が振上げた手首をむんずと引ツ掴み、どうと傍に引倒しました。思いがけなき熊の助勢に

お町は九死の境を遁れ、熊の脊に負われて山奥深く逃げ延びました。何時まで経つても

先生が帰つて来る様子がございませぬから、二人の門人は氣遣いながら、名主同道にて引

返してまいりますと、こは如何に、先生が樹の根方に倒れて居ります。恟り驚いて、

門「やア先生が倒れて居る、先生々々、何うなすつた、やツこりや大變、先生が氣絶し

て居る、これ名主、水を、早くゝ」

二人の介抱で蟠龍軒は漸く心付きました。

門「先生、お氣が付きましたか」

蟠「いや何うも飛んだ目に逢うた」

門「何うなさいました彼の女は」

蟠「とうとう逃げられてしまった」

門「馬鹿々々しいなア、併し先生、あの婦人は全く船中でお話のあつた庄左衛門の娘お町と申す者でございましょう」

蟠「まったくお町に相違ない、相違ないが、何うして斯様な山奥へ来て居るか、それが分らぬ、併し筆蹟と云い顔形といい、確かにお町に相違ない」

門「そりやア惜いことをしましたなア、やア先生、大層お手から血が出ているじやア有りませんか」

蟠「実はこれがために氣絶したのじや」

門「あのお町が喰付いたのですか」

蟠「いや〜何か其処らに居りはせぬか」

と云われて門人二人は、「何が〜」と云いつゝ五六間先へまいりますと、山のような真ツ黒な物がむず〜〜。

門「やゝツ〜……やゝツ……熊だ」

と叫びながら一同其の場を逃去りました。

三十八

お町は熊に助けられて山深く逃げ延びましたが、身を寄せる処は勿論、食物もございませんから、進退いよく谷まりました。その辺を打見ますと、樵夫の小屋か但しは僧侶が坐禅でもいたしたのか、家の形をなして、漸く雨露を凌ぐぐらいの小屋があります。

町「たとえ此の山奥で餓死するとも野天で自殺は後日の物笑い、何者の住いかは知らぬが、少々お椽を拝借いたします、南無阿弥陀仏く」

と静かに坐を占めまして、何方が江戸か分りませぬが、

町「亡き御両親様、此の身が此の世に出でし幼き時より、朝夕の艱難苦勞あそばしてお育て下さりました甲斐もなく、無事で亡き魂をお弔い申すことも適いませず、人も通わぬ山奥でむぎく相果るとは、何たる不孝でございましょう、くれ／＼もお許し下さいまし、たま／＼御両親のお鑑識にて、末頼もしき夫を持ちましても、運拙くして重なる不幸、今頃何処に何うしておいでなさるやら、但しは山賊のためにお果てなされしか、私には不幸にも斯かる深山に流浪の身、一粒の米もなければ居所もなし、此の儘餓死いたすでございましょう、不孝な娘とお叱りなきよう、くれ／＼も願いまする、先程無法な振

舞をした劍客者けんかくしやというは、面は素おもてもとより知りませぬが、江戸の者ものといい、又大伴……万一敵かたきではないか知らん……たとえ敵であればとて、先程の手並では逆とても及ばぬ女の悲しき、寧いっはずかそ辱しめられぬ其の内に、おゝ左様そうじゃ左様そうじゃ、此の身を汚けがしては其れこそ自害にまさる不孝不義、且那樣ゆるお免し下さいまし」

と覺悟の折柄、がさく音ねがしまするので、瞳を定めて見ますると、例の大熊でござい
ます。

町「おゝ、そちは何時いつぞやの熊であつたか、先程は宜よう加勢かぜをしてくれやつた、其方そちと私わたしと何どういう因縁いんえんか知らぬが、去年こぞの冬から我身を助け、今又此こゝ処ところに來合あわして、既すんでのこ
と辱はずかしめを受けようとする危急を救うてくれるとは辱かたじけない、有難ありがたい、よう聞分きけてくれ
よ、かく申す私は親の代から浪人の身とは云いながら、武士の娘で武士へ縁付き、夫の出
世大事じだいじと身を粉こに砕くだきて辛しんろう勞らうの甲斐あひもなく、又我が夫とても数多あまたの人を助けた事こそあ
れ、塵ちりほども我が心に愧はずるような行いをした事はない、それに如何いかなる因果いんぐわの廻めぐり合せ
か、重ね／＼の不幸ふこう続き、いよく今日けふという今日は死なねばならぬ事に成り果てまし
た、今までの恩誼おんぎはたとえ彼の世あへ往ゆこうとも決してく忘れはせぬ、此の上は其方そちも山
奥へ歸り、くれ／＼も用心用心して獵かり人ゆうどや無法者むぼうしやに出会あわぬよう、無事で達者ながいきで長生ながいき

してくれよ、思えば、人間を助けるほどの情深きお前をば、何故天は人にしなんだか、世はさま／＼とは申しながら、甲斐なく思うぞよ」

と熊の頭を撫でて暫く、有難涙にくれて居りますと、熊も聞分けてか、悄然と萎れ返つて居ります。お町は涙を払いながら、

町「さア、もう覚悟の我が身、何の怖いこともない、早く帰つてくれ、さ、帰つてくれ、まだ私を慕つていますか」

と思わず熊の首のあたりに飛付きまして、よ、とばかりに泣き沈んで居りましたが、暫くして我に返り、

町「さ、夜でも明けて獵人に見付けられては其方が危い、早う帰つてくれ」

と両手を合せて伏し拝み、懐中より取出したる夫文治より譲りの懐剣を抜放ち、

町「旦那様、御免遊ばせ」

とあわや喉笛へ突き立てようと身構えました。さて文治が再度の難船に舟人諸共気絶いたしました次第は前回に申上げました。天義士を棄てず、あたりの船頭がこれを見付けまして、

「やア、彼処に旅人が倒れてらア、それ難船人々々々、確りしろよ、お、気が付い

たか」

文「これはく何処どこのお方が存じませぬが、お助け下さりまして有難う存じます」

船頭「とても駄目だと思つたが、よく気が付いたなア」

文「有難う存じます、今一人いちにんの舟人は如何致したか、御存じありませんか」

船「此処ここにいるじやねえか、見なせえ、此の通りの打傷、いろく介抱もしたが、とても駄目だ、諦めなせえ」

と聞いて文治は舟人の亡骸なきがらに縋すがり。

文「これ島人、これ島人」

もう冷え切つて居りますから、いくら呼んでも甦よみがえりは致しませぬ。

文「さてく不憫ふびんなことを致したわい」

船「どうも仕方がねえだ、諦めなさるが宜いい」

文「文治は夢を見たような心地、

文「一体こゝは何処どこでござりましょう」

船「何処どこツて大変な処だ、己おらア新潟通いの船頭だが、昨日きのうの難風なんふうで、さしもの大船たいせんも南ほうの方へ吹付けられ、漸ようよう此処ここまで帰る途中、毀こわれた小舟に二人の死骸、やれ不憫なこ

をした、定めし昨日の風で難船したのだろうと、幸いに風も静かになったから、手数を掛けてお前がたを助けてやったのだ」

文「何なんともお礼の申そうようもございませぬ、こゝは越後の新潟近所なごでございませぬ」

船「どうして、これから新潟までは何百里という海路、三日や五日で往いかれるもんじゃアねえ」

と聞いて文治は今更あっけ呆氣まに取られて居りまする。

三十九

文治は暫しばし呆氣まに取られて居りましたが、

文「新潟通いの船とあれば、定めし此の船は新潟へまいるのでございませぬ」

船「へえ、新潟へ往いく船ですが、見受けるところお前めえさん様はお武家様のようだが、一体何処どこのお方かね」

文「私は江戸の者でござります、故ゆえあつて越後新潟へまいります途中、信州二居ヶ峰、

中の峠にて山賊に出会い追ひ往く中、女房を見失い、彼方此方と尋ねますと、新潟沖に大船があつて、其の船に海賊が……」

と云いかけて四辺を見廻し、

文「多分その大船に居るであろうと人々のいうにまかせ、取急ぎ新潟へまいりまして、旅宿にて船の様子を尋ねて居ると、こうくう奴の勧めに従い、二人の舟人を雇うて沖へ乗出したところが、図らずも難風に出会い、その二人の舟人は途中に於て相果てました、一人の舟人が死際の懺悔話を聞きますると、旅宿で船の世話をしてくれた商人も其の二人の舟人も同じ穴の貂、やはり海賊の手下であつたそうでございます、察すると此の私の女房も同じ仲間の奴に勾引され、海賊船に取押えられて居りはせぬかと案じて居る折柄、こゝに死んで居る島人が、私の漂うて居つた無人島へ来りしゆえ、辛うじて其の舟に乗込み、一度新潟沖に着いたし、女房の在所を尋ねようと思つて小舟を乗出したところが、又も難船して此の始末、お救い下さいますと有難う存じます、只今貴所方より此の船は新潟行と承わつて、悔りするほど喜びました、此の上の御親切に何うか私を新潟までお連れ下さいまし、此の御恩は死すとも忘れませぬ」

船「まあくお前さん、安心して目でも眩すといかねえ、薬でも飲まつせえ」

文「何から何まで辱かたじけのう存じます」

船「お前めえらが連つれの死んだ人ア何どうすべえ」

文「ほんに心付かなかつた、只今まで船の中で死んだ者は何どういう扱あいを致すものでし
よう」

船「陸おかが近かけりやア伝馬てんまへ積んで陸へ埋うめるだが、何ど処こだか知んねえ海中じやア石ウ付
て海へ打ぶつり込まむだ」

文「左様ですか、永く置いては船の汚けれ、此の儘ど何どうぞ」

船「おか、合あつた、客人じやうぶつ成じ仏ぶつさつせえ、それく江戸の客人危あねえぞ」

文「はい、有難う存じます、南無阿弥陀仏く」

さて文治は船頭の介抱にて身体も以前に復し、それく金を出して礼をいたし、日を
経て無事に新潟沖へ着船いたしましたして、伝馬で陸おかへ上あり、一同無事を祝して別れを告げま
した。これより文治は彼方あなたこなた此方と尋ね廻りまして、漸ようやく此の前泊りました旅籠屋はたごやへまいり
ました。

文「はい、御免下さい」

女「入いつしやいまし」

文「一昨年中はいろ／＼お世話になりました」

と云われて主人は暫く文治の顔を見詰めて居りましたが、漸く思い付いたと見えまして、主「やア旦那様、よくまア……ほんにマア宜く御無事でお帰りなさいましたなア、何うして助かりやしたえ、あの時私があれ程お前様に、ありやア海賊の手下だと申しやしたのに、何でもお前様ア見物に往くだつてお出でなさりやしたが、それきりお帰りが無えから、いくらお侍でも殺されたんべえと思つていやしたが、宜くまア帰つてござらした、お目出度う存じます」

文「いや、あの二人の舟人と親船までまいらぬ内に難船してな」

主「へえー難船しなすつたかえ」

文「どうせ魚の餌食と覚悟して船の漂うまゝに任したのが、却つて幸いとなつて無人島へ着きましたな」

主「へえ、無人島、それから何うしなすつた」

文「いやはや無人島でさん／＼難儀いたしました」

主「まア、そりやア飛んだ事でござりやした、お同伴の船頭二人は何う為せえましたね」
文「お前のいう通りあの二人も海賊の手下であつた」

主「それ御覧なせえ、それだから私わしがあんなに止めたのに到頭とうとう強情をお張りなさつて」

文「今更そんな事を云つても追付おっつかない」

主「その二人は何うしやした」

文「天罰は恐ろしいもので到頭船の中で死にました」

主「旦那様がお殺しなすつたのでやすかえ」

文「いや左様ではない、彼ら二人は毒を喰つて死にました」

主「へゝえ成程、因果ちゆうものは恐ろしいもんでやすなア」

文「御主人、話は変わるが、この貼付はりつけの中うちにある短冊たんざくは何者の筆蹟でござるな」

主「へえ、こりや熊女が書きやした」

文「その熊女と申すのは誰でござるな」

主「何なんだか知りましねえが、信州の山の中で熊に助けられたとかいう女でござりやす」

文「はてな、この歌といい筆蹟といい好よく似た者もあるものだな」

と暫く首を拈ひねつて居りましたが、

文「こりやア正ましくお町の筆蹟に相違ない……この女はまだ生きて居りますか」

主「生きて居おるにも何も此の通り字を書きます」

文「何処どこに此の女は居りますか」

主「此の間まで二居峠、中の峰の寺に居りやしたそうで、これを其の先せん頃ころ当所で海賊を退治しやした江戸の剣術の先生が聞付けやしてな、美人だてえので態わざ々く逢いに往いきやしたところが、その熊女が逃出したそうで、けれども先生だから免ゆるさねえ、山の中へ追ッ掛けてまいりやすと、何処どこを何どう嗅付けたか、大きな熊がむくくと出て来やして、先生様の腕を押えておっぽり出しやした、それきりさア、誰もその熊が怖おっかねえッて其の山へ往ゆく者もアありやせんよ」

と伝聞の儘を物語りました。

四十

文「御亭主、それは何時頃いつごろの事ですか」

主「なアに直先月じきのことでありやす」

文「左様か、どうも有難い、就つては御亭主中ちゆうじき食じの用意をして下さい、今から夜へ掛かけ、その二居峠中の峰まで往ゆかにやアならぬ」

主「へえ、あなたも熊女に逢いたいのですがすかえ、兎角剣術の先生は熊女が好きと見え
ますな」

文「そんな事は何うでも宜い、早く中食を」

主「今から何うでも往かつしやるか、十里べえありやすぜ」

文「次第に依つては一晩ぐらい途中へ泊つても苦しゆうない」

主「さア駄目ですが、雨え降つてまいりやした」

文「ウーム、何処まで天道様は此の文治をお憎みなさるか、これしきの雨、何程のこと
やある、それツ」

と身軽に打扮ち、夜に入るも厭わず出立いたしますと、途中から愈々雨が烈しくな
りましたので、余儀なく一泊いたしましたして、翌日二居峠の三俣村という処へまいります。
日はとつぷりと暮れて足元も分らぬくらいになりました。地の理は宜く聞いてまいりまし
たから、岐路に迷いもせず、足元を見ては歩一歩山深く入つてまいりますと、大
樹の蔭からのつそりと大熊が現われ出しました。流石の文治も恟りして、思わず二三歩
後へ退り、刀の柄に手を掛けて寄らば突かんと身構えましたが、更に飛付く様子もなく、
先に立つて後を振向き、心ありげに奥深くまいります。

文「さては噂に聞いたお町を助けし熊はこれなるか、併し遙々越後から雨を冒して此の山奥まで尋ね来て、お町で無かつた日にやア馬鹿々々しいな、何うかお町であつてくれ、ば宜いが」

と心中に神々を祈りながら熊に尾いてまいります。やがて半道も来たかと思ひますと、少し小高き処に一際繁りました樹蔭があります。何か知らんと透して見れば、樵夫が立てましたか、但しは旅僧が勤行でもせし処か、家と云えば家、ほんの雨露を凌ぐだけの小屋があります。文治は立止つて表から大声に、

文「え、お小屋に何方かおいでなさるか、はて、人のいそうな家だが、御免下さい」と中へ入つて見ましたが、暗がりでも少しも分りませぬ。懷中から用意の火打道具を取出しまして、附木に移し、四辺を見ますと、何時か熊は何処へか往つてしまいました。

文「何うも人の住んだような跡があるが」

と又附木を出して隈なく見廻しますと、柱とおぼしき処に何か書いてあります。それも木の燃えさしで書きましたのですから、はつきり分り兼ます。その内に附木は燃え切つてしまふ。

文「やア、こりや困つたわい」

と其処そこらの木屑きくずに火を移して読みますと、「我が恋は行方ゆくえも知らず果てもなし」までは読めましたが、後は確あとしかと分りませぬ。これは古今集の恋歌こいかでございしますが、筆蹟は消し炭で書いたのですから確と分りませぬ。

文「全くお町の成れの果ではないか知らん、旅りよしゆく宿しゆくで見た短冊たんざくといい、今また此の歌といい、何どうもお町らしい、お町であつてくれ、ば何れ程嬉どしかろう、神よ仏よ、早く此処こゝに居合す人に逢わせ給え」

と祈つて居りますと、積る木この葉を踏分け来るは正まさに人の足音でございます。

文「はてな、今其処そこへ人が立止つた様子、もしやお町では無いか知らん」

と燈火あかりを翳かざして見ようとする途端に火は消えてしまいました。何か口くちの中で云うて居る言葉は確かに女の声であります。もう文治は耐たまり兼て、「やアお町か」と駈出うちだそうと致しました、心を静め、

文「待てよ、先刻せんこくから表たゞずに佇たゞんだまゝ近寄らぬ処を見れば、日頃女房に恋こい焦これている我が心に附け入つて、狐狸こりのたぐいが我を誑たぶらかすのではないか知らん、いやゝ全く人も知れぬ、兎も角も声をかけて見よう」

と度胸たすを据すえて、

文「表においでなさるのは何方どなたでござるわたくし、私は此の山中に迷うて居る女子おなごを尋ぬる者でござるが……」

と云いながら静かに立つて女の側に立寄ろうと致しますと、件くだんの女は二三歩後へ退りまして、

女「おのづから涙ほす間まも我が袖に」

文「露やは置かぬ秋の夕暮」

町「えッ、そんなら貴方は旦那様か」

文「おゝ、お町であつたか」

町「旦那様ア、御免遊ばせ、おゝ嬉しい、おゝ嬉しい」

と馳はせ寄つて文治に抱き付き、胸に顔当てゝ、よゝとばかりに泣き悲かなしんで居ります。

文治も拳こぶしにて涙を払いながら、左手ゆんでに確しつかりとお町の首を抱えて、

文「町や、よう達者でいてくれた、よもや此の世の人ではあるまいと思つた、よう達者でいてくれた、こんな嬉しい事はないぞ、さぞ難儀したであらう、さぞ困苦こんくかんなん難難なんなんしたであらう、この文治もの、そちに劣らぬ難儀はしたが、天日てんぴに消ゆる日向ひなたの雪同前、胸も晴はれれしたわい、おゝ斯こん様な悦よろこばしい事は……」

と鬼あざむを欺く文治もそゞろに愛憐あいれんの涙に暮れて、お町を抱かえたまゝ暫く立竦たちすくんで居ります。お町は漸ようやく気も落着いたと見えまして、

町「旦那様、私は……」

文「もう宜いい、もう宜い、何も云うてくれるな、敵かたきの手掛りも薄々知れて居おるゆえ、今に満足させるぞよ」

町「はい、旦那様、あの蟠龍軒めは……」

文「よし、左様に心配してくれるな、おゝ悦ばしい」

とお町の手を取つて小屋の内に一休み、言わず語らず涙にくれている、互いの心うちの中は思いやられて不憫ふびんでござりまする。

四十一

文治夫婦は深山みやまの小屋にて、島に一年蟄居ちつきよの話、穴に一年難儀の話、積る話に実が入りまして、思わず秋の夜長を語り明しました。

文「もう夜よが明けたの」

町「おや、もう夜が明けたのですか」

と云つて居りますところへ一人の男がやつてまいりまして、

「やア旦那様」

文「おゝ、そちは國藏ではないか」

國「旦那様、漸うのことで尋ね当てました、これは御新造様御無事で」

町「おや、國藏さんですか」

國「まア何うしてお二人が斯様な処に、夢じやアありますまいなア、私やア嬉しくつて耐らねえ」

文「まア其方は何うして斯様な処へ来たのか」

國藏は涙を払い、

國「話しやア長えことですが、一昨年あきじゆうの秋中、旦那が越後へお出でなすつたと聞きやして、後あとを慕つて参りめえやして、散々此処こゝらあたりを捜しましたが、さつぱり行方が分りませんので、到頭越後まで漕付けこぎつやした、だんく尋ねたところが、斯うくこいう方が何処どこ其処へ泊つたと云いやすから、其処へ往つて聞きますと、二三日ぜん前に沖見物をすると云つて船に乗り出したと聞いて、私わっちアどの位くれえがつかかりしたか知れやせん、まごくしている

内に生憎病氣に罹りやして、さるお方の厄介になつて居ります中に、江戸の侍が海賊を退治したという噂、幸い病氣も癒りやしたから、もしや旦那ではないかと様子を聞きやしたところが、確かに大伴蟠龍軒、どうか旦那方を捜してお知らせ申したいと思つている内に、その手柄か何か知らねえが、江戸においてなざる御領主様がお抱えになるとか云う事で、先月末に蟠龍軒めは江戸を指して出立しやした」

文「それは宜い事を聞いた、それにしてもお前は何うして此処へ」

國「さア、その御不審は御尤ですが、越後にいる時分この山中に迷つて居る美人があると云うことを風の便りに聞きましたから、江戸に帰る途中、もしやと思つて昨日から捜した甲斐あつて、此処でお二人にお目に懸るとは神様のお手引でござんしよう、私アこんな嬉しい事はござりやせん」

文「あゝ、つい話に紛れて忘れて居つたが、お前は何うして蟠龍軒の顔を知つて居るか」
國「私ア一向存じやせんが、女房のお浪が浅草の茶屋にいる頃から宜く知つて居りまして」

文「左様か、お前は女房まで連れて私の跡を慕つて来たのか」
國「へえ、ところが今いう通り、越後で病氣に罹りやしたが、私ア一文も銭がねえから

可愛想だとは思つたが、お浪を稼ぎに……」

文「なに、お浪を勤めに出したと」

國「へえ、旦那の為にやア命を助けられた私ども夫婦でござんす、身を売るくれえは当り前の事めえです、さア今からお支度なさいまし、江戸へお供を致しやしよう」

文「そうするとお前は、お浪を越後へ置去りにして来たのだな」

國「そんな事は何うでも宜いじや有りやせんか」

文「いや左様そうでない、幸いに文治は二度も難船して、九死一生の難儀をしたが、肌身離さず持つていた金は失わぬ、さアこの金子きんすでお浪を請出し、そちは後あとからまいれ、礼は江戸で致すぞよ」

國「そんなら旦那様、折角の御親切を無にするも如何いかゞ、このお金は有難く頂戴いたします、御新造様、随分危険けんのおんな山路やまみちですからお氣をお付けなせえまし」

町「有難うございます、早くお浪さんを連れて江戸へお帰り下さいまし」

文「國藏、心こころ置おきなく緩りゆつくと後あとからまいれ、さアお町、もう斯こうなつたら一刻も早く里へ出て支度をせねばならぬ」

と衣類其の他たの支度をなし、江戸表をさして出立しまして、先まず本所業平を志して立花

屋へまいりますと、何時か表は貸長屋になって、奥に親父が隠居して居ります。

文「御免下さい、立花屋の御主人は御在宅かね」

主「はい何方様で、いや、これはく旦那樣、よくお達者でおいでなさいました」という言葉も涙ぐんで居ります。

主「よくまあ旦那樣、おや、これはく御新造様でございますか、ようまあお揃いで、何方からおいでになりました」

文「いや永々御心配をかけまして有難う存じます、何から申して宜しいやら、何うも江戸を経つて後はさま／＼な難儀に逢いました」

町「伯父さん、あなたも宜うお達者で」

主「さアくお上りなさいまし……おい、婆さん、お茶を持って」

婆「これはまあ旦那樣、御新造様、何うしてまあ」

主「婆や、御挨拶は後にしろ」

主「え、旦那樣、私も御覽の通りの老人、料理屋を止めまして、只今では表長屋を人に貸しまして、忤は向島の武藏屋へ番頭と料理人兼帯で頼まれて往つて居ります、旦那樣はお宅をお払いになりました、差当り御当惑なさいましょう、実は婆さんと二人で淋しく

思っているところでございますから、おいで下さいますれば却かえつて好都合でございます」と老人夫婦は下へも置かず懇ねんごろにもてなして居ります。

四十二

文治も悦んで、

文「実は差当り居所いどころに当惑いたしましたので、お頼みにまいりました、何分よろしく、お町丁度宜よかつたなア」

町「まア何より有難う存じます」

文「友之助や森松は相変らず折々遊びにまいりましようか」

主「え、もう皆さんが代り々お尋ね下さいます、いつも森松さんが来なさると、貴方のお話をしちやア帰りには泣別れを致します、それからつい十日ばかり以前でございませうが、友之助と豊島町の亥太郎さんが落合いまして、旦那様方が無事に蟠龍軒を討つて来れば宜よいかと、大層心配しておいでなさいました」

文「はい、手前ども、其の決心で江戸表を立つてまいったのでござりますが、行違ゆきちがい

まして、又ぞろ江戸へ引返してまいるような事になりました、此の上は松平公の御家中藤原氏を頼み、手続きをもつて尋ねましたなら、蟠龍軒の居所の知れぬことも無かろうと思ひます」

主「それは、何うかまア此の老爺の生きて居ります中に、敵が討てますれば、もう私は外に思い残すことは有りませぬ、何うか一刻もお早く」

町「他人の貴方様までそう思召して下さるのは誠に有難う存じます」

ところへ亥太郎がぶらりと遣つてまいりました。文治夫婦を認むるより狂気の如く飛上つて、

亥「やツ旦那、よくお帰りなせんした、御新造嬉しい、私ア亥太郎でござんす」

と互の挨拶も済んで、それから主客数人、久々の逢瀬に語り尽せぬ其の夜を明しまして、一日二日と過ぎます内にはや三月の花見時、向島の引ける頃、混雑の人を掻退けく一人の婦人が立花屋へ駈付けてまいりまして、

女「はい御免下さいまし、此方は立花屋の隠居でござりますか」

主「何方でございますえ」

女「はい私は向島の權三郎方から」

主「あゝ忤がまいって居りますから其の使にでもおいで下さいましたか、それとも忤めが何か馬鹿な事でも致しましたか」

女「いえ、私はそんな忌らしいことで参ったのではありませんぬ」

主「へえ、これは失礼な事を申しました、貴方は年を取っておいでゞもお美しいから、万一忤が夫婦約束でも致しはせぬかと邪推して失礼を申しました、へえ御免下さいまし、へえ、何の御用でござりますか」

女「ちよつと貴方の息子さんにお聞き申したい事があります」

主「それいよく、いえ忤は一寸」

女「いゝえ、そんな事ではござりません、此方に文治様がおいでなさいませうか、ちよつとお伺い申します」

主「一体あなたは何方からおいでになりました」

女「私は当時權三郎方に居ります下女でござりますが、何と申したら宜うござりませうね、あの何でござんすよ、三宅島からと申して下さいまし」

主「えッ、島から、さア大変、旦那様ア女嫌いだとばかり思っていたが、島においでなすつたらお氣が變つたと見えて、飛んだ事をやらかしなさいましたなア」

女「御老人様、あなたは何を仰しやるのでございます、私はそんな浮気なことで参つたのじゃありません、ちよつとお目に懸つて大事な事を」

主「大事な事とは何事で」

女「まア取次いで下さいまし」

主「え、旦那様、島から女が来ました」

文「はてな、無人島から来る訳はないから定めし三宅島でありましょう、何方か知らんがお通し下さい」

女「これはく旦那様、暫く」

文「さア此方へ、何うも見覚えはございませんが何方でございましたらう」

女「はい、お忘れは御尤でございます、私は三宅島に居りまして、いろくお世話どころではございません、一命をお助け下さいました八丁堀阿部忠五郎の娘お瀧でございます」

文「やアお瀧さんでしたか、まるで見違いました、赦免の後はこの辺へまいって居るのですか」

女「はい、向島の權三郎というお家に下女奉公を致して居ります、旦那様が島においで

の時分、折々お話のごぎいしました大伴蟠龍軒」

文「えッ」

女「その大伴がまいりました」

文「えッ、そゝそゝそれは何方へ」

女「花見がてら權三郎方へまいりました」

文「それは何時の事で」

女「今日のごぎいします、此の十四日に松平様とかのお役人様方をお連れ申すから、八九人前の膳部を整えて置くようにというお頼みでございします」

文「ウム」

女「私は他事とは云いながら、命の恩人の敵、すぐに飛びかゝろうかと思いましたが、先は劍術遣い、女の瘦腕でなまじいな事を仕出かして取逃すような事がありましたは、御恩を仇で返すようなものだと思ひ直しまして、何うしようかと案じて居ります矢先、御当家の御息さんから、近頃私の家の隠居所に島から帰った侠客がいますと聞いたことを思ひ出しまして、それとなくかまを掛けて聞きますと、確かに旦那様のようにございしますから、直ぐとは存じましたが、ひよつと途中で蟠龍軒に気取られるといかぬと思ひまして、

日の暮々くれぐれに出かけてまいったのでございます」

という知らせ、情は人の為ならずとは宜よう申したものでございます。

四十三

文治はお瀧の注進を聞きまして、飛立つばかり打悦び、

文「フォーム、この十四日に蟠龍軒が權三郎方へ来るとな、辱かたじけない、その大伴は十四日の何時頃来ますか、定めし御存じでしょうな」

女「多分昼前からまいるように申して居つたように聞きました、お帰りは確かに夕方ゆうかたと申しました」

文「この御親切は決して忘わすれませんが、さ、お前さんは人に心付かれぬように早くお帰り下さい、お礼は後あとで致します」

女「何どう致しまして、そんなお心遣こころづかいには及びません、左様なら旦那様、追つてました私わたくしからお礼をいたします」

文「それこそ無用、これが何よりの礼だ、この文治は生れてより是れ程悦ばしいお礼を

受けた事はござらぬ、千万辱けのう存じます」

と両手を支ついて居ります。

女「旦那様、それでは恐入ります、何どうぞお手をお上げ下さいまし」

文「御主人……御主人」

主「はいく、すっかり聞きました、さアお使つかいなら何処どこへでもまいります」

文「御老人を使うは心ないようでござるが、大切の使ほか、外の者に頼むわけにまいらぬから、御苦労でも一寸ちよつと松平右京殿のお屋敷まで」

主「はい、あの藤原喜代之助様のお屋敷」

文「左様、この手紙を御持参下さい」

主「へえくかしこま畏りました」

ところへまた亥太郎が参りまして、

亥「へえ、亥太郎でございます」

文「お、亥太郎殿か、さアくこちら此方へ」

亥「まア御機嫌ようござんす」

文「亥太郎殿、一寸ちよつと奥へ……さて亥太郎殿、文治が改めて申入れる」

亥「へえ、何事でござんすか」

文「これまで永らく兄弟同様の縁を結びまして何から何までお世話にあずかりましたが、此の後ごこの文治の頼むことを屹度きつとお聞濟み下さるか」

亥「さりとは又改まった御口上ごこうじょう、へえ旦那のいう事なら何でも聞きましたよう、命に懸けても」

文「千万辱けのう存じます、さて亥太郎殿、かく申す文治は此の度たび一生に一度の悦ばしい事が出来ました」

亥「そいつア有難ありがたえ」

文「その悦びと申すは外ほかではない、敵蟠龍軒かたきが壮健で居りますぞ」

亥「へえ、それはく」

文「一両日中に此の近辺で対面致します」

亥「あの蟠龍軒に、そいつア有難え、野郎め、其の時こそなぶり殺ころしに」

文「それでござる、其の時お助太刀すけだちは誓つて御無用でござりますぞ」

亥「やツ、それ計りばかは旦那聞かれませんが、今まで彼奴あいつの為に何の位苦勞どくれえをしたか知れやしねえ」

文「いやさ、其^{そこ}処^こがお頼^{たの}みだ、武士の敵討^てに他人の力を借りたとあつては後世の物笑いになります、今まで文治が苦勞をした甲斐がありません、さア此の道理を聞分けて、御心情はお察し申すが必らず助太刀して下さるな」

亥「へえく分りやした、そんなら宜^ようござんす、併^{しか}し唯^{たゞ}見ているだけなら宜^ようござんしょう」

文「それは御勝手、成るべく遠くへ離れて御覽下さい」

亥「併し先方に助太刀があれば」

文「いや、それも御無用」

亥「それじゃア旦那^{あんな}余りじやアねえか」

文「はい、瘦^{やせ}ても枯れても文治は侍でござります」

亥「そりやア云わずと分つて居ます、それじゃア皆^{みんな}に断らずばなるまい」

文「どうぞ宜しく頼む、なるたけ人に知れぬよう、万一逃がしたら百日の何^{なん}とやら、その事が分つたら一盃^{いっぱい}やりましょう、これ町や」

亥「いや、私^{わっち}ア酒は絶つて居りますから」

文「はて、それは又何^{なぜ}故^こに」

亥「それだから少しやア手伝わして下さいと云うんです」

文「いや、それ程に思ってくれる御親切は辱けないが、武士の面目めんぼくに関わるから」

亥「え、宜ようがす、御機嫌宜う、十四日にやア一生に一度の楽たのしみ、早朝から見物にまいりやしよう」

文「左様なら」

亥太郎は表へ出まして、

亥「あゝ、いつに変わらぬ武士の魂、当世に二人とねえ男だなア」

入れ違いに藤原喜代之助が入って参りまして、

喜「文治殿、藤原でござります、先程から亥太郎殿がおいでの様子ゆえ少々控えて居りました、数年御苦勞の甲斐あつて此度こんどの悦び、お察し申上げます」

文「ようこそお出で下さいました、是に過ぎたる悦びはござりません、今日までの御助力有難うぞんじます」

喜「時に文治殿、予てお話の小野おの氏の脇差、中身は確か彦四郎定宗と覚え居りますが、拵こしらえは何でござりますか」

文「縁ふちかしら頭は赤銅魚子、金にて三羽の千鳥、目貫めぬきは後藤宗乗の作、鰐つばは伏見の金

家の作であります」

喜「承知いたしました、様子に依つたら御主人へ申上げて置きましよう」

文「いや、それは余り大業おおぎようです、時の御老役のお耳に入れるまでの事はございませ
ん」

喜「併し御前へ上りますと折々文治は何方に居るのであろうというお尋ねがござります
ゆえ」

文「いつに変わらぬお情、切腹を御免になり、又流罪を御赦免下さいましたのも、皆其
許のお執成とりなしと右京殿の御仁心ごじんしんによる事、文治は神仏より尊とうとく思うて居ります」

喜「いや、それと申すも、其許の日頃の行状が宜よければこそ、我らは真に世の中の鑑かざみと
信じて居ります、時に御家内様、敵かたきの行方が知れまして嘸さぞく々お悦びでござりましよう」

と一通りの挨拶をして、大分夜よも更けましたゆえ藤原喜代之助は暇いとまを告げて、一先ひとまず我
家へ帰りました。

喜代之助は一旦我家へ帰りましたが、夜の明くるを待兼て、其の夜の中に奥の女中に、喜「夜更よふけにて恐入りますが、文治夫婦のお物語を申上げとうござる」

と取次を願いました。右京殿はお側の者を相手に一口召上つておいでの所へ、女中のお取次、早速御面会、喜代之助が

喜「予かねてお話のござりました文治事こと、来きたる十四日夕申刻頃な、つ、向島に於て舅の敵大伴蟠龍軒を討ちます」

と申上げますと、

右京「本来ならば早速町奉行を呼んで取鎮め方を申付くべき筈であるが、予て義侠の心に富みたる業平文治が、舅の敵を討つとあつては棄置く訳にも行くまい、承まわれば蟠龍軒とやらは宜よからぬ奴じやそうな、討たせるが宜い」

と仰せられて、其の夜密書を藤原に持たせ、「文治の身の上に万一の事なきよう忍びやかに警固致し候うように」と御老中お月番松平右京殿より南町奉行石川土佐守殿へ御内達になりました。委細承知の趣おもむきを申上げて、それ／＼手配りを致しました。此方文治は其の夜から湯を沸かして身体を浄め、ゆる／＼十四日を待つて居ります。またお町も例いっになく磨き立て、立派に髪を結上げまして、当日は別して美しく化粧を致しました。只さえ

人並勝れた美人、髪の出来たて、化粧のしたて、衣類も極々上品な物を選びましたので、
 いや綺麗な何の眼が覚るような美人であります。殊に貞女で、女の業は何でも出来るとい
 うのでありますから、文治とは好一對の美夫婦であります。頃は向島の花見時、一方
 口の枕橋近辺に其れとなく見張つて居りますので、往來の人は立止りますくらい、文治
 は遙か離れて向島より知らせの來るのを待受けて居ります。そこら辺に八丁堀の同心がち
 らく見えるは、余所ながら文治夫婦を警固して居るのでござります。それから又權三郎
 の入汐から三圍渡し、竹屋の渡しは森松、國藏が持切りで見張つて居ります。其の頃
 は今と違ひまして花見の風俗は随分下卑たもので、鼻先の円くなつた百眼を掛け、一
 升樽を提げて双肌脱ぎの若い衆も多く、長屋中総出の花見連、就中裏店の内儀さ
 ん達は、これでも昔は内芸者ぐらいやつたと云うを鼻に掛けて、臆面もなく三味線を
 腰に結び付け、片肌脱ぎで大きな口を開いて唄う其の後から、茶碗を叩く薬缶頭は、赤
 手拭の振り鉢巻、一群大込の後から、脊割羽織に無反の大小を差し、水口或は八丈
 の深い鰻頭笠を被つて顔を隠したる四五人の侍がまいりました。確かにそれと思いま
 した、顔は少しも見えませぬ。文治は扱はと身固めをして、件の侍の近寄るを待つて居
 ります後から、立花屋の俵が予ての約束に従ひ、洪団扇をもつて合図を致しました。と

ころが、ずぶろく酔うた亥太郎が横合からひよろ／＼出かけまして、突いきなり然侍の笠に手を掛け、力まかせに引きますと、二人の侍は笠を取られて輪ばかり被り、真ッ赤になつて、

侍「やい待て、無礼だ」

亥「やア人ひと違ちがえだ、そんなら此こ奴いつか」

とまた側に居おる侍の笠を取ろうと手を掛けますと、一人は其の場を外はずして逃げようとする後うしろから、立花屋の俵わづが怖こわ々／＼ながら洩団扇で合図をいたしました。

亥「それッ」

と亥太郎は飛び掛つて笠へ手をかける、其の手を取つて振ねじ上げようと致しましたが、仮にも十人力と噂のある左官の亥太郎、只今でも浅草代地の左官某が保存して居おるそうです、亥太郎が常に用いました鍔こて板いたは、ざつと一尺五六寸、軽子かろこが片荷程かたにの土を其の板の上に載せますと、それを左に持ちまして、右の手で仕事をするかほどと申します。斯程だいりきの大力ある亥太郎、なか／＼一人や二人の力で腕を振上げるなどという事の出来るものではござりません。

亥「この三さん一びんめ、生意気なことをするな」

と忽たちまち其の手を振返しました。ところへ文治が駈はせ寄つて亥太郎の腕を押え、

文「亥太郎殿、こんな事があるうと思えばこそ、あれ程頼んだではないか、お控えなさい」

亥「へえ〜」

文「御免」

と其の侍の笠に手をかけ、ぽんと※り取りました。

文「いや大伴蟠龍軒、久々で逢いましたな」

はたと睨み付けますと、後に笠の輪ばかり被って居りました四人の侍、「汝、無礼者」

と刀に手をかける其の横合より、八丁堀の同心体の人、

「これ〜お控えなさい、舅の敵討でござるぞ、それとも尊公達はお助太刀なさる思召か」

侍「いや、助太刀ではござらぬ」

同心「左様ならお控えなさい」

亥「やい三一、ぐず〜しやがると豊島町の亥太郎が打殺すぞ」

同「其の方の出るところではない、お控えなさい」

亥「何だと」

文「おい亥太郎殿、お役人様だぞ、控えろ、さア大伴、もう斯うなったら致し方はござらぬ、侍らしく名告なのつて尋常に勝負なさい」

侍「何事かは知らぬが、人違いではござらぬか、よし又拙者が大伴にもせよ、敵といわれる訳はござらぬ」

文「卑怯なことを云うな、過ぐる年三十日の夜、お茶の水にて小野庄左衛門を切殺し、定宗の小刀を奪い取りし覚えがあろう、論より証拠、その差添さしぞえは正しく庄左衛門の差添しつか、然らずと云うならば出して見せえ、小野の娘お町は今いまは斯く申す文治の妻なり、お町く、これへ参れ」

と云われて大伴蟠龍軒は顔色がんしよく土の如く、ぶる／＼震えて居ります。

四十五

お町は敵討の支度かい／＼しく現われ出で、

町「おのれ蟠龍軒、眼さえも見えぬ父上様を、よくも欺だまして引出し、無慚むざんにも切殺したなア、さア汝おのれも武士の端くれ、名告なのつて尋常に勝負せい、さア／＼悪党、いかに／＼」

時に友之助、

友「やい蟠龍め、この煙草入は覚えが有ろう、この友之助が其方へ売った煙草入、お茶の水の人殺しの時、亥太郎さんに取られたであろう、さア何うじや、えゝ、この意気地無しめが」

いかに卑怯な蟠龍軒でも、もう斯うなつては逃げる訳に参りませぬ。

蟠「ウーム、かく申す大伴の道場へ夜中切込んで、泥坊同様なことをしたのは其の方どもだな、よし、片ツ端から切伏せくれん、さア支度いたせ」

と言いながら四辺を見ますると人一ぱい。國藏、森松、亥太郎始め、皆々手にく獲物を携え、中にも亥太郎は躍起となつて、

亥「さア人面獣心、逃げるなら逃げて見ろ、五体を微塵に打砕くぞ」

文「大伴氏、最早逃げようとして逃すものでない、積る罪業の報いと諦めて尋常に勝負せい、お町、其方少し下つて居れよ」

相手は大勢、蟠龍軒は隙あらば逃げたいのは山々でござりますが、四辺は一面土手を築いたる如く立錐の余地もなく、石川土佐守殿は忍び姿で御出馬に相成り、与力は其の近辺を警戒して居ります。尚お右京殿の使者も忍び姿にて人込みの中に紛れ込み、藤原其

の他二三の侍も固唾かたずを呑んで見張つて居ります。文治は静かに太刀を抜放ち、

文「さア大伴氏、其許そこもとは舅の敵の其の上に、よくも此の文治が面部きずに疵を負わし、痰た唾んつばまで吐き掛けたな、今日こそ晴れて一騎討の勝負、疾とくく打つて来い」

蟠龍軒はぶるく総身そうみに震いを生じ、すらりと大刀抜くより早くお町の方を目がけて一太刀打込みました。

文「何をするツ」

と文治は横合より打込む太刀を受け止め、

文「女を相手にしようとは卑怯な奴じやな、さア此の文治が相手だ」

時に見物一同声を挙げて、

「馬鹿野郎、卑怯な奴だ、叩たツ切つてしまえ」

乙「どうだえ、女が切られなくて宜よかつたなア」

丙「どうも美しい女だなア、あの後姿の好いいこと、桜の花より美くしいや、ちよつと姉ねえさん、此方こつちを向いて顔を見せておくれ」

丁「気楽なことを云うな」

同心「これ黙れツ、やかましい」

甲「見ろく八丁堀が見張っているぞ、併し今日の花見は宜い日だったなア、雨が降出さねえと好いがな」

乙「馬鹿野郎、こんなに日が当って居るじやねえか」

甲「でも己の頭へ露が垂れたぞ、やア今日の雨は腐っていると見えて馬鹿に臭いなア」と後を振向いて見ますと、糞柄杓を担いだ男が居ります。

甲「この野郎め、途方もねえ野郎だ」

同心「これ百姓、静かにしろ」

見物「何だ笹棒め、糞の掛けられ損か、それ打込むぞ、やア御新造危えく、此方へお出でなせえ、やアレ危えッてば」

こゝぞと文治は打込もうと隙を窺って居りますと、蟠龍軒は其の切っ先に怖れてか、じりり後へ退ります。

見物「やア親爺、後は川だぞ、もう一足で川だ、馬鹿野郎」

と口々に呶鳴り立てられて、元来卑怯未練な蟠龍軒、眼が眩んだと見えまして、五分の隙もないのに滅茶苦茶に打込みました。文治はチャリンと受流し、返す刀で蟠龍軒の二の腕を打落しました。やれ敵わぬと逸足出して逃出す後から、然うはさせじと文治は髻を

引ッ掴み、ずる／＼と引摺り出して、

文「さアお町、親の敵存分に怨め」

町「はい……おのれ蟠龍軒、よくも我が父を殺せしよな、汝如き畜生のために永い月日の艱難苦勞、旦那様は入牢まで致したぞよ」

と胸元目がけて一太刀打込みますと、

文「お町待て、これ蟠龍軒、よくも今まで達者で居てくれたの、斯うなるからは最早怨みはないぞ、静かに往生しろよ、死後には必らず香華を手向けて遣わすぞ」

と申し聞けまして、お町に向い、

文「さアお町、十分に止めを刺せ」

町「はい、大伴、親の敵思い知れッ」

とずぶりと突き通されて息は絶えました。見物一同、山の崩れる如くわツ／＼という人声、文治は取急ぎ血刀を拭い、お町に支度を改めさせて与力に向い、

文「いずれお役人様が御出役になりましようが、市中を騒がし御法を犯せし我ら夫婦、お縄を頂戴いたします」

と大小を投出しました。

与力「いや御浪士、繩には及ばぬ、併し大小はお預かり申す、ゆるくお支度なさい」
 文「有難う存じます、お町支度は宜いか」

同心「大分お疲れの様子、こゝに薬が有りますが、同役、水を」

文「何から何までお手数をかけまして恐入ります、私は気付には及びませぬ」

法は法、拵げる訳になりませぬから、文治お町の兩人を駕籠に乗せて奉行所へ引立てました。花時の向島、敵討があると云うので土手の上は浪を打ちますよう、どや／＼押掛けてまいりまして、蟠龍軒の死骸を見ては唾を吐くやら蹴飛ばすやら弥次馬連が大騒ぎをして居ります。此方は奉行所、一応吟味の上、

奉行「悪漢無頼の曲者、殊に舅の仇を討つは武士の嗜み、天晴な手柄」

というお誉め言葉がありまして、早速帰宅を許されました。此の事がパツと世間に広まりまして、さア諸家から召抱えにまいること何人という数知れず、なれど文治は、

文「手前は主取りの望みはござらぬ、折を見て出家いたす心底でござる」

と一々断りましたが、旧主堀丹波守殿よりの仰せは拒むに拒まれず、余儀なく隠居同様として親の元高三百八十石にてお抱えになりました。近頃まで御藩中に浪島という名跡が残つて居りました。又女房のお町は長命でありまして、文政年間の人でお町と知

合いの者も大分あつたそうでござります。後の業平文治の敵討、これにて終局といたしま
す。

(抛時事新報社員速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の四」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年9月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の四」春陽堂

1927（昭和2）年6月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※誤記等の確認に、「三遊亭円朝全集 第三巻」（角川書店、1975（昭和50）年7月31日発行）を参照しました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年2月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

後の業平文治

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>